二次元ドリーム文庫208



ハーレムレジスタンス2

Harem Resistance

竹内けん
挿絵／かん奈

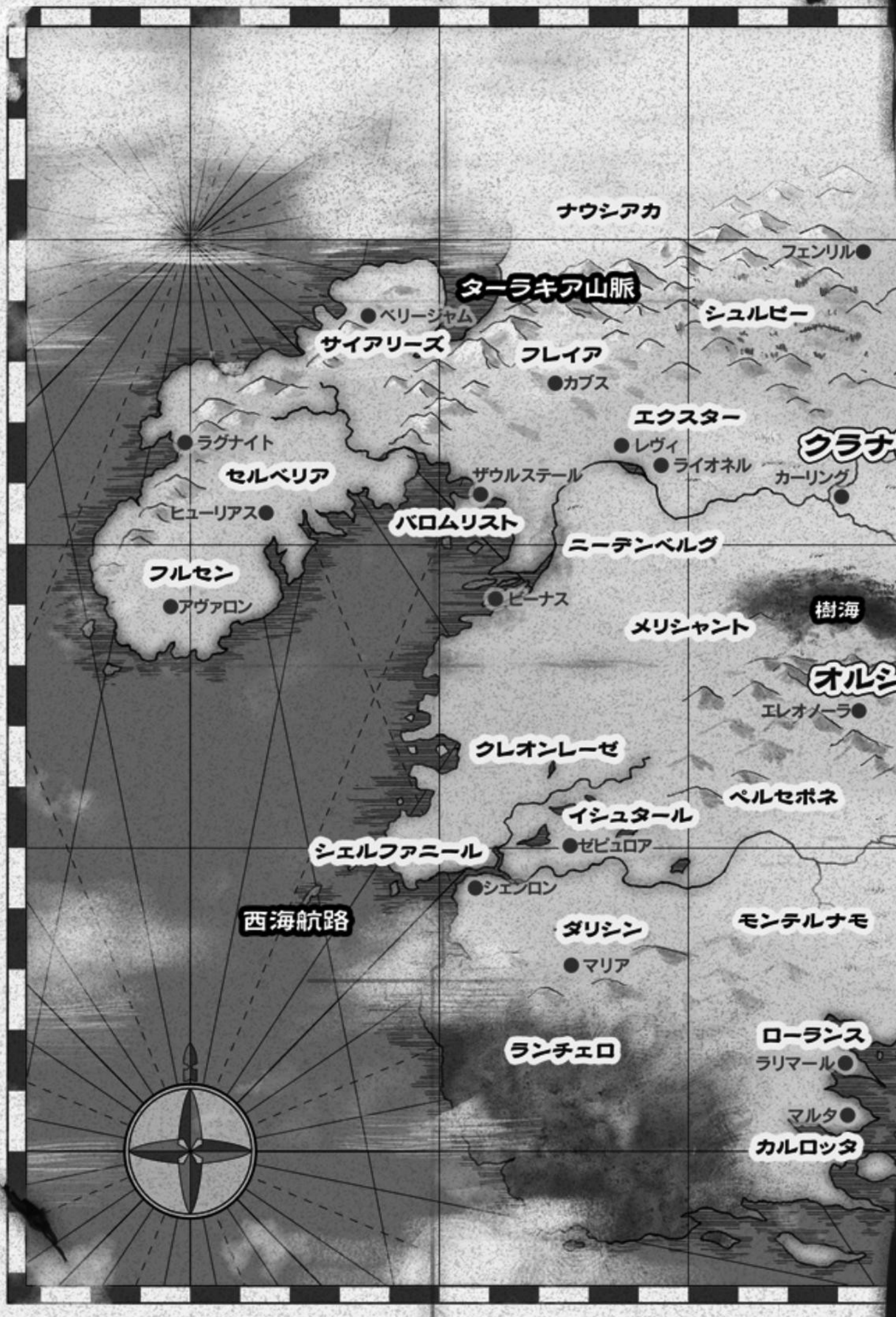




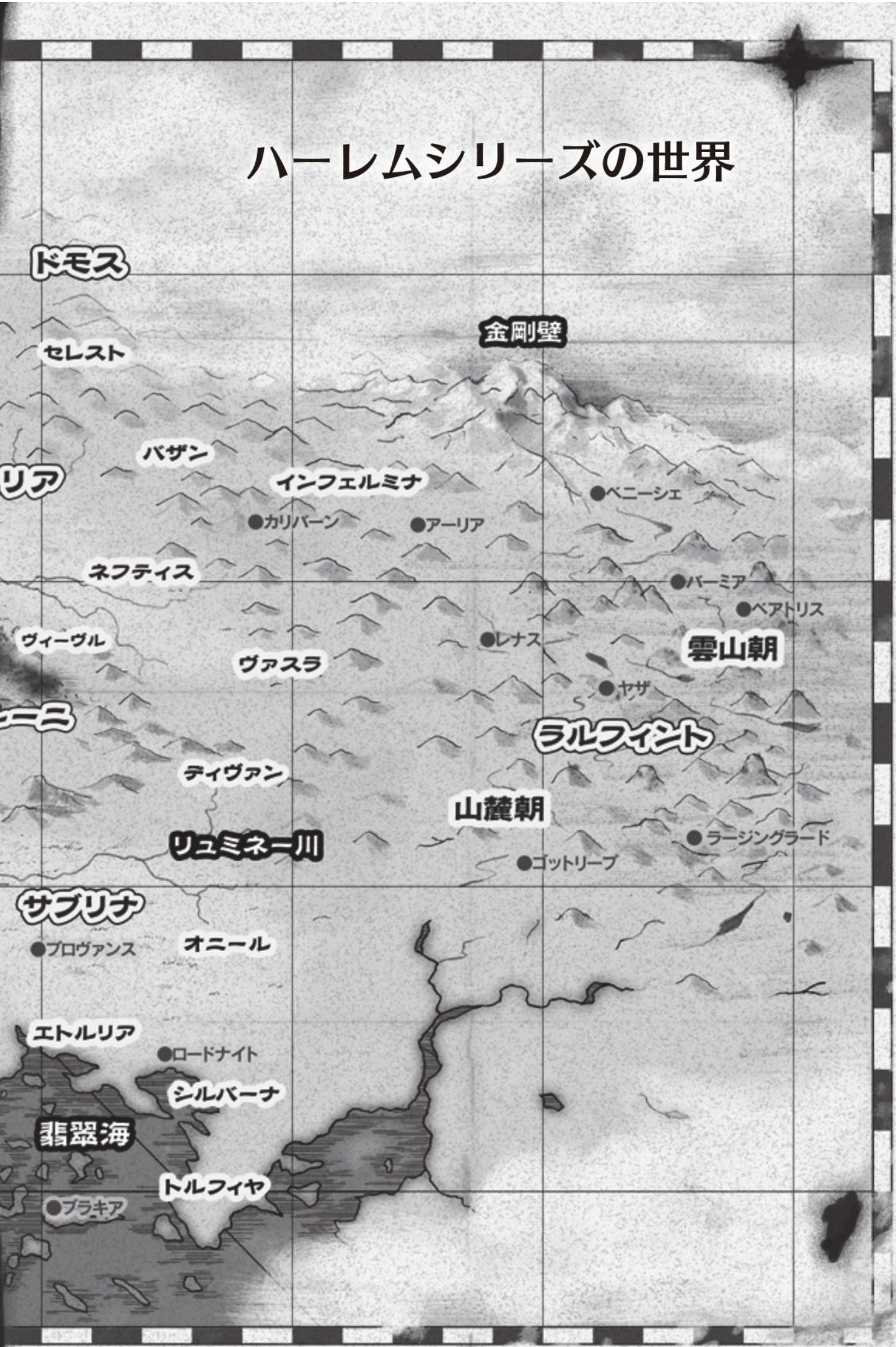
小説 竹内けん
挿絵 かん奈

ハーレムレジスタンス2

Harem Resistance


ナウシアカ
フェンリル
ターラキア山脈
ベリージャム
シュルビー
サイアリーズ
フレイア
カブス
エクスター
ラグナイト
レヴィ
クラナ
ライオネル
セルベリア
ザウルステール
カーリング
ヒューリアス
バロムリスト
ニーデンベルグ
フルセン
アヴァロン
ビーナス
樹海
メリシャント
オルシ
エレオノーラ
クレオンレーゼ
ペルセポネ
イシュタール
ゼピュロア
シェルファニール
シエンロン
西海航路
ダリシン
モンテルナモ
マリア
ローランス
ランチェロ
ラリマール
マルタ
カルロッタ

ハーレムシリーズの世界







登場人物紹介
Characters

ブライザ
サイアリーズ王国の一揆の指導者イルベルトの妹。「薔薇の剣姫」の異名を持つ女騎士。



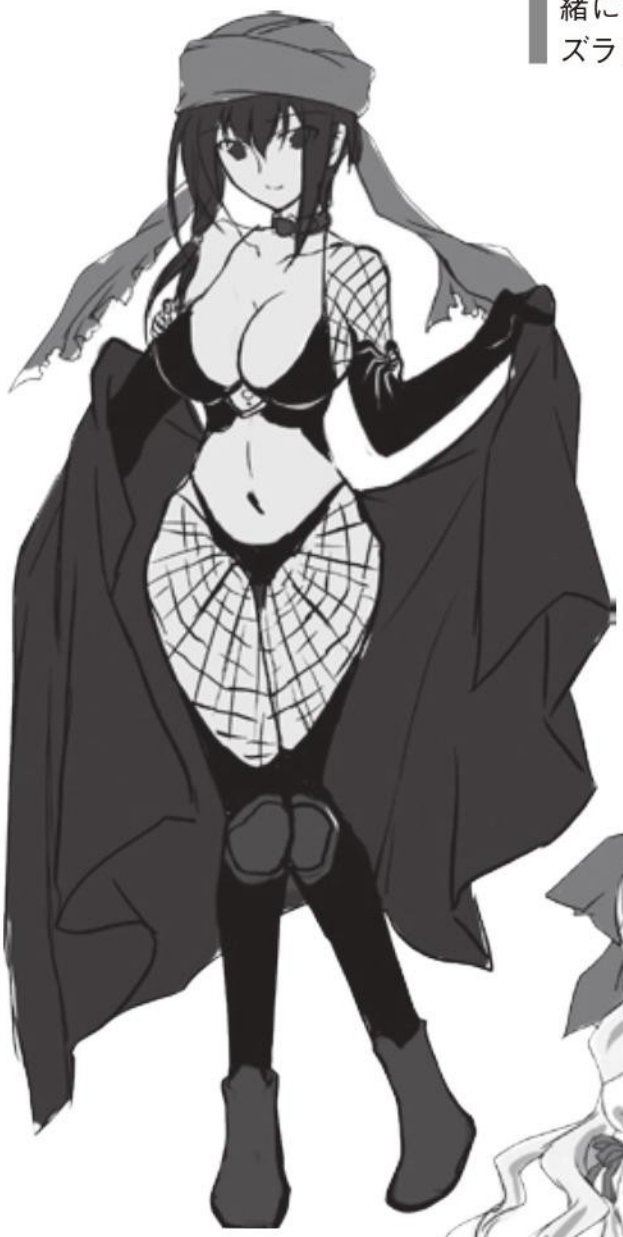
ヴァレリア
セルベリア王国の貴族であり、戦では無敵を誇る女将軍だったが、エルフィンに敗れ捕虜となる。

エルフィン
暴君が治めるセルベリア王国に反旗を翻し、祖国フルセンの領主となった少年王。

カーラ

セルベリアの女将軍。かつてヴァレリアと一緒にエルフィンにイタズラしていた。





レイテ

かつて「紅蜘蛛」と呼ばれ、暴れ回っていた女怪盗。エルフィンを反乱軍のリーダーに仕立て上げた。



ナターシャ

エルフィンの従者。主君の言葉を受け、一生パンツを穿かないと誓う。

第一章　薔薇の剣姫　009
第二章　薔薇の棘　048
第三章　薔薇の花弁　085
第四章　薔薇の罠　125
第五章　薔薇、散る　159
第六章　狂い咲く薔薇　210

第一章　薔薇（バラ）の剣姫

「おまえがエルフィンか？」

その春、西方半島は、嵐の中の小休止といった状態にあった。

十年前。セルベリア王国は、フルセン王国、サイアリーズ王国といったライバルを蹴散らし、半島統一を果たした。しかし、現国王ジューザスの失政、いや悪政により、人心を完全に失ってしまっていた。

サイアリーズ地方を中心とした一揆が続発。さらにはフルセン王国の末裔エルフィンが反旗を翻したのである。

セルベリア王国は、国王の従妹にして、国内最大貴族で「大天使」の異称のある大将軍ヴァレリアを鎮圧に向かわせたが、失敗。

それどころかヴァレリアは捕虜となり、その機動戦力を完全に失っていた。

あとは、いつフルセン王国の新しき王エルフィンが、暗君ジューザスから半島を簒奪（さんだつ）するための兵を進めるか、その時がくるのをみなが固唾を飲んで見守っている。

そんな情勢の中、今や時の人となったエルフィンの居城アヴァロンを、一人の、それでいて重要な使者が訪れた。

「これはようこそ、遠いところをよく来てくださいました。ぼくがフルセン領主エルフィ

ンですよ」

室内に入ってきた使者を、エルフィンは椅子から立って出迎えた。

それは背の高い女である。

年の頃は二十歳を少し越えたところだろうか。

並の男より上背があり、骨格ががっちりしている。それでいて贅肉と呼べるものはまったく感じられない。

肩口にかかる程度の赤紫の波打つ髪を、髪飾りで後ろにまとめているようだ。耳には魔法宝珠で作られた青いイヤリングが輝く。

切れ長の目元に、鋭く輝く緑の瞳。高い鼻に、薄い唇。尖った顎。華やかな美貌だというのに、その表情には甘さを、微塵も残していなかった。

肩から両腕までを大胆に出した緑の厚手の上着は、太腿の大半を露出させるほどに短いスカートと一体になっている。この上から腰当て、臙脂色の短マント。二の腕には革の籠手。足下には頑丈そうな革ブーツ。

腰に巻かれた武骨なベルトからは、革の巻かれた剣の柄が見える。

わざとエルフィンのほうから、武装解除には及ばない、と衛兵に申しつけておいたのだ。

その実戦重視の装いは、いかにもレジスタンス軍の女闘士といった雰囲気である。

骨太の美人。まるで鍛え上げられた刀剣のようだ。鋭利な刀剣ではない。どんな乱暴な扱いをしても折れない実戦で役立つ頑丈な刀剣。そんな印象を見る者に与える。



「……」

エルフィンが相手を観察したように、使者のほうでもエルフィンを観察していたのだろう。きつめな眼差しを意外そうに見開いていた。

「何か？」

「いや、失礼した。噂には聞いていたがあまりにも若いので……」

「貫禄不足で申し訳ない」

今や国家を覆そうという梟雄（きょうゆう）にしては、エルフィンの年齢はあまりにも若い。まだ二十歳にも達していないのだ。

彼女のように驚く者も珍しくない。慣れた反応であったから、気分を害することはなかったが、秋霜烈日といった雰囲気の女闘士は慌てて威儀を正した。

「ご面会くださり、嬉しく思います。サイアリーズ義勇軍代表イルベルトが妹ブライザです」

「サイアリーズの『薔薇の剣姫』にご足労いただいて光栄です」

エルフィンが握手を求めると、ブライザと名乗った女は無言で一礼してそれを無視した。非礼ではあるが、戦士として無闇に人の手を握るつもりはない、ということだろう。彼女にとってここは敵地なのだ。

その用心も決して過剰とは言えない。

あからさまに警戒されていることを見せつけられても、エルフィンは苦笑を浮かべるで

もなく、受け入れた。

（刺々しい女だ。薔薇に例えられるのもわかるな）

造形美として極めて美しいことは万人の認めるところだろうが、全身から棘が出ているかのような緊迫感だ。下手に触れると怪我をする。いや怪我では済みそうもない剣呑（けんのん）さを撒き散らしている。

サイアリーズ一揆では、代表イルベルトに代わって、実妹である彼女が最前線に立つことが多いようだ。

凄まじい白兵戦能力の持ち主であり、その勇姿は『薔薇の剣姫』という渾名を崇め奉られるほどである。一揆軍内の人気も大変なもので、事実上のサイアリーズ一揆軍のナンバーツーだ。

「まずは、かけられよ」

「ありがとうございます」

ブライザは素直にソファーに座った。小さなテーブルを挟んだ向かいにエルフィンは、腰を下ろす。その拍子に、何気なくブライザの太腿を見てぎょっとした。

戦士としての動き易さを優先しているのだろう。スカートの裾がかなり短い。ブライザは礼儀正しく、膝を閉じ、揃えた両足を左に傾けている。もうちょっと膝の力を緩めてくれたら、中身が見えてしまいそうだ。

見えそうで見えない女性の神秘の部分はともかく、見えている太腿も魅惑的だ。程よい

筋肉がついていて、細く形がいい。肌もツヤツヤしていて、思わず触ってみたくなる。

（すげぇ、美脚っ!?）

思春期の少年が、綺麗なお姉さんの太腿に魅せられ、そのスカートの奥に視線を吸い寄せられてしまうのは不可抗力というものだろう。

「……」

一瞬、我を忘れた少年だが次の瞬間、きつい眼差しを顔面に感じて我に返った。

軽く咳払いをして、根性で視線を逸らす。

（何を考えているんだぼくは。ようやくきたサイアリーズ一撲軍からの使者だぞ）

待ちに待っていた使者であるが、主従関係はおろか、まだ同盟すら成立していない。形の上では同等だ。

むしろ、感情的には恨まれている覚えは十分にある。失礼なことがあっていいはずがない。

「失礼します」

いささかバツの悪い空気を払うように、淡い黄金の波打つ長髪をチェリーレッドの大きなリボンで結わえ、白い清楚なブラウスに、臙脂色のロングスカートを纏い、胸元に蝶々のブローチを付けた少女が、盆にコーヒーを乗せて入ってきた。

エルフィンの身の回りの世話をするナターシャである。

「……」

持参されたのは、コーヒーとチョコレートケーキだ。
配膳される間、城の主人と客人はなんとなく黙って相手の様子を窺う。
ジューザス王の悪政の被害をもっとも受けたのが、サイアリーズ地方である。
同じセルベリア王国に滅ぼされた王国とはいえ、フルセン王家とサイアリーズ王家では、その終末が少し違う。
フルセン王国は末裔たるエルフィンが助けられ、諸侯として任じられたのに対して、サイアリーズ王国は最後まで戦い、一族郎党が全滅した。
そのためサイアリーズ地方には、保護者がなく徹底的に搾取されてしまったのだ。それに耐えられず、農民たちは激発した。
しかし、その道のりは苦難の連続である。
つい半年前にも、ヴァレリアを主将とする反乱鎮圧軍によって叩きのめされた。
ちなみにその討伐軍にはエルフィンも副将として参加。作戦を立案した。
いくら情勢が変わったとはいえ、そんな相手と慣れ合いたくない気持ちは理解できる。
場を和ませようとエルフィンは、テーブルに並んだケーキを勧めた。
「まずはケーキなど召し上がりませんか。これはこちらのナターシャの手作りなのですよ。彼女は料理の名人でして美味しいですよ」
「いや、結構」
エルフィンに紹介されたナターシャは空になったトレイを胸に抱き嬉しそうに笑顔を浮

かべたが、ブライザはケーキに手をつけないどころか、コーヒーにも目もくれない。
ナターシャはしょんぼりと一礼して部屋を出ていった。
（予想はしていたが、やっぱり前途多難だな）
エルフィンは内心で溜息をついた。
ここまであからさまだと清々（すがすが）しいほどだ。
サイアリーズ一揆軍が使者を寄こした以上、その要件は決まっている。
対セルベリア王国の共闘だ。しかし、敵の敵は味方という論理で結びつこうというだけで、それ以上の関係にはなりたくない、ということだろう。
しかしながら、エルフィンとしてはそれでは困るのだ。
エルフィンもまたお菓子を楽しむ趣味はなかったので、ごく事務的に会談を進めることにした。
「さて、それでは最初に確認しておきましょうか。貴女はサイアリーズ義勇軍の全権特使か、それとも単なる使いっパシリですか？」
「……」
じろりっとエルフィンの顔を見たブライザは、ややあってから口を開く。
「兄には連絡要員として留まるように、と申し付かっております」
「人質ということですか？」
「そう取ってもらっても構いません」

エルフィンは改めて、使者の姿を見た。
身内を人質に出すという以上は、エルフィンの麾下（きか）に入る、ないしはそれに準じるという意味であろう。
サイアリーズ一揆軍単独では、セルベリア王国を覆せない。
サイアリーズ一揆は、ごく自然に同時多発的に発生した。何せ普通に生活をしていて食べていけないのだから、鎮圧しても鎮圧しても、雨後のタケノコのように発生する。
そんなまとまりのない一揆が、一人の男の登場によって劇的にまとめ上げられることになる。
その男の名をイルベルトという。
元々はサイアリーズ地方の海運で財を成した富豪である。特に貴族階級の出身というわけではないようだ。
サイアリーズ地方の北東には、ナウシアカ王国がある。
そことの貿易を取り仕切っている者たちを、俗に北海商人という。
ただし、現在はセルベリア王国の情勢が混乱していることもあって、密貿易がほとんどであるようだ。密貿易をする商人、すなわち海賊である。
そんな海賊と同義語のような北海商人の一人であったイルベルトは、サイアリーズ地方の人々が困窮するのを見るに忍びず、自らの私財を売却して食糧を配った。
それで名声を獲得したのだが、そんな富があるのなら、ということでセルベリア王国は

さっそく、その余剰財産を没収しようとした。
それに施しを受けた民が反発。イルベルトを守ろうと蜂起した。
最初から意図したのかどうかは不明だが、以後のイルベルトはサイアリーズ地方の民衆に祭り上げられる形で、頭目になった。
彼という核を持つことで、各地で散発的に起こっていた一揆は、一つのまとまりを見る。とはいえ、所詮は貧民が中心の烏合の衆だ。
軍隊の前にはどうにもならない。何度も何度も討ち破られている。しかし、民衆によってイルベルトは逃がされ、生かされた。
きっとタフで狡猾な男だ。そうでなければ生き残れなかったであろう。
セルベリア王国が弱体化した原因の一つは、間違いなくこのサイアリーズ一揆との終わりなき闘争のせいだ。
これがなければエルフィンが、故郷に帰り独立することなどできなかったであろう。
その意味でエルフィンから見ると恩人だ。しかし、サイアリーズ一揆のほうから見れば、別にエルフィンを新たな王とするために死闘を繰り返してきたわけではない。
「貴女たちがぼくを敵視し、警戒しているのはわかっているつもりだ。しかし、ぼくは貴女たちに恨みはない。同志だと思っている。どうか信頼してもらいたい。貴女がこの地に留まっている間、なんら不自由させないことを約束しよう。城内も好きに動き回ってくれて構わない」

「おそれいります」
エルフィンの好意に対して、ブライザは嬉しげでもなく当然だ、といった顔で応じた。
「それから海路を使って、食糧を送り届けさせるつもりだ」
ちなみにエルフィンにも商人の後ろ盾はある。フルセン王国は半島の先端にある土地柄、海運は盛んだ。こちらもけっこう海賊化が進んでいて統制が大変なのだが。
その申し出は、ブライザの矜持を傷つけたようだ。細い眉がグイッと上がる。
「我々は乞食ではない」
「もちろん、ただであげようというのではない。サイアリーズ義勇軍の働きを期待してのことだ。それに貴女の腕前に対する前払いでもある。連絡要員とはいえ、貴女は我が軍でその魔剣を振るってくれるのだろう」
「はい……」
サイアリーズ地方が相当酷いことになっていることは、想像に難くない。飢えて一揆を起こしたのに、それを武力で鎮圧されたのだ。きっと生き地獄であろう。
少しでも食糧の援助はありがたいはずだ。
施しなど受けたくないだろうが、背に腹は変えられない。ブライザは、悔しげに受け入れた。
その対価というわけではないが、エルフィンとしては、イルベルトに極めて近いであろう彼女から、少しでも情報を引き出しておきたい。

まったく心を開いていない様子のブライザの顔を見ながら、エルフィンはコーヒーをブラックのまま口に運んだ。

「ところでサイアリーズ義勇軍の兵力は現在、いかほどか？」

「三十万」

エルフィンの質問に、ブライザは笑いもせずに答えた。

半年前の一揆の時も、サイアリーズ一揆軍は三十万を名乗っていた。しかし、これは公称というものだろう。

実際は五千人。いや、遠征となったら千人もきついであろう。

（手の内を晒すつもりはないか）

これ以上、彼女に何を質問しても、表面的な答えしか返ってこない、ということを悟ったエルフィンは頷いた。

「わかった。イルベルト殿の力を頼りにしている。今夜は貴女を歓迎するパーティーを開こう。ぜひ参加してくれ」

「パーティー？」

不可解なことを聞いた、と言いたげな表情をブライザは浮かべた。

「なに、親睦会と思ってくれればいい。フルセンとサイアリーズの末長い友好を祈願してのことです」

エルフィンが話を打ち切ろうとすると、眼光鋭くブライザのほうから口を開いた。

「わたくしからも、一つお聞きしてよろしいでしょうか？」
「なんだい？」
喧嘩腰の相手に対して、エルフィンは悠然と応じた。
「なぜすぐにヒューリアスに兵をお進めにならないのです。もはやセルベリアは死に体です。貴公が軍を進めれば、卵を潰すが如く簡単にことが決します」
セルベリア王国は庶民の信望を失って久しい。その状態で主力軍を失ったのだ。誰が見ても死に体である。それなのにいつまでもトドメを刺そうとしないエルフィンの姿は不可解なのだろう。
（サイアリーズ一揆軍としては、我々とセルベリアが戦い苦労しているところに駆けつけて恩を売り、少しでも自分を高く売りつけようという思惑があったろうからな）
エルフィンは、ブライザの顔の向こうに、未だ知らぬイルベルトの顔を見る。
（さて、イルベルトの野心はどの程度なのだろう）
有能な男というのは、野心があるから有能なのだ。
人は目的なしに突っ走ることはできない。
イルベルトは、飢えたサイアリーズの民を見るに見かねて立ち上がった。それは真実だろう。
しかし、その目的を遂げるには権力を持たねばならない。
そして、その持ちたがっている権力とはどのような形での権力なのか。

（ぼくの下についてくれるか。ついてくれるようにするにはどうすればいいのか）

これが最近のエルフィンの一番の関心事だった。

エルフィンの野心は、セルベリア王国の版図をそのまま乗っ取ることだ。

まかり間違って、セルベリア王国領が分裂、十年前のように三国に割れてしまったのでは、意味がない。

そのためにはイルベルトには、自分の配下としての栄達であって欲しかった。

しかし、この送られてきた使者の態度を見るにつけ、その望みは薄いと考えざるを得ないだろう。

（しかし、やり方次第ではなんとかなるはずだ）

エルフィンは、イルベルトと戦って負ける気はしていない。しかし、そのことで失われる時間と人材が惜しかった。

現在の西方半島は、疲弊の極みである。これ以上の国力低下はなんとしても避けたいところだ。なんとか穏便に済ませる方法を探りたい。

「まぁ、そう慌てることはない」

悠然と笑ってみせたエルフィンは、会談を終えた。

※

「サイアリーズ一揆の首謀者の妹ブライザといえば、『薔薇の剣姫』とも呼ばれサイアリーズ地方では大変な人気者だ。ずいぶんな大物を寄こしたね」

ブライザと別れたエルフィンは、その対応を巡り側近たちと会議をした。
参加者は、古参の重鎮ロックス、マリガン。そして、レイテだ。
緋色のバンダナを頭部に巻き、臙脂色のマントで身をすっぽりと隠す。その下には成熟した女体が隠れていて、目の荒い網タイツと、黒いレザーの胸当て、過激なビキニパンツを穿いている。
かつては『紅蜘蛛』と呼ばれる女怪盗であったが、五年ほど前からレジスタンスの頭領に鞍替え。
セルベリア国王ジューザスに処刑されそうになっていたエルフィンを救出して、謀反を決意させた張本人である。
今ではエルフィンの愛人でもあった。
彼女の感嘆に、フルセンの譜代の家臣であり、筆頭家老であるロックスが顎を撫でながら応じた。
「しかし、話を聞くほどにその女の態度からは、恒久的な味方になる気配はありませんな」
戦争屋としては、セルベリア王国を平らげた後、サイアリーズ一揆との戦いも覚悟せねばと言いたいらしい。
「……」
重い空気の中、再び会議室にナターシャが、紅茶とシュークリームを持って入ってきた。
エルフィンは戯れに質問する。

「どうだい、ナターシャ。君から見たブライザの感想は？」
まさか声をかけられるとは思っていなかったナターシャは驚いたようだが、しばし考えて恐る恐る答えた。
「あの人怖いです。まるでエルフィン様を仇みたいに睨んでおられました」
エルフィンに盲目的に心酔しているナターシャは、ブライザの態度が相当腹立たしいらしい。
「まぁ、実際に仇だからな」
苦笑するエルフィンに、サイアリーズ一揆鎮圧戦に参加したことのある人々は追従の笑みを浮かべた。
誰もがフルセンとサイアリーズの同盟は、木に竹を接いだものになる、と実感させられている。
マリガン将軍が腕組みをして慨嘆した。
「それにしてもサイアリーズ一揆軍の中にだって、我々に協力的な奴もいるだろう。何も、もっとも敵対的な人材を送ってくることもあるまい。サイアリーズの奴らは何を考えているんだ」
マリガンは元々、フルセン地方の豪族だ。フルセン王国が滅んだ後セルベリアに仕え、エルフィンが決起すると、率先して寝返った。
小才子といった外見だが、なかなか機を見るに敏であり、戦争の駆け引きも上手く、エ

ルフィンは信頼している。
「それについてはいくつかの理由が考えられるな。フルセンとの連携に強硬に反対する彼女を、無理やりにでも派遣することで、我々と馴染ませ、親フルセン派に変えさせる」
「なるほど。もう一つは？」
「天に二つの太陽は必要ないって話さ」
剣も魔法もでき頭もいい。その上切れ者然とした容姿をした美人であるブライザは、反乱軍のカリスマとして、兄のイルベルトに勝るとも劣らぬ人気があるだろう。
それゆえにあえて一撰軍から切り離した。
今度のセルベリア王国を滅ぼす戦で、サイアリーズ一撰軍内での手柄をイルベルトに集中させるためだ。
そこにレイテが口を挟んだ。
「あたしは、あのお嬢ちゃんを使って、エルフィンをブスリとやろうとしているのかと思ったよ」
その予測に、場の温度は上がったがエルフィンが否定した。
「いや、今はまだ、それはないな」
イルベルトとしても、第一目標はセルベリア王国を滅ぼすことだ。
この一点については、エルフィンとイルベルトの目的は、完全に一致している。
「それがあるとしたら、セルベリア王国を滅ぼした後だろう」

ここまで推測して、エルフィンは先走りすぎだ、と自覚して首を横に振るった。
「まぁとにかく念願の使者がきたとはいえ、時期尚早ということだ。当初の予定通り出兵は刈り入れが終わってから行う。マリガン将軍には、引き続き豪族たちの懐柔を頼みたい。ロックスは軍隊の整備だ。レイテはヒューリアスの動向の監視。ついでにカーラ将軍が寝返りそうだ、という噂を盛大に流してくれ」
方針の変更はなし、ということで幹部たちは素直に頷いた。そんな中、レイテが口を開いた。
「それでどうするんだい？　薔薇の剣姫様は」
「どうするって、せっかく味方してくれるっていうんだ。味方は大事にしないと」
エルフィンは肩を竦めた。
「今夜は何はさておきパーティーだ。盛大にやろう。それからナターシャ。ちょっといいかい」
エルフィンは愛人の少女に何やら耳打ちをした。
※
「パーティーとは久しぶりですね。ね、ヴァレリア様」
戦時下である。それほど豪華なものではないとはいえ、パーティーはパーティーだ。城の人々が浮き立っているのがわかる。
いたって無趣味なエルフィンはパーティーなどを楽しむ性格ではないのだが、貴族とし

て参加しなくてはならない場合には参加するし、開かねばならない時には開く。
今回は開催者としても参加するエルフィンだが、一人で参加するのも味気ないので美女を従えていくことにした。
「き、貴様……なんのつもりだ」
エルフィンを前に目を怒らせた女は、紫銀色の豊かな長髪を結い上げて、銀のティアラで留めている。晒されている項（うなじ）が色っぽい。
白磁のような白く滑らかな肌。秀でた額に、湾曲を描いた細い眉。切れ長な目元にけぶるように長い睫。その奥で冷たく輝く藤色の瞳。よく通った鼻筋に、赤紫の紅の引かれた唇に冷笑を浮かべる。顎は細く尖っていた。
その美貌はガラス人形のような透明感があり、険が強かったが、絶世の美女であることは誰もが認めるであろう。
ボンッ、キュッ、ボンッと擬音の聞こえてきそうな凹凸に恵まれた肢体を青いセクシードレスに包んでいる。スカートには大胆なスリットが入り、太腿はもちろん、腰骨まで覗く。
「よく似合いますよ。ヴァレリア様のために特別に見繕わせたドレスですが、ご不満でしたか？」
エルフィンがニヤニヤと軽薄な笑みを浮かべながら促すと、ヴァレリアは屈辱に顔を真っ赤に染めた。

「貴様、わたしに下着を穿かせないように指示を出したそうじゃないか」
そう、現在ヴァレリアのセクシードレスの下には、ショーツが穿かれていない。穿かせないようにナターシャに命じたのは、エルフィンである。
「このドレスのスリットは深いですから、ショーツを穿くと腰布が見えてしまいますよ。それだとみっともないでしょ」
エルフィンが戯れにスカートをめくろうとしたので、ヴァレリアは慌てて手で押さえる。
「貴様という奴は、次から次へと、よくもまぁ、わたしを辱める方法を思いつくものだ」
「お褒めいただき光栄の至り」
「誰も褒めておらん」
慇懃(いんぎん)に一礼するエルフィンに向かって、ヴァレリアは噛みつきそうな勢いで怒鳴りつける。
エルフィンとヴァレリア。二人の関係は複雑だ。
フルセン王国が滅亡したおり、セルベリア国王ゼークトの妹婿にして名将ヴァミリオンは、その末裔たるエルフィンを助けて自らの屋敷で養育した。
そのためヴァミリオンの娘であるヴァレリアとエルフィンは、実の姉と弟、いや、それ以上に親しい関係として育った。
あるいはヴァミリオンは、フルセンの領民を手懐けるために、自らの娘と亡国の王子をくっつけようと初めから画策していたのかもしれない。

そういった思惑ゆえか、ヴァレリアはエルフィンに好意を持った。一度はヴァレリアのほうから、エルフィンと結婚したい、と言ったこともある。

しかしながら、運命の悪戯からエルフィンは謀反を起こし、ヴァレリアはその討伐軍の主将となった。

二人はミドガルド平原で激突し、エルフィンが完勝。ヴァレリアを捕虜とした。

しかし、ヴァレリアはセルベリア王国の藩屏（はんぺい）たる地位に拘（こだわ）り、エルフィンへの協力を拒否。捕虜の待遇に甘んじている。

エルフィンは、なんとか彼女を翻意させようと頑張ったが、彼女の意思は固かった。業を煮やしたエルフィンは、彼女を無理やり押し倒して処女を奪う。しかし、それでも彼女は頑なだった。

ヴァレリア曰く「わたしを抱きたいなら好きなだけ抱けばいい。しかし、セルベリアとの戦の協力はできない」というのだ。

彼女の覚悟を受け入れたエルフィンは、虜囚の身で反抗できないヴァレリアを徹底的に犯した。いや、徹底的に辱めた。

そして現在。恥辱に震えているヴァレリアを、付き従っていたナターシャが慰める。

「大丈夫です。ヴァレリア様。パンツを穿かない生活も、慣れるとなんてことありません」

「慣れてたまるか……」

吐き捨てたヴァレリアはまだ知らないが、ナターシャは、日常的にショーツを穿いてい

ない。

その昔、エルフィンに助けられたナターシャは、その感謝と忠誠の証として「生涯パンツを穿かない」という誓いを立てているのだ。

そんな可愛いナターシャの頭を撫でてやってからエルフィンは、意のままにならない美女に向き直って左腕を差し出した。

「では、ヴァレリア様。そろそろ参りましょうか」

「ぐっ、わたしは貴様の虜囚だ。どんな辱めも甘んじて受けよう」

エルフィンの左腕に、ヴァレリアは腕を絡めた。そして、二人は揃って会場に足を踏み入れる。

「ほぉ～」

会場から感嘆の溜息が漏れた。

若干、ヴァレリアのほうが年上だが、美男美女のカップルである。

その華やぎに会場は沸いた。

会場をグルリと一望したエルフィンは、ドレスアップしたヴァレリアと腕を組みながら、所在なさげにしているブライザに近づいていった。

主賓であるブライザだが、なんで私がこんなところに、と言いたげにむすっとした顔をしており、ドレスに着替えるようなこともせず、相変わらず腰には剣を吊るしたままだ。とてもではないがパーティーに出席する装いではない。

イヤイヤ参加しているのが見え見えで、人を寄せ付けない雰囲気を撒き散らしているブライザであったが、エルフィンはそんなことは気に留めず挨拶する。
「どうです。楽しんでくれていますか？」
「ああ」
そっけなく応じるブライザに向かって、エルフィンは従えていた美女を紹介する。
「ブライザ殿、こちらセルベリア王国の大将軍ヴァレリア様です」
「っ⁉」
ブライザの目つきが明らかに変わった。熱風のような殺気が吹きつけられる。
サイアリーズ一揆軍にとって、ヴァレリアは憎んでも憎み足りない仇である。
ヴァレリアの軍勢によって、何度も何度も鎮圧されたのだ。同志を、仲間をたくさん殺されていることだろう。
反射的に抜剣しそうになるのを、ぐっと奥歯を噛みしめて必死に耐えている。
今にも殺気を爆発させそうな客人を前に、エルフィンは何事もなく続ける。
「では、ごゆるりとお楽しみを。ヴァレリア様、ぼくと一曲踊りましょうか？」
「ああ、わかった」
ヴァレリアもまた歴戦の勇士だ。ブライザの洒落にならない殺気を十分に察しているだろうに、平然と応じる。
このままブライザの前にいても、互いにいいことは何もないとヴァレリアも納得したの

だろう。エルフィンの手を取ってダンス場に躍り出る。
甘いムーディーな曲が流れて、二人は抱きあい、チークダンスを踊る。
「それにしても貴様、サイアリーズ一揆の扱いに、ずいぶんと気を使っているようだな」
ブライザの火の出るような眼差しを横目で見ながら、ヴァレリアがからかいの声を出す。
今や日の出の勢いのフルセンである。誼(よしみ)を通じようと多くの豪族がひっきりなしにやってきているが、このような歓待の宴を開いたのは初めてである。
もちろん、ヴァレリアをこのような席に引っ張り出したのも初めてのことだ。
まさに下にも置かないもてなしである。
エルフィンは、踊りながらそっとヴァレリアのスカートのスリットから手を入れて、尻肉を撫で回した。
ショーツを穿いていないのだから、ツルツルでムチムチした生尻を直接堪能することができる。
「イルベルトには才はないが器はある」
「おまえとは逆だな」
「言っていてください」
ヴァレリアの充実した肉尻を左右から開いたり閉じたりしながらも、エルフィンは否定しなかった。
エルフィンが今の地位にあるのは、血統に対する幻想ゆえだ。フルセン王国という形が

あり、それを支える旧臣たちがいた。その核があればこそ勢力を広げられた。

しかし、イルベルトは違う。

彼は一代で成り上がった。サイアリーズ一揆をまとめ上げ、セルベリア王国を死に体まで引きずり下ろしたのだ。

はっきり言って、戦争は下手糞だ。半年前、ヴァレリアの副将として参加した時も、負ける気がしなかった。

だが、サイアリーズの人々は、本気でイルベルトを支持している。血ではなく、本人を慕っているのだ。これは厄介だ。

せっかくのダンスパーティーだというのに、政治的なことを話していても面白くない。エルフィンは話題を変えた。

「それにしても思い出しますね。昔、ぼくはヴァレリア様と、カーラの二人によくこうやって苛められた」

カーラとは、ヴァレリアが姉のように慕う女将軍だ。

幼馴染みのエルフィンに好意を持ったヴァレリアだが、お嬢様育ちゆえに性的なことをよく知らなかったのだろう。よくカーラから知恵を借りていた。

二人は仲良くエルフィンに性的虐待を繰り返したものだ。

エスカレートしたヴァレリアは、セルベリア王国主催のダンスの途中で、エルフィンの逸物を悪戯して射精させたこともある。

いわば現在の状況は、攻守ところを変えただけなのだ。
「バ、馬鹿……やめよ」
ヴァレリアの尻を撫で回していた指が、股の間から入っていき、陰唇の表面を捉えた。
「結構濡れていますね。衆人環視の中で悪戯されることに興奮しているんですね」
「そんなことあるか」
険しい顔のヴァレリアはムキになって否定するが、エルフィンの指先に感じる確かなヌメリは時間とともに増していく。
恥辱とは女を昂(たかぶ)らせる媚薬になることがある。ヴァレリアは、捕虜となってからエルフィンに執拗に犯されたおかげで、性感帯が開発され、被虐の歓びを覚えつつあるようだ。
周りの人々も、すでにエルフィンの所業、ヴァレリアの状態に気づいている。
しかし、咎めるでもなくクスクス笑っていた。
「若も若いからな」
「あのお嬢ちゃんもだいぶ素直になってきたわね」
ひそひそ声が聞こえてきて、ヴァレリアは顔を真っ赤にして耐える。
エルフィンが、ヴァレリアに執着していることは、アヴァロンの宮廷の住人ならば周知のことである。
何せ暇を見つけてはヴァレリアの監禁されている塔に出向いているのだ。
それどころか夜中に裸にして連れ出して、庭園を散歩したことまである。



そのことを家臣たちは咎めないどころか、青少年らしい発露として微笑ましく見守っていた。

「ぼくは興奮していますよ。ほら」

調子に乗ったエルフィンは、腰をぐいっとヴァレリアの下腹部に押しつけた。

男の昂りを察してヴァレリアは目を見開く。その耳元でエルフィンはねちっこく囁く。

「ヴァレリア様のこのヌレヌレのオマ○コに入りたい。そして大暴れしたいと言って、言うことを聞きません」

「あっ、やめよ、ひ、開くな。あ、溢れる……」

エルフィンの指先が、ヴァレリアの肉門を左右に開いた。

動揺したヴァレリアは男の手を股に挟んだまま、必死に膝を閉じるが、熱い液体がタラタラと流れ落ちる。

「ああ、やめよ、やめてくれ……」

恥辱に顔を真っ赤にしたヴァレリアは熱い吐息を吐き、涙目になり、エルフィンにしがみつきながら懇願する。

「このままイかせてあげてもいいですけど、そうだな」

ヴァレリアが絶頂を極める前に、エルフィンはさっと指を抜いた。透明な愛液滴る指先を軽く舐めながらエルフィンは、こちらに敵意丸出しの視線を送ってくる女を見た。

「それにしても、彼女のあの態度。ああも、敵意剥き出しだと、こちらも反発する者が出

てくる。ちょっとした対症療法が必要かな」

ちょっとした悪戯を思いついたエルフィンは、足元のおぼつかなくなったヴァレリアを連れて別室に向かった。

※

「お呼びと伺ったが……」

エルフィンが別室で待っていると、むすっとした顔のブライザが入ってきた。

会場の世話役をしていたロックスの娘ロージーに伝言を頼んでいたのだ。

「ええ、待っていましたよ。まぁ、そう怖い顔をしないで。貴女の溜飲を少しだけ下げさせてあげようと思ってね」

悠然と笑ったエルフィンは、傍らでバルコニーの手すりに掴まらせたヴァレリアのスカートに手をかけた。

「き、貴様、何をっ⁉」

慌てるヴァレリアを押さえつけ、青いドレスのスカートを豪快にたくし上げる。

同性の前で生尻を晒すことになったヴァレリアは暴れようとしたが、それをエルフィンは許さなかった。

パチン！　パチン！

肉感的な尻臀に往復ビンタを食らわす。

「ひぃッ！　あぁ、あ～♪」

気高い魂とは裏腹に、肉体的には牝として、すっかりマゾ的な性感が発達してしまっているヴァレリアは、白い尻にピンクの紅葉を鮮やかに浮き上がらせながら喘ぎ、大人しくなった。

屈辱と性感にプルプルと震えたヴァレリアは、涙目になりながらも睨みつけてくる。

「貴様は、わたしをどこまで愚弄するつもりだ」

「約束でしょ。セルベリア王国を滅ぼす手伝いはしない。その代わり、好きなだけ犯していいと言ったのはヴァレリア様ですよ」

生尻をくねらす被虐の美女の耳元でエルフィンはねっとり宣言する。

「今のヴァレリア様はぼくのものですよ。身のほどを弁えてください」

「ぐっ」

悔しげに唇を噛みながらも、覚悟を決めたヴァレリアは中腰になり尻を突き出した。

セックスに関してはかなり従順になった元上司の痴態に満足しながら、エルフィンは観客に顔を向ける。

「どうだい。貴女が仇と狙う大天使殿も、もうこの通りぼくの牝犬だ。少しは気が晴れたんじゃないかな」

「はい」

ブライザは恥じ入るでもなく、じっと同性の哀れな後ろ姿を見つめた。

少しは動揺することを期待していたエルフィンは、当てが外れて戸惑いながらも、当初

に思いついた趣向通りに声をかける。
「貴女がどうしても、彼女に復讐したいのなら、このお尻を叩くといい」
「よろしいので？」
「ああ、おもいっきり叩くといい」
エルフィンの言葉に試されている、と感じたのだろうか。きつい表情をしたブライザは進み出た。
「それでは遠慮なく」
腰に佩いていた剣の柄に手をかけたかと思うと、目にも見えない速さで抜剣。
バチン！
「ひぃっ……」
ヴァレリアの尻が横にも割れたかと思うほどの一撃だった。白い尻臀に赤い線が走ったが、割れてはいない。どうやら刃のない平部分で打たれたようだ。
「……」
驚くエルフィンの前で、無言のブライザは悠然と剣を鞘にしまう。
「ああ、ああ……」
驚愕と痛みからだろう。ヴァレリアは両目と口を大きく開き、硬直しながら震えている。やがて少しずつ全身の硬直が解けてきたかと思うと、痛みで尻が痺れたのだろう。
ダラダラダラダラと股間から熱い液体が噴き出した。

「……あ、いや、ダメ、止まらない」
失禁を止められず慌てているヴァレリアの醜態を見ながら、あまりにも予想外の顛末にエルフィンは絶句した。
この戯れを思いついたエルフィンとしては、いきなりヴァレリアの濡れた股間を見せられたブライザは恥じて逃げ出すか、そうでなくても震えながら手で軽く叩く程度だと予想していたのだ。
それがまさか顔色一つ変えずに、ここまで容赦のない一撃が加えられるとは思いもしなかった。思わず気を呑まれながら口を開く。
「貴女は容赦のない性格だな」
「閣下ほどではありません。御用がこれだけでしたら失礼します」
慇懃無礼なほどに丁寧に一礼したブライザは、すたすたと部屋から出ていってしまった。
それを見送った後エルフィンは、下半身を熱い滴で濡らしている姉とも慕う愛人に声をかけた。
「ぼく、彼女に軽蔑されちゃったかな？」
ようやく失禁は止まったが、下半身をだだ濡れにさせたヴァレリアは、顔を火照らせながらも、軽蔑した眼差しを返す。
「それはしただろ。誇りある女なら、いくら仇とはいえ、このような扱いを受けているのを見て気分がいいはずがない」

その観測を、エルフィンは全面的に認めて頷く。
「まぁ、ぼくを軽蔑することで、ヴァレリア様に対して少しでも同情する気持ちを持ってくれるといいんですけどね」
「なに取りつくろっている。完全にしてやられたくせに」
ヴァレリアの決めつけに、エルフィンは返す言葉もない。こうなったら男としての面子を保つ方法は一つだ。
「それはそうとヴァレリア様？」
「なんだ？」
「今の一撃、凄い興奮したでしょ。何せおしっこを漏らしちゃったくらいですからね」
項をさらに赤くしたヴァレリアは、恥辱にプルプル震える。
自分を仇と狙う女の前で尻と陰唇を晒して、一撃を食らって失禁だ。大天使とまで称えられ、万余の兵を指揮した身としては恥辱で死にそうなのだろう。
（誇り高い人だからな）
その気高さがエルフィンをして、夢中にさせている要因だ。
いくら辱めても、決して堕天しない大天使に、エルフィンは心底惚れている。
「そろそろ我慢できないんじゃありませんか」
「おまえ、計算違いをエッチでごまかそうなどと、器が小さいぞ！」
ヴァレリアの指摘に、エルフィンは嘯く。

「器なんて大きく見せる演技をすればいいんですよ」
「ああ言えばこう言う。ほんと可愛げのないガキだ……」
「あぁあ、こんなに赤く腫れちゃって。痣になったら大変だ」
吐き捨てるヴァレリアの言動は無視して白い尻を撫でたエルフィンは、屈み込み、剣の平で打たれた尻の跡を舌で舐める。
「あぁん、この変態がっ！」
罵りながらもヴァレリアの声はすっかり甘く蕩けている。
いくら心は気高い大天使でも、肉体は人間のものに過ぎないのだ。すっかり被虐の歓びに目覚めているヴァレリアに気をよくしたエルフィンは、同時に指先を雫に濡れる肉唇に向けた。
「欲しいって言わないと、この汚いオマ○コ、永遠に弄り倒しますよ」
「やりたいなら、したいだけすればいい。わたしは抵抗しないと言っただろう」
「ヴァレリア様からぼくのおちんちんが欲しいって叫ばないとダメです」
クチュクチュクチュクチュ……。
エルフィンの指先が媚肉を弄び、あたりに卑猥な水音を響き渡らせる。肉壺はまるで指を貪るように吸いついてきた。
「まったく……」
まるで我儘な弟に屈したお姉さんといった感じで諦めたように溜息をついたヴァレリア

は、大声で艶声を張り上げた。
「ああ、ああん……ちょうだい……。エルフィンのおちんぽ、わたしのおま○こにちょうだい」
「そう、それでいいんです。ヴァレリア様はぼくのものですからね」
最愛の女性の潔い態度に満足したエルフィンは、ズボンの中から逸物を取り出した。
すでにダンスの時からギンギンの逸物である。
それをヌレヌレのヴァレリアの陰唇に突き立てた。
「はぁん……」
じゅぷぅぅ……。
恥辱の汁に濡れた陰唇は、憎き男の逸物をなんなく呑み込んでいく。
捕虜となったヴァレリアの身体を、エルフィンはこうやって幾度となく陵辱していた。
処女を奪ったのはもちろん、フェラチオだってさせたし、アナルだって犯している。彼女の身体の中で、エルフィンの視線と指先と舌先と逸物と精液が触れていない部分は一つとして残ってはいない。
「あはっ、やっぱり、ヴァレリア様のオマ○コは最高だ」
興奮したエルフィンは、両手を腋の下から入れて、青いセクシードレスの胸元をはだけさせる。
ボロリと巨大な乳房が夜霧の中に露出した。

「うふふ、ビンビンだ」
ピンクの宝石のような乳首が二つ、ぴんっと突起していた。
それを包み込むようにして鷲掴みにしたエルフィンは、ヴァレリアの乳房を揉みしだきながら、腰を叩き込む。
「あっ、ああっ、ああ……」
「いい声です。ヴァレリア様はぼくの女。そのことをセルベリアの連中にも、サイアリーズの連中にも知らしめてやってください。さぁ！」
パン、パン、パンパンパンパン！
女の尻と、男の腰が当たって拍手音が上がる。
肉棒はズコズコと出入りして、女の最深部までをえぐり尽くす。
「ヴァレリア様、貴女はなんですか？」
「え、エルフィンの女ぁぁ」
「そう、その通りです。ぼくのものです。ぼくだけのものです。くぅ♪」
普段は冷静なエルフィンなのだが、ヴァレリアと身体を合わせると興奮のあまり、ただの少年になってしまうことが多い。
「ああ、もう、もう……」
独占欲を刺激され無茶苦茶に突き上げてくるエルフィンの勢いに追い詰められたヴァレリアが白目を剥いて喘ぐ。



その姿にエルフィンはますます興奮する。

「あぁ、ヴァレリア様のオマ○コ気持ちいい。もうイきますよ。ヴァレリア様のオマ○コの中にぼくのザーメンをたっぷり注いであげます。だから、一緒にイってください。ああ」

大好きで、セックスだって好きなだけやらせてくれるのに、決して心を開いてくれない女。

その気高い魂を汚すため、今日もエルフィンは精液を注ぎ込む。

ドビュ！　ドビュッ！　ドビュビュビュ――ッ!!!

「あ、ああ――ッ!!!」

最近の陵辱三昧の日々のせいで、ヴァレリアの身体はすっかりエルフィンの逸物に馴染んでしまい、イキ癖ができてしまっていた。

涎を噴き、涙を流しながらアヘ顔を晒したヴァレリアは気持ちよさそうに絶頂する。

※

「王都で大きな動きがあったよ」

居城アヴァロンで、エルフィンが最愛の女性を調教することに夢中になっている間に、季節は変わった。

初夏。セルベリアの王都ヒューリアスで変事が起こったことを報せる密使が、エルフィンに協力するレジスタンスから、レイテのもとに届けられた。

それはただちにエルフィンにも上げられる。

「カーラ将軍が投獄された」
「ほぉ～」
先のミドガルド平原の戦いには参加していないが、カーラはセルベリア王国の名門貴族だ。若い女の身ではあるが、軍歴も充実している。
ヴァレリアを失った今のセルベリア王国で、もっとも使える駒だった、と言っていいだろう。それを自ら潰したのだ。
元々エルフィンが離間策をこうじていたということもあるが、ここのところのエルフィンとヴァレリアの情報も後押ししたかもしれない。
ヴァレリアは寝返った。その親友であるカーラも当然寝返るだろうと。
「閣下っ」
フルセン軍の幕僚たちが期待を込めた瞳で一斉に、主君の顔を見る。
「あぁ、潮時だな」
覚悟を決めた若き覇王は、颯爽と立ち上がった。
「今こそ積年の恨みを晴らす時だ。全軍、出陣！」
こうして準備の整ったエルフィンは、セルベリア王国にトドメを刺すべく出陣する。

第二章　薔薇の棘

「やっぱり、あの頑固オヤジだけは寝返らないか」

準備万端整えたフルセン陣営としては、セルベリア王国をあっさり滅ぼすつもりでいたが、敵には敵の思惑があるものだ。

エルフィンが調略にいそしんでいた間に、セルベリア王国としても対フルセンのための迎撃準備を整えていた。

その最前線の砦エンに入って、防衛の任務についていたのがジュネー将軍である。

彼は叩き上げの猛将だ。今は亡き国王ゼークトの近侍であったのに、個人武勇で武功を重ねて将軍位にまでなった。いわばセルベリア王国全盛時代の生き残りだ。

忠義一徹な男であり、セルベリアの原理主義者。外様のエルフィン嫌いの急先鋒的な存在だった。

誰が寝返っても、この頑迷固陋（がんめいころう）な将軍を調略することは無理だろうと、さすがのエルフィンも最初から諦めていた。

「はぁ、恩知らずだ、なんだと散々に罵られましたよ」

調略の責任者であったマリガンが、顔をしかめながら苦笑した。

時代遅れな人物であることは確かだが、盲目的に主家に殉じようとしている姿に、少し

だけ好感を持っているのだろう。

そんな騎士的なロマンチシズムを、サイアリーズ義勇軍からの客将ブライザが否定した。

「あの男は、サイアリーズで庶民を弾圧した元凶でもあります。決して許せません」

ジュネー将軍は、セルベリア王国に忠実な男だった。つまり、暗君ジューザスにも忠実ということであり、国民を弾圧することも躊躇わなかったのだ。

「それで籠もっている兵力はざっと七百人か」

エルフィン軍には多くの義勇兵が参加しており、その兵力は、この時一万人を超えている。

「無理攻めで攻め落とせないことはないでしょうが、籠もっている奴らは玉砕覚悟の死兵です。損害は馬鹿にならないものとなりますな」

戦争職人である重鎮ロックスの指摘に、エルフィンは難しい顔で頷く。

ジュネーは、先のミドガルド平原の戦いでは、副将の一人として千五百人を率いてヴァレリア将軍の左翼を務めた。しかしながら、エルフィン麾下のマリガンの指揮したたった百人に翻弄されている。

このことからわかるように、歴戦の将帥であっても、決して用兵上手とは言えない。

ただ、エルフィンが生まれる前から戦場を往来してきた武人である。要害に籠もって、死ぬ気で粘られれば、難物だ。

「いっそ包囲の兵だけ残して、一気に王都ヒューリアスを降伏させてしまう、という手も

ありますよ。国が先に滅びれば、あの老人だって降伏します」
「ふむ」
マリガンの提案は、エルフィンとて考えないでもなかったが、初戦で華々しい戦果を上げることで、勢いをつけたいという思いもある。何よりも、後方に置いておくには少しばかり怖い爆弾に思えて決断しかねた。
対応を決めかねているところに、先行していたレイテから連絡が入る。
ジュネー将軍を助けるために、セルベリア軍は、国王ジューザスを総大将として、ファルビン将軍、マージョリー将軍を従えて出撃したとの報せだった。
「ほぉ、ここに至ってついに国王陛下のお出ましか。これは盛大に迎えてやらなくてはな」
前線の城を包囲され、それを救援するために援軍が出る。それと決戦する、というのは、後詰め戦といって、戦争ではもっともよくある形だ。
野戦になれば、攻城戦よりも時間を節約できる。喜んだエルフィンは、エン城の包囲はロックスに任せて、残りのすべてを北に布陣させた。
しかし、待てど暮らせど、いっこうにセルベリア本隊がやってこない。
どうやら、思うように兵を集められなかったようだ。それどころか、セルベリア軍に徴兵されるよりは、と武器を持ってフルセン軍に身を投じる者も少なくない。
「まったく、何をやっているんだか……」
戦う前から、まともな戦になりそうもない状況に、エルフィンは嘲笑した。

そうこうしているうちに、北からサイアリーズ一揆軍が、王都ヒューリアスを目指して進撃するという情報が入ると、ジューザスは王都へと帰ってしまった、という。

ジュネー将軍への援軍としては、マージョリー将軍を形ばかり派遣しただけになった。当然ながら、それは援軍と呼ぶにもおこがましい兵力である。

マージョリー将軍も、フルセン軍には近づけない。遠くから見ているだけだ。

「結局、こんなものか……」

エルフィンとしては恨み骨髄のジューザスを、野戦でケチョンケチョンにしてやりたい、という思いもあったのだが、やってこないのだから仕方がない。

「さて、どうするかな？」

エルフィンは再び軍議を開く。

マージョリー将軍は女将だ。先代国王ゼークトの母方の実家の一族であり、セルベリア王国の譜代である。これも寝返る可能性は極めて低い。

「そういえば、マージョリー将軍は、ジュネー将軍と親しかったな」

エルフィンの質問に、事情通のマリガンが答えた。

「確か、不倫関係にある、という噂が流れたことがありましたな。親子ほど歳が違うのによくやる、と笑ったものです」

「ふむ」

思案顔になったエルフィンは、脳裏で人物関係を整理し、それから決断した。

「決めた。ロックスに伝令。エン城の包囲を解け。全軍でマージョリー将軍の軍勢を攻撃する」

マージョリー将軍の兵力は、無理やり徴兵された人が中心で、それでもいいところ三千人だ。エルフィン軍の兵力は一万人を超えるのだから、野戦で勝負になるはずがない。

圧倒的大軍に襲われたマージョリー将軍はただちに退却にかかった。

「逃がすな、追え」

エルフィンは執拗に、マージョリー軍の追撃を命じる。その時背後のロックスから伝令がきた。

「陛下。エン城の城門が開きました。ジュネー将軍が追撃してきます」

「よし、かかった」

エルフィンは会心の笑みを浮かべた。

フルセン軍は前後から挟撃された形だが、二倍以上いる状態で挟撃されても怖くない。いや、初めからジュネー将軍を城から釣り出すための用兵展開だったのだ。

「全軍反転。背後のジュネー将軍を討て」

七百人対一万人である。勝敗はだれの目にも明らかだ。

「ジュネー将軍、退きません。突っ込んできます」

圧倒的な不利をものともせずに突っ込んでくる敵の勢いに物見が驚愕の声を上げる。

しかし、それもまたエルフィンにとって予想通りであった。

「そうだろうな。せいぜい派手に殺してやれ」
ジュネー将軍がすでに死に場所を探していたことは自明のことだ。
このまま援軍のない無駄な籠城戦を続けて飢えたのちに玉砕するか、マージョリー将軍を守ったという自己満足を持って死ぬか、二者択一である。
昔気質（むかしかたぎ）の勇者であるジュネー将軍ならば、後者を選ぶだろう。
「マージョリー将軍はさらに退却」
「いいさ、逃がしてやれ。根のない花はいずれ立ち枯れる」
多勢に無勢。エルフィンは圧倒的な兵力でジュネー将軍を覆滅する。
「弓矢隊、放てっ」
ロックス将軍が誘導してきた敵を、マリガン将軍が応撃した。
しかし、この時意外なことが起こる。完璧な戦理で布陣したはずのエルフィン軍の前線が崩れたのだ。
覚悟の差が出た、と言えるだろう。
エルフィン軍は勝って当たり前、ジュネーたちは死ぬ気で特攻してきているのだ。
「ちっ」
勝ちは決まっているが、無駄な損害は出したくない。舌打ちを一つしたエルフィンは、自ら直属軍を率いて前線を立て直そうとした。しかし、それよりも早く動いた部隊がある。
剣を抜いた女戦士が、さながら独楽（こま）のように回転しながら切り込んでいったのだ。彼女

が駆け抜けた後には血飛沫が舞う。
「あれは誰だ？」
その剣技の冴えに見惚れたエルフィンの質問に、近侍していたロックスの末娘ロージーが答える。
「サイアリーズからの援軍ブライザ殿とお見受けします」
「ほぉ、薔薇の剣姫殿か。なかなかどうして噂にたがわぬ」
エルフィンはもちろん、ブライザが戦場で戦うところを見るのは初めてだ。
もはや勝敗の決まった戦役である。ここの武功にそれほど意味はない、とはいえ無視できるようなものではない。
ブライザの横撃によって、ジュネー軍の鋭鋒は砕けた。こうなれば圧倒的な兵力差がものを言う。
しかし、ジュネー軍の兵士たちは一歩も引かずに奮戦していた。誰も彼もが、ここが死に場所と心得ているからだろう。
そんな中ブライザの快速は止まらない。さながら兵士の壁を切り裂くようにして一直線に切り込んでいく。そして、目的の人物の前に立つことに成功した。
「ジュネー将軍とお見受けいたす。その首級もらった！」
「ふっ、誰かと思えば『薔薇の剣姫』とはな」
サイアリーズ地方の領主であったこともあるジュネーは、サイアリーズ一揆には散々に

悩まされたに違いない。

その象徴的な存在であったブライザのことも、当然知っていただろう。

赤紫の頭髪を振り乱し、身を低くしたブライザは突っ込む。

「サイアリーズの恨みを受けよ」

「小娘が利いたふうな口を利く」

セルベリア王国の最後の勇将は、血塗られた戦槌を振り回した。

ガツンッ！　ザァァァァ!!!

戦槌を剣で受けたブライザは、身体全体で吹っ飛ばされる。両足で大地に二本の線を引きながら距離を取った。踏ん張ったら、防御を突破されて頭をかち割られていたことだろう。

その直後、ブライザに続いていた兵士たちが、ジュネーに三人ばかり槍先を揃えて突撃したが、彼らは戦槌で一度に薙ぎ払われた。

血飛沫が奔騰し、ブライザの身体を紅に染める。

「わたしは退かぬ！」

壮絶な姿となったブライザの全身から、赤紫の気炎が上がる。魔法で身体能力を強化したのだろう。赤き戦鬼となって間合いを詰める。

「うおおおおおおおお」

「せぁぁぁぁ！」

雄叫びを上げたジュネーのぶん回す戦槌と、奇声を上げたブライザの魔道剣が互角に打ちあった。

ガツン、シャー、キィィィィィ！

一撃必殺の戦槌を、魔剣はいなし、流す。意地と意地のぶつけあいだ。

息詰まるような攻防の果てに、魔法の刃が、戦槌の柄を叩き斬った。

「むっ!?」

ただの棒切れを持った老いた勇者が絶句した次の瞬間、赤き魔法光を纏った刃は、その左脇腹を貫く。

「ぐはっ」

ジュネーは目を剥き、吐血した。

「貴様に殺された者たちの恨みを背負って地獄に行け！」

血を吐くように叫んだブライザは、力任せに刃を引き抜き、反動で背を向け、大地に左膝をつく。

「ふっ、最期の相手が小娘というのは不満だが……まぁ、よかろう。サイアリーズの民の恨み、この身に引き受けていくとしよう。セルベリア王国、万歳」

こうして、初戦は反乱軍の大勝利に終わった。

※

「見事だ。このたびの戦いの勝利は、貴女の活躍があったればこそだ」

戦後処理にブライザが、ジュネー将軍の首級を持って入ってくると、エルフィンは手放しに褒めた。

「はっ、サイアリーズ義勇軍の活躍です」

「ああ、わかっている」

ブライザはあくまでもサイアリーズ義勇軍の功績として吹聴したいようである。

勝ちの決まっていた戦とはいえ、一番手柄は彼女たちサイアリーズ義勇軍ということになるだろう。

（戦後、サイアリーズの地位を高めようという腹だろうが、よくやる）

エルフィンとしては、サイアリーズ一揆軍を称揚することは厭わないが、あくまでも自分の麾下としての存在である。

褒めることで、エルフィンに服従してくれればいいが、増長してサイアリーズで独立する、と言われても困る。だからといって、褒めなければやはり、不満を持って独立する、と言いだしかねない。その辺の微妙な機微にエルフィンは苦慮した。

美しい女戦鬼を一通り褒めちぎったエルフィンは、新たな指示を出す。

「ジュネー将軍はセルベリア王国になくてはならない忠臣である。手厚く葬ってやれ。それからマージョリー将軍に使者をたてる。貴女の帰順を心待ちにしていると」

ジュネーの救出に失敗した以上、マージョリーが王都に帰っても立場はあるまい。

いくら王族に連なる血縁者とはいえ、ここらあたりが潮時と降伏してくれるのではない

か、と思ったのだ。

しかしながら、エルフィンの思惑は外れる。マージョリー将軍は、ヒューリアスには向かわず、フレイア方面へと落ち延びていったという。

「ふむ、つまり外国に逃げてまでぼくと戦う、ということか。嫌われたものだ」

エルフィンは、マージョリーとあまり親しかったわけではないが、そこまで嫌われていたと思うと心外な気もする。しかし、すべてが思い通りにいく、というものではないだろう。

「まぁいい。ジュネー将軍の遺族がいたら保護しろ。孫でも遠縁でもいい、必ず探し出して連れてこい。忠勇の一族として、取り立ててやる」

西方半島の融和を目指すエルフィンとしては、ジュネー将軍に反フルセンの象徴になられても困る。

とりあえずは家臣の末席に加えてやるだけだ。そこから出世するかどうかは、その人物の才覚次第であろう。

「忠臣……か」

ジュネー将軍は愚直であり、視野も狭い男であった。

セルベリア王国の将軍という地位が誇りであり、それ以外の生き方を求めてはいなかっただろう。

決して善人ではなかったが、セルベリア王国に忠実な彼は、恩人たるゼークトの息子ジ

ユーザスにも全身全霊で尽くした。

国民を弾圧することにも手を抜かず、その残虐非道さは、サイアリーズ地方では語り草となっているらしい。

しかし、こういうタイプの人材は、上の者の使い方次第だ。

「まったく、セルベリアに有用な人物はまだまだいくらでもいたんだ」

先王ゼークトがもう十年生きていたら、今頃は、フレイア王国やバロムリスト王国を征服して、西国に一大勢力圏を築けていたかもしれない。

それがジューザス王の暗愚のために画餅（がべい）になった。

「ふぅ……」

その夢はエルフィンが実現するしかないのだが、失われた十年はあまりにも大きかった。

西方半島を統一したからといって、そのまま内陸に打って出るには、北陸のドモス王国が大きくなりすぎている。さらに南にはイシュタール王国が中心となった大同盟が作られていた。

西方半島を統一した後も、さらなる苦難が待ち受けているだけだ、ということはわかりきっているのだから、考えてみるとバカバカしい話だ。

（ジューザスのように現実逃避して遊び回っていれば楽なのだろうがな……）

急にエルフィンは、虚しさを感じた。

エルフィンが寵愛していた女たちのうち、ヴァレリアはセルベリア戦への協力を頑なに

拒否して、アヴァロンにて謹慎している。
普通の少女であるナターシャを戦場に連れてくるわけにはいかず、彼女もまたアヴァロンにてヴァレリアの身の回りの世話をお願いしていた。
レイテは情報収集のために先行して、ヒューリアスに入っている。
よって現在のエルフィンの周りには女っ気がなかった。精神的な疲労を感じたのはそのせいかもしれない。
思念の海に沈んでいると、古参のロックスの呼びかける声が聞こえてきた。
「若、大丈夫ですか？」
我に返ったエルフィンは気合いを入れ直す。
「ああ、問題ない。次はいよいよ王都ヒューリアスだな」
まだ、ジューザスの直営軍と、ファルビン将軍の部隊が残っているだろうが、あとはこれだけだ。
ジュネー将軍の戦死、マージョリー将軍の逃亡によって、セルベリア王国の落日は誰の目にも明らかになった。
きっと逃亡兵が相次いでいるだろう。
（もしかしたら、功名心に釣られた何者かが、二人の首を持ってくるかもしれないな）
そんな甘い観測をしながらエルフィンが、ゆっくりとした進撃を命じようとした時である。血相を変えた伝令が駆け込んできた。

「大変です。王都ヒューリアスは火の海です。ジューザスの奴は自分の城に自分で火をかけて逃亡しやがった」
「なにっ!?」
「ジューザスは、その後、ファルビン将軍のラグナイト城に移った模様」
予測の斜め上を行った展開にエルフィンも、目を剥き、激情のままに軍机を蹴飛ばした。
「ジューザスの奴は一人で滅ぶだけではなく、西方半島まで死滅させるつもりか！」
「若！」
普段は冷徹な切れ者然として振る舞っているのに、意外と激しやすいのがエルフィンの欠点である。最近は女たちのおかげで安定していたが、ここにきて再発した。
見かねたロックスに一喝されたエルフィンは、なんとか自らを落ちつかせて口を開く。
「わかっている！　全軍、ただちにヒューリアスに向かえ」
エルフィンたちは全速力で、ヒューリアスに急行した。

※

「やってくれたな」
エルフィンが王都ヒューリアスについた時、そこは一面の廃墟であった。
セルベリア王国の王都ヒューリアス。それはジューザスが即位してからというもの、国家を傾けるほどの労力と財力を投じられた壮大な都であった。
それが見る影もない。代わりに焼け出された庶民が何万人単位で溢れ返っている。

ただちにジューザスを追撃したいが、焼き出された庶民を見捨てたのでは、新たな為政者としての資質を問われる。

「仮設住宅の建設を手伝ってやれ。それから炊き出しだ」

兵士たちに救民を命じたエルフィンだが、彼にはもう一つ気がかりなことがあった。

「レイテ。カーラ将軍の行方はわかっているか？」

すでに焼け出された人々のために、働いていたレイテが首を横に振るう。

「ごめん。まだわからない。でも、連れ出されたってことはないと思う」

「あの人が焼け死ぬってこともないな。仕方ない。カーラの郎党たちも捜しているだろう。ぼくも行く」

エルフィンの言葉に、レイテは目を見張る。

「あんた自ら救出に行くのかい？」

「まぁ、いろいろとお世話になった方だからな」

幼年時代から曰く因縁のある女の顔を思い出し、エルフィンは溜息をついた。

※

セルベリア王国屈指の名門貴族カーラは、エルフィンが育ったコンミュウス家の令嬢ヴァレリアの親友である。そのため否応なくエルフィンとも腐れ縁があった。

それゆえに、エルフィンに内応している嫌疑をかけられて幽閉されたのだ。

カーラの郎党たちから、主君の行方がわかったとの連絡が入り、エルフィンは自ら救出

に向かった。
どうやら、城の地下の牢獄の特別室に入れられていたらしい。
エルフィンは自ら魔法光を灯して暗がりを進む。
「誰だい？」
誰何（すいか）の声で誰かわかった。
「カーラか」
エルフィンの声で相手にも正体がわかったらしい。
「あら、これは驚いた。エルフィンじゃない。あんたのセコイ謀略のせいでこのざまよ」
陰惨な声のする方向に灯を翳すと、格子戸の向こうに、灰褐色をした長髪の女が紫色のマントと、白いロングコート、その下に金糸の入った白いパンツスーツという華やかな軍服を着て立っていた。
いや、両手を頭上で鎖に繋がれ、天井から吊るされている。両足にも重り付きの鎖が嵌められていた。
そのような姿勢だから、長い手足で痩身なのに胸だけが異様に大きいことがよくわかる。
軍服のところどころが破れているのは、鞭で叩かれた跡だろう。
凄惨な姿だが、エルフィンは意図的におどけてみせた。
「申し訳ありません。ただいまお助けに上がりましたよ。お姫様」
慇懃に一礼するエルフィンに向かって、カーラは毒づく。

「まったくなに白馬に乗った王子様を気取っているんだか……。自分で火を点けておいて、全焼だけは防いでやったと恩を売られてもね」
「まぁ、そう言わないでくださいよ。おかげで戦場でまみえないで済んだんですから」
磊落に笑ったエルフィンは、改めてカーラの姿を見て眉をひそめる。
「酷いありさまだ」
頬に殴られた跡があり、痛々しい。
エルフィンは持参していた魔法宝珠を翳して傷を癒やしてやる。
カーラは特にお礼は言わなかった。エルフィンはさらにタオルで顔の汚れを拭ってやりながら声をかける。
「当然、貴女のセルベリア王国への忠誠心はこれでなくなりましたよね。今後はぼくの家臣になってもらいます。いいですね」
カーラはセルベリア王国屈指の大貴族の当主だ。これを潰したとあっては大事である。
それになんだかんだ言っても、カーラはセルベリア貴族の中ではエルフィンと極めて親しい存在であったから、気心が知れているだけに扱いやすい。
エルフィンの確認に、カーラは諦めたように溜息をついて答えた。
「しっかたないわね。承知した」
カーラとしてもいろいろと思うところはあるだろうが、彼女とて一族郎党の長である。多くの者たちの生活を背負う立場としてはほかに選択の余地はない。

「よかった。悪いようにはしませんからご安心を」
満足したエルフィンは、手ずから鎖を解いてやろうとしたが、不意に思いとどまった。
「そういえばカーラには昔、散々世話になりましたよね」
愛情表現の歪んだヴァレリアは、エルフィンを性的に苛めることが多かったが、その入れ知恵をしていたのがカーラである。
ヴァレリアより若干年上の彼女は、姉気分で嬉々として、エルフィンを弄んだものだ。
「なんのことかな？」
惚けてみせるカーラに見せつけるように、エルフィンは意図的に舌なめずりをして、両手の指をワキワキと閉じたり開いたりした。
そのわざとらしい行為の意味を察したカーラは、若干怯えた表情をする。
「あ、あんたまさか、動けないか弱い女になんかしようなんて考えているわけ。それって男として最低の行為よ」
「貴女がそれを言いますか？　ぼくは覚えていますよ。ヴァレリア様とカーラ様のお二人に無理やり風呂に入れさせられて、目隠しされながらお二人の身体を洗わされたことを。おちんちんをいたずらされて、笑われたことを」
「なに怒っているのよ。それは男として喜ばしい体験でしょうが」
確かに綺麗なお姉さん二人に弄ばれる日々が楽しくなかった、と言えばウソになるのだが、男として悔しくなかった、と言えばそれもウソになる。

「カーラの屋敷に呼び出されたことがありましたよね。何事かと思って行ってみれば、目隠しされ、椅子に座る貴女に舌が痺れるまでクンニさせられて、最後にはおしっこを飲まされた。あまつさえおちんちんを足で踏まれ、無理やり射精させられたんですよ」

エルフィンを苛める中心はヴァレリアだったとはいえ、カーラもかなりえげつなかった。陰々たるエルフィンの訴えに、乾いた笑い声を上げたカーラは視線を逸らす。

「あは、そういえばそういうこともあったわね。でも、女はやっていいのよ。男はやっちゃダメ」

「そんな理屈が通りますか！」

横を向いたカーラの顎を掴んで前を向かせたエルフィンは、貪るようにして唇を奪った。

「う、うむ、うむむ……うん……」

柔らかい唇を舐め回し、肉裂を割って中に入れる。前歯を舐めさらに奥に。濡れた舌を搦め捕る。

カーラは諦めたのか素直に舌を絡めさせてきた。

ピチャ、ピチャ、ピチャ……。

心行くまで意地悪お姉様の唇を楽しんで、口を離したエルフィンは、口元を右手の甲で拭いながら感慨に耽る。

「そういえばカーラとキスしたの初めてでしたか。いつもぼくのおちんちんを好きなだけしゃぶったり、クンニを強要したりしていたくせに」

「あんたさ。執念深い男はモテないわよ。もっとこうカラッと」
「いいですよ。別にモテたいなんて思っていませんから」
嘯いたエルフィンは、カーラの軍服の前を開く。紫色の高級感溢れるブラジャーに包まれた胸元があらわになった。
「カーラって、痩せているのにおっぱいだけは大きいですよね」
「うふふ、いい女でしょ♪　でも、本気になってはダメよ。あたしあんたに惚れないって決めているから」
ぬけぬけとほざくカーラの耳元で、エルフィンはねちっこく囁く。
「玩具にするだけですか？」
「ええ、あんたはあたしにとっては玩具。それ以上でもそれ以下でもないわ」
「なら今日はぼくが玩具にしてあげますよ」
傲慢なお姉様の頬を舐め、首周りを舐め、鎖骨の窪みを舐め、胸の上へとキスを滑らせていく。
「ちょ、ちょっとあたし、何日も風呂入ってないんだけど……？」
「構いません。いい匂いです」
エルフィンは腋の下に顔を突っ込むと、クンクンと匂いを嗅いだ。
確かに何日も風呂に入っていないだけあって、汗の匂いもするが、それは同時に濃厚な牝の匂いである。否応なく牡の獣欲を刺激する。

それに腋毛の手入れもされていないらしい。うっすらと和毛が萌えている。それが物珍しくて前歯で噛む。

「あんた少し会わない間にずいぶん変態になったわね」

「女性を歓ばせる歓びに目覚めた、と言ってください」

困惑しているカーラの左右の腋の下の味をエルフィンは、心行くまで楽しむ。

「あはっ、ちょっと、やめなさい、あはは、くすぐったいから、あはは」

腋の下を舐め回されてカーラは、耐えられず笑ってしまった。そうこうしているうちにエルフィンは、両手を背に回して、ブラジャーを外した。

プルルンッと砲弾のような充実した乳房が勢いよく飛び出す。乳輪は淡く、先端だけが小生意気そうに飛び出している。

「遊んでいる淫乱女にしては、透明感のある綺麗なピンクの乳首ですね」

痩身のわりには大きな乳房を根元から掴まえたエルフィンは、その手触りを堪能する。

「あんたさ、マジであたしのことを陵辱するつもり？」

「ええ」

露悪的な冷笑を浮かべたエルフィンは左右の乳首を摘(つま)んだ。そこにカーラが冷たい眼差しで見下ろしながら一言。

「ヴァレリアに言いつけるわよ」

「っ!?」

ここまで余裕たっぷりに振る舞っていたエルフィンは明らかに怯んだ。それを察してカーラはニヤニヤと意地の悪い笑みを浮かべる。

「聞いているわよ。ヴァレリアの奴が言うこと聞かないから、あんた日参してやりまくったみたいじゃない。あの娘、意地っ張りだからあんたに何されても、言うこと聞かなかったでしょ。もし、ここであたし相手に浮気したなんてバレたら、あの娘の愛情を得るのはますます絶望的よ」

「べ、別にヴァレリア様の愛情が欲しいなんて思っていませんよ。どうせぼくなんか、軽蔑されているでしょうし……」

ヴァレリアが好きなエルフィンだが、言うことを聞かないヴァレリアの態度に業を煮やして、好き勝手に陵辱してしまった。

そんなことをしてしまった以上、今さら愛情を得られるなんて甘い夢は見ていない。

「あんたってほんと、いつまで経っても恋愛に関してはガキよね」

おろおろと言い訳しているエルフィンを、カーラは冷たく切って捨てる。

「ほっといてください。今はカーラに昔の復讐をしたいだけです。これからはぼくが主人になるんですからね。そのことをしっかり身体に刻んであげます」

ムキになって叫んだエルフィンは、カーラの左の乳首に吸いついた。

「あぁ……」

両手を吊るされているカーラは、羞恥と恥辱。そして官能に満ちた悲鳴を上げる。

エルフィンは両手でそれぞれの乳房を持ち、両の乳首をペロリペロリと夢中になって味わう。

元々生意気に尖っていた乳首は、ビンビンに勃起してしまう。

「ああ、ああ、はぁ……」

生意気で意地悪なお姉さんも、執拗な乳首責めにはたまらず官能の吐息を漏らしてしまう。

「カーラはほんと、昔っからおっぱいが弱いですよね」

嘯いたエルフィンは右手を下ろしていき、腹部からズボンの中に手を入れる。

「や、やめなさい！　あっ、ああ♪」

「今さらですよ。カーラのおま○このことはぼくが誰よりもよく知っているんだ」

柔らかい陰毛に包まれた陰唇を人差し指、中指、薬指でぴったりと覆い、激しく前後に擦ってやる。

クチュクチュクチュクチュクチュクチュ……。

卑猥な水音が、狭い牢獄に響き渡る。そして、頃合いを見計らって淫核を摘んでやる。

「ひぃ、あひぃ、ひぃぃ」

ピク、ピク、ピクピクピクピク……。

鎖に繋がれたカーラの肢体が激しく痙攣して絶頂し、そして、ぶしゃ……。

白いパンツに黄色い線が走る。

それと察したエルフィンは、カーラの耳元で嘲笑してやる。
「まさかお漏らしまでするとはね。ここに吊るされて長いから溜まっていたんですね♪」
「くっ」
お姉様気質の女として、プライドが大いに傷ついたであろう。
その前に跪いたエルフィンは、カーラの腰のベルトを解き、パンツスーツを膝まで下ろす。中からは紫色のショーツがあらわとなった。
濡れた布切れを太腿まで下ろすと、灰褐色の陰毛に彩られた恥丘が現れる。
その奥に肉割れがあった。左右に人差し指と中指を添えて豪快に開いてやる。
「へぇ～、これがカーラのオマ○コか？」
昔のカーラは、エルフィンにクンニさせることを好んだが、それはあくまでもオナニーの延長。エルフィンを玩具として扱っている、という意思表示なのか、目隠しをしてのことであったので、見るのは初めてである。
小水に汚れた陰唇であったが、エルフィンは躊躇わず口づけをした。
「ああ……」
指マンでイかされた直後だけに、カーラはつらそうに眉根を寄せた。
そこでエルフィンはそこそこのところで口を離す。
「確かにカーラの味だ。さて、次はっと」
エルフィンはカーラを吊るしていた拷問具の鎖を、緩めた。

ジャラジャラジャラ……ドサリ……。
カーラはその場に尻餅をつく。しかし、両手は吊り上げたままに調整する。
そうして、カーラの前に仁王立ちしたエルフィンは、ズボンから逸物を取り出す。
ぶるんっと唸りを上げて、逸物は臍に届かんばかりに反り返った。
「しゃぶってください」
「イヤよ」
逸物を鼻先に翳されたカーラは、顔を背ける。
「なんでですか？　昔は大好きでよくしゃぶっていたじゃないですか？」
「あたしが好きだったのは、もっと小さくて可愛い、皮のいっぱい余った包茎ちんちんよ。こんな可愛くない、グロテスクなおちんちんじゃないわ」
「そう言わず、食べてくださいよ」
嗜虐的に笑ったエルフィンは、逸物の先端をカーラの唇に添えた。そして、先走りの液で口紅を塗るように、カーラの唇を撫でる。
しかしながら、カーラは意地でも口を開こうとはしない。
業を煮やしたエルフィンは、小生意気なお姉様の鼻を摘む。
「ん、んん～、……はっ！」
しばし頑張ったカーラだが、窒息には勝てず大口を開けてしまう。その瞬間に、逸物を喉元まで一気に押し込んだ。

代わりに鼻からは手を離す。
「うむ、うむ、うむむ……」
エルフィンは灰褐色の頭髪を掴んで、腰を前後に動かす。
口内を陵辱されたカーラは、悔しげに目元に涙を溜めながら睨んでくる。
嫌がる女に無理やりフェラチオをさせる行為を、イラマチオという。
昔、散々に苛められたお姉さんに、お返しをしているわけだ。エルフィンとしてはなんとも痛快な気分である。
カーラに苛められ性的虐待を受けて気持ちよくなかったか、と言われれば気持ちよかったわけだが。それはそれ。男としてのプライドが満たされる。
（カーラがぼくのおちんちんをしゃぶっているんじゃない。しゃぶらせているんだ。き、気持ちいい。あ、出したい。カーラの口の中を、胃の中をぼくの精液でいっぱいにしたい……）
このままカーラの喉奥に向かって、男の欲望を注ぎ込み、無理やり嚥下（えんげ）させる、というのは、とっても魅力的な行為であった。しかし、今射精すると、早いとか言われて、やっぱり馬鹿にされそうな気がする。
（今後カーラはぼくの部下になるわけだし、ここは主従関係をはっきりさせるためにも、もっと頑張らないと）
苛められっ子の少年は、射精が我慢できなくなる前に、いじめっ子お姉様の口から逸物

を引き抜く。
女の唇と逸物の先に、濃厚な液体の橋ができて、ツーとカーラの胸元に落ちた。
その後を追うように逸物を下ろすと、カーラの左の乳首の先端に添える。
「次はここで楽しませてもらいますよ」
胸の谷間に逸物を押し込むと、両手でふわふわの乳房を挟んだ。
「おお」
痩身のわりに巨乳な感触に、エルフィンは歓喜して、腰を上下に動かす。
無理やり乳房を陵辱されているカーラは軽蔑した視線で、エルフィンを見上げる。
「あんたさ、自覚している？　傍目にはあんたすっごく格好悪いわよ」
「ぼくは別にスーパースターになりたいわけじゃないですから、格好なんてどうでもいいですよ」
躊躇いのないエルフィンの返事を聞いて、カーラは呆れたような溜息をつく。
「はぁ～、なんでこんな歪んだ性格になっちゃったかね。昔は純情で可愛かったのに……」
「ぼくの性格が歪んでいると言うのでしたら、その責任の一端は間違いなくカーラにもありますよ。その責任を取ってください」
「責任ってこの状況で何しろっていうのよ」
両手を吊るされ、足にも重りを付けられているカーラには動きようがない。しかし、その表情にはどこか、我儘な弟に付きあうお姉さんといった雰囲気が漂っていた。

エルフィンもまた甘えん坊の弟のように訴える。
「おちんちんの先端を舐めてください。それぐらいならできるでしょ」
「はいはい、わかったわよ。ご主人様」
ご主人様という言い方に思いっきり皮肉を込めたカーラは、顔を俯けて、舌を伸ばし、胸の谷間から飛び出した亀頭部の尿道口をペロペロと舐めた。
「ああ……」
思わず身震いをしたエルフィンは恍惚の溜息をついた。
「気持ちいい、気持ちいいよ、カーラ。あぁ、もう、もうでる。でる、でるぅぅぅ」
無様に腰を突き出し、思いっきりのけぞったエルフィンは射精した。
どびゅびゅびゅびゅ……!!!
カーラの生まれながらの軍人貴族といった顔が白濁に染まっていく。
ダラダラダラダラ……。
顔に浴びせられた液体は、そのまま滴り、鎖骨に溜まり、さらに砲弾型の乳房を汚す。
「はぅ……」
白濁にまみれた顔を上げたカーラは恍惚とした溜息をついた。まだその唇と半萎えの逸物の間には濃厚な橋ができている。
射精が収まったところで、一息ついた麗人は軽蔑した視線で見上げた。
「これで気が済んだ？」

両手を鎖で吊り上げられているカーラは、顔にかかった男の汚れを拭うこともできない。焼け落ちた都の地下の牢獄の中、捕らえられて動けない美女が、男に無理やり陵辱されて精液まみれになってしまっている。

その退廃的な光景にエルフィンは、ドキッとした。

（なんかすげぇ色っぽい）

なんとも言えない妖しい気分になったエルフィンは手を伸ばし、カーラの頬を撫で、指で精液を集めると口唇に流し込んでやった。

「う、うむ……」

無理やり精液を含まされたカーラだが、素直に嚥下した。

「いや、まだまだですね」

逸物は一度射精したくらいではいささかも勢いが衰えず、カーラの鼻先で隆起していた。勢いの収まらない少年の逸物を前に、捕らわれの麗人は顔をしかめる。

「あんた、本気で最後までする気？」

「ええ、ここまでしておいて最後までしないのは、かえって女性に失礼というものでしょう」

嘯いたエルフィンはしゃがみ込み、その場に胡坐（あぐら）を掻くと、カーラを反転させて尻を掴み抱き寄せた。

いきり立つ逸物が肉唇に添えられる。



「いや、ちょっと待ちなさい。あたしはあんたとはやらないって決めているのよ」
「なんですかそれは？」
ここに至ってのカーラの予想外の反応に、エルフィンはいぶかしむ。
「だから、女にも仁義って奴があるのよ。ヴァレリアの奴はあんたに本気だしさ。あたしとあんたがやったら、いろいろとドロドロになるでしょうが？」
「そんなこと心配していたんですか。でも、今さらですよ」
このころのエルフィンは、ヴァレリアの愛情を得ることを諦めていたから、寂しく笑う。
「ちょっと、待ちなさい。実は、あたし、あたしは、その……だから、あの……ああっ！」
ブツリ！
カーラの言い訳など聞く耳持たず、エルフィンは女の腰を落とした。
「ああ、ああ……」
ズブズブズブ……。
濡れた堅い肉を押し開きながら、肉棒は押し込まれていく。
（くぅ……締まる。っていうか、きつい。この感覚って……まさか？）
予想外の締めつけに驚いたエルフィンは、右手を下ろし結合部を撫でた。そして、掌をカーラの鼻先で開く。
「血、付いていますね？」
「くっ……」

カーラは何も答えずに顔を背けた。その仕草でエルフィンは得心がいく。喉の奥から笑い声が出てくる。

「くっくっく……カーラはぼくにオマ○コを舐めさせるのが好きなくせに、最後まではやらせてくれなかった。もしかしてとは思っていましたけど、やっぱり初めてでしたか」

「べ、別にいいじゃない。あたしの琴線に触れる美少年がいなかったのよ」

頬を赤くしたカーラは、侮っていた弟分に処女を奪われ悔しげに呟く。

しかし、エルフィンとしてはその傷口に塩を塗ってやりたい。

「そっか、カーラは遊び人ぶっていて処女だったんだ。可愛い♪」

年上のお姉さんぶった女のプライドが完全に崩壊した瞬間だった。カーラは駄々っ子のように叫ぶ。

「く、悔しいぃぃぃ。あたしは美少年の包茎短小早漏のダメダメちんちんで遊ぶのが好きなのよ。こんな女慣れした汚いデカチンなんてイヤ～」

破瓜（はか）の痛みと恥辱からだろう。釣り目がちの目尻に大粒の涙が浮かんでいた。

しかし、それゆえにエルフィンのほうはさらに苛めたくなる。腋の下から回した両手で、容赦なく両の乳房を揉みしだく。

「イケイケのお姉さんのふりして、実は処女だった、というのは恥ずかしいでしょうから、ヴァレリア様には内緒にしておいてあげますよ」

エルフィンは手に付いていた破瓜の血を、先ほど乳房にかけられた精液の上から塗りた

くり、馴染ませる。
「くぅ、結局、こうなるんだったら、あんたが童貞の時に食っておくんだったぁ。あぁ、あん、はぁん……あぁ……」
自棄（やけ）を起こして叫ぶカーラは、破瓜の痛みはあるだろうが、二十代の成人女性だ。身体は男を迎え入れる器として完成している。
逸物を差し込まれた状態で、乳房を揉みしだかれると牝としての本能が否応なく目覚めるのだろう。
きつすぎた膣圧も少しずつ平常に戻ってくる。
（これがカーラのオマ○コか。きついけどグネグネ動いていい感じ）
昔、自分の性を散々に苛めたお姉様を逆に弄ぶ快感に、エルフィンは酔った。
「はぁ、あん、くぅ……あたしは、あんたの部下になっただけで、女になるつもりはないからね」
「わかっていますよ。セックスフレンドになってくれるんですね」
「ならない。あたしは忠実で可愛い美少年が好きなの。こんなぶっといちんちんなんて大嫌いなのよっ！」
美少年大好きお姉様の身体は、青年の逸物によく馴染む。
（あはっ♪　おま○この中がヒクヒクしてきた、感じてくれているんだぁ）
素直ではないお姉様の襞肉に酔いしれたエルフィンは限界に達する。



「くっ、そろそろ出しますよ」
「やめてぇぇぇ！　中はダメ、ヴァレリアに悪いから、ひぃ、ビクンビクンするぅ」
初めての体験に余裕がなくなっているカーラの泣き言など聞かず、エルフィンは思いきりよく射精した。
どびゅ！　どびゅ！　どびゅ！
泣き叫ぶ麗人の胎内に男の欲望が流し込まれていく。
「ああ、ダメ、入ってくる。エルフィンの子種が……あぁ、熱い……」
破瓜の直後だというのに、カーラは膣内射精される気持ちよさに惚けてしまったようだ。
（はぁ、気持ちよかった。ぼくってカーラのこともなんだかんだで昔から、好きだったんだよなぁ）
満足したエルフィンは、細身を背後から抱き締めて、右の耳元に囁き懇願する。
「ねぇ、カーラ。やっぱりぼくの側室になりませんか？」
「ヤダ、あたしはあんたと遊んであげてもいいけど、本気にはならないの」
「ぼくの何が不満なんです？　セックスの相性だって悪くないと思うんですけど……」
子供のころから遊んでいるお姉さんに明確に拒絶されて、少年は少し傷つく。
そんなエルフィンの様子を察したカーラは、苦笑する。
「全部。あたしの至高の愛は、まだ見ぬ包茎早漏短小のダメダメちんちんを持つ愛らしい童貞美少年のためにあるのよ」

「はいはい、それじゃもう一発」
またも始まったカーラの戯言を軽く流したエルフィンは、再び腰を動かし始めた。
「ってまだやる気かおまえは！　はぁん、いいかげん鎖ぐらい解きなさいよぉ！　はぁ～ん♪」
エルフィンは生意気な先輩の腰が完全に抜けて、男に縋って泣きだすまでやってやった。

※

「何をやっておられたのですか？」
ことを終えたエルフィンが、脱力しているカーラを背負って地下牢の階段を上がっていくと、長い二本の足がお出迎えした。
顔を上げると腕組みをしたブライザが、刺々（とげとげ）しい視線で見下ろしている。
心にやましいところのあるエルフィンは、一瞬、息を呑んでから応じた。
「ん？　旧交を温めていたんですよ」
「さようですか……。てっきりヴァレリアの時と同じように、捕虜を辱めていたのかと思いました」
冷めきった表情を浮かべたブライザは、ツンと顔を背けると、そのままスタスタと歩いていってしまった。
とっさに言葉の出なかったエルフィンに背後から抱きつきながら、カーラが悪戯っぽく囁く。

「なに、なに、彼女。あんたも隅に置けないわね。ちょっと目を離した隙にずいぶん、綺麗なお姉さんと知り合いになっているじゃない。ヴァレリアに言いつけちゃおっと♪」

足腰が立たないくせにやたら元気なお姉さんに、エルフィンはごく冷静に応じる。

「すでにヴァレリアも彼女とは知り合いですよ。サイアリーズ一揆の女闘士と名高いブライザ殿です」

「な～んだ。面白くない。なるほどあれが噂の『薔薇の剣姫』か。薔薇に例えられるだけあって平民のくせに気位の高そうな女ね。彼女、さっきのあんたの所業見てたわよ。あれは心底軽蔑しているわね。イヒヒ、自業自得♪」

嫌な笑い方をするカーラを、駆けつけてきた彼女の家臣に預けて、エルフィンは全軍の指揮に戻った。

第三章　薔薇の花弁

「紹介します。こちらはサイアリーズ義勇軍の代表を務めます。イルベルトです」

セルベリアの王都ヒューリアスを奪取したエルフィンは、ただちに国王ジューザスを追って、ファルビン将軍の居城ラグナイトを囲んだ。

そこにブライザが、二十代後半と思しき男を連れてやってきた。

痩せぎすで、背だけがひょろりと高い男だ。髪を後頭部で束ね、服装は薄汚れているが、目だけが炯々（けいけい）と輝いている。

海洋貿易で財を成した富豪の当主とはいえ、長年の戦いで疲れ果てているのだろう。荒野の聖人といった雰囲気だ。

「これはイルベルト殿。貴方とお会いできる日を一日千秋の思いで、待ちわびておりました」

「こちらこそ、お会いできて光栄だ。若き獅子とはまさに貴方のことですな」

陣屋の床几（しょうぎ）から立ち上がったエルフィンが満面の作り笑顔で出迎えると、イルベルトもまた、満面の笑顔で挨拶を交わす。

妹のブライザのような刺々しさはなく、柔和な雰囲気であり、いかにも商人の出自を思わせる。

お互い、腹の底を探りながらの握手だ。

この戦では共通の敵を持った味方だが、そののち敵となる可能性はかなり高い。極めて危険な相手だと、お互いに認識している。

何せ見ている夢が違うのだ。

エルフィンは、セルベリア領をすべて併合した後に、内陸への進出を考えているのに対して、イルベルトはこれ以上の戦争を望んではいない。疲れ果てたサイアリーズの平和のみを考えている。

エルフィンは上座の左、すなわち、ナンバーツーの席次をイルベルトのために用意していた。

こうして、反セルベリア連合軍はラグナイト城の周囲に集結したわけである。その数は膨れに膨れ上がって五万人だ。

勝ち馬に乗ろうとする傭兵もいたが、大半はセルベリア王国に虐げられてきた農民たちである。

一方のラグナイト城に籠もるファルビンの手勢は五百人を超えないだろう。勝負は誰の目にも明らかと思われた。しかし、敵が最終決戦地に選んだだけのことはある。

「それにしても嫌な城ですな」

山城を見上げてイルベルトは慨嘆した。

その気持ちには、エルフィンも全面的に同意する。

「あぁ、守るに堅く、攻めるに難し、とはまさにこのような城を言うのだろうな」

何せ山岳地帯であり、攻めづらい地形である上に、西側が海に通じている。つまり、その気になると、海から食糧や水が無限に補給されかねないのだ。

このような城に少数の兵で籠もられると難攻不落と言っていい。

文官出身のファルビン将軍には、戦上手のイメージはあまりないのだが、なかなかどうして侮りがたい手腕を持っていたようである。

「軍略の天才と名高いエルフィン殿の奇跡の采配を、ぜひ拝見したいものです」

「煽てないで欲しい。ぼくはできることしかできない」

エルフィンとしても、自分の実力を、イルベルトや義勇軍の兵士たちに見せつけるためにも、迅速に攻略したい思いはある。

しかし、こうも条件を限定されては、奇策の出る余地などない。

攻めあぐねたエルフィンにさらなる追い打ちがくる。すなわち、出兵を早めてしまったために、刈り入れの季節に重なってしまったのだ。

このまま農民たちを戦場に留めては、田畑が荒れて、収穫が激減という事態になりかねない。

「グダグダしていても、時の無駄です。陛下、総攻撃の許可をください。あたしが先陣を務めます！」

大被害を覚悟の総攻め。この強硬論の筆頭は、フルセンの筆頭家老ロックスの末娘ロー

ジーであった。

彼女には兄が三人いる。いずれも有能な人材であり、嫡男がロックスの跡取りなのは当然として、残りの二人も、エルフィンとしてはいずれ別家を立てさせるつもりである。そして、この末妹は、兄たちに触発されたのか、とびっきりの武闘派だ。

十七歳でエルフィンと同い年であり、身長は並の男よりも高く、全身にぴったりした黒いスーツを纏い、長巻を持って戦う。

彼女の視線は、『薔薇の剣姫』ことブライザに向けられている。先の戦いで、大手柄を立てたブライザに、同世代の女騎士として対抗意識を燃やしているらしい。

敵意バリバリの視線を向けられているのは、ブライザのほうも承知しているから、棘ありまくりの視線を返している。

その心意気はよし、としながらもエルフィンは首を横に振るった。

「いや、ダメだ」

こういう勝ちが見えている戦では、農民兵は役に立たない。いわば人数で威圧するためのカカシでしかなかった。

なぜなら死ぬ覚悟がないからだ。平和な明日が待っているというのに、好んで死地に飛び込む者はない。

こういう時、死んでこい、と先陣を任せられるのが、ロージーのような譜代の家臣たちだ。

彼らは、いつでも先陣を切って死ぬ覚悟ができている。
自分が死ねば、それが手柄となり、残された一族に加増される、と知っているから喜んで命を的にかけて突っ込むことができるのだ。
そういう鉄砲玉をいくら抱えているか、がすなわち軍隊の強さでもある。
しかし、勝ちが決まったこの戦で、自軍の中核と言っていい人材を死地に投入するのは気が引ける。
「ちっ、それにしてもあの老人。なんだってあのバカに忠義を尽くすんだ？」
「ジュネーといい、ファルビンといい。譜代ではなく、一代で成り上がった新参のほうが最後まで忠義を尽くすというのは皮肉ですな」
総攻撃の決断がなかなかつかず苛立つエルフィンを、紳士顔したマリガンが慰める。
エルフィンが、セルベリアの譜代家臣であるカーラやヴァレリアを抱き込んでいることを言っているのだろう。
一週間かけていろいろと攻め口を探してみたのだが、どこもかしこも守りが堅い。ローシーが主張するように、損害度外視の無理攻めをすれば攻略は不可能ではないだろうが、そこまでする価値が見出せない。
いろいろ検討した結果、エルフィンは決断を下す。
「決めた。和睦しよう」
「和睦！　あのジューザスを生かすおつもりか⁉」

エルフィンの宣言に諸将は驚いたが、もっとも血相を変えたのはブライザだ。

この反セルベリア連合軍は、ジューザスの首を取るために集まったと言っても過言ではない。その大目的を放棄しようというのだ。

特にサイアリーズ一揆軍は、四年もの長きの間、セルベリア王国と戦ってきたのだ。その最終局面で、敵の首領を逃がすなど考えられないだろう。

ブライザだけではない。夫を嬲り殺された過去を持つレイテもまた、両目を据えて見つめてくる。

みなの無念の気持ちを察するにあまりあるが、エルフィンは言葉を尽くして説得した。

「ああ、もはやセルベリア王国が復活することはあり得ない。あやつの首を一つ上げるためだけにこれ以上、無駄な時間を浪費するわけにはいかない。このままでは収穫期の畑が台無しになってしまう。ジューザスやファルビンは国外追放。この路線で和議をする」

現在、城を包囲している義勇軍の数は五万人。これは大変な数である。長期化すればそれだけ国土は荒れ、人々の暮らしは悪化していく。

「お言葉ですが、それは理屈です。恐れながら閣下は、愛する者を殺された者たちの気持ちが理解できないと見える！」

それをレイテが窘めた。

「あたしだって義勇軍だ。復讐したい気持ちは同じだよ。だけど、そのために無駄な犠牲を出していいって理屈にはならないだろうさ」

「……貴女は」

未亡人たちを組織した義勇軍の頭領レイテの過去は、同じ反セルベリアゲリラの同志としてブライザも知っているのだろう。口に出しては反論せず、ぐっと睨みつけた。

珍しく感情的になっているブライザを、イルベルトが止める。

「もうよせ」

「しかし、兄様」

わかっている。もう何も言うな、というようにイルベルトは首を横に振るった。

「無念ですが、やむを得ませんな」

イルベルトが考え深げに目をつぶりながらも、賛同してくれたことで、エルフィンはほっとする。

「くっ、兄様がそうおっしゃられるのなら……」

飲み込みがたいものを飲み込むようにブライザも納得してくれたようだ。

エルフィンは、ただちに烈光神社の僧侶を使者に立て、和議の意思を伝えた。

ファルビンとしても、未来なき籠城戦をするよりは、国外に退去することを選んだ。

最後はいささかシマリの欠ける形となったが、とにもかくにも西方半島を制したセルベリア王国は潰(つい)え、フルセン王国が誕生したわけである。

※

収穫期ということで、農民を畑に帰したエルフィンは、一旦、フルセン王国の拠点であ

るアヴァロンに帰陣した。
そこで長らく捕虜となっていたヴァレリアを麾下に加えることに成功する。
感動したエルフィンは、レイテ、ナターシャも交えて、心行くまで乱交する、という人生最良の夜を体験した。
「あとは戴冠の日取りか」
西方半島は疲弊しきっており、派手にはできないが、形式というものは必要である。
新生フルセン王国を国家として内外に認めてもらうために、華やかな儀式もやるべきだろう。
幸いセルベリア王国の有力貴族であるヴァレリアとカーラを抱き込むことに成功し、官僚とそれに付随する統治機構を引き継ぐことができた。政権の移行はスムーズに行われることと思われる。
しかし、新たな時代は、新しい仲間と、新しい不和を呼ぶ。
「陛下はあまりにも旧セルベリア王国派の人材を優遇しすぎる。フルセン王国再建のために血を流したのは我ら譜代だぞ」
フルセン譜代の反発はとりあえずロックスに押さえてもらっているが、肝心のロックスの子供たち、特に若いロージーなどは不満を公言している。
「しかし、これはまぁ、時間をかけて融和させればいい。ロージーはとりあえずぼくの親衛隊長に抜擢してやろう。問題なのは……」

「サイアリーズ一揆の連中だね」
執務室で思案するエルフィンに、レイテも苦い顔をする。
組織としては別物だが、反セルベリアのレジスタンスの同志として、レイテはサイアリーズ一揆にそれなりの親近感を持っているのだろう。
しかし、サイアリーズ地方の人々は、イルベルトを敬愛するあまり、エルフィンの麾下に入ることを厭うているのだ。
「いっそ殺っちゃう？」
レイテは右手を首の前で横に引いた。
サイアリーズ地方の独立派の希望の星は、イルベルトが唯一無二である。
彼さえいなくなれば、求心力は激減するだろう。代わる玉と言えば、妹のブライザぐらいのものだが、兄に比べればカリスマ性は格段に落ちる。
「馬鹿な。言うこと聞かない奴を殺していったら、有能な奴なんていなくなってしまう」
人材の登用とは、実力主義と信用主義のバランスによって成り立つ。
信用できて、実力もある人材は理想だが、そんな者は滅多にいない。そして、現在のエルフィンの手駒で、信用できる人材だけでは、とてもではないが国家体制を維持できない。
だからこそ、ヴァレリアやカーラといったセルベリア系の人材を重く用いるようにしているのだ。
「ぼくとしては、イルベルト殿をサイアリーズ地方の領主とすることに否はないんだ。そ

れでみな満足してくれるといいんだが……」
それで収まるような雰囲気ではないのが問題である。
「火種は小さいうちに消したほうがいいよ。このままいくと大火になりかねない」
レイテの試すようなアドバイスを、エルフィンは拒否した。
「いやダメだ。イルベルト程度の男を御しえないようでは、ぼくに未来はないように思うんだ」
「あんたってほんと、無駄にプライド高いわよね」
処置なし、と言いたげに肩を竦めたレイテは、来客用のソファーに座り、先にナターシャが用意してくれたババロアを食べ始めた。
このようにエルフィンが、サイアリーズ一揆軍及びイルベルトの扱いを苦慮しているところに、ナターシャが来客を告げる。
「ブライザさんが面会を求めていますが？」
驚いたエルフィンは執務室の椅子に座りながら、顎に手を当てて考えた。
「ふむ、この時期に面会か。薔薇姫殿は何を考えているのかな？」
ババロアを食べ終えたレイテは、コーヒーの香りを楽しみながら悪戯っぽく応じる。
「あんたが、以前に言っていたことを実行に移しにきたんじゃない？」
「ん？　ああ、セルベリア王国がなくなった今、ぼくを暗殺するタイミングか」
「エルフィン様を暗殺！」

純朴なナターシャは目を剥いた。それを片手で制しながらエルフィンは口を開く。
「そんな安易な手に頼るようならイルベルトの器も知れるというものだ。その程度ならセルベリア王国でも潰せたんじゃないかな。まぁ、とにかく会おう」

※

「お忙しい中、時間を取っていただきありがとうございます」
薔薇色の短髪を靡かせながらブライザは、颯爽と執務室に入ってきた。
「ああ、貴女ならいつでも大歓迎だ。それで何かあったのかい？」
磊落に応じるエルフィンとは逆に、ブライザは厳しい顔で口を開いた。
「まずはお人払いをお願いします」
「ん？　ここにいる者たちは、ぼくの分身も同然だが」
ブライザとの会談に同席していたのは、レイテと、新しく親衛隊長に抜擢されて張りきっているロージー、その他、数人の近習と侍女のナターシャだけである。
ロックス、マリガン、ヴァレリア、カーラ、イルベルトといった重鎮たちはそれぞれ戦後の復興のために現場に出向いている。
若干戸惑うエルフィンに、ブライザは重ねて口を開いた。
「それでもお人払いをお願いします」
「貴様、不敬であろう！」
一喝するロージーを宥めて、レイテが質問する。

「何を企んでいるのかしら？」
「……」
他の者など眼中にないとばかりに、ブライザは無言でエルフィンを見つめている。側近たちが激昂する前に、エルフィンが口を開いた。
「貴女が持ってきた情報はそれだけ重要だ、ということだね」
「はい」
「わかった。みな、遠慮してくれ」
エルフィンの命令を受けたロージーは不満をあらわにしたが、レイテのほうはブライザの前に進み出た。
「武装解除はさせてもらうわよ」
「むろん、構わない」
ブライザは腰の剣を鞘ごと抜く。ロージーは慌ててそれを奪い取る。
さらにブライザは両手を頭上に上げたので、背後に回ったレイテは、その全身をパタパタと叩く。
そして、ドサクサ紛れに両の乳房を握った。
「あらあら、顔は綺麗なのに、おっぱいは残念ね。もう少し贅肉つけたほうが男は歓ぶわよ」
「……」

同性に胸を揉まれているというのに、ブライザは顔色一つ変えず、黙殺した。
「若いのに面白みのない娘ね」
軽口を叩きながらレイテは、乳房から手を離し、肩を竦める。
「まぁ、見えるところに武器を隠してはいないわね」
これで身体検査は終わったと思いきや、レイテはクールな女闘士の耳元に顔を近づけて、意味ありげに囁く。
「だけど女にはもう一つ武器を隠せる場所があるんだけど？」
「……。わかった検査するといい」
あたりにざっと視線を走らせたブライザは、その場で両手をスカートの中に突っ込むと、ぐいっとマゼンタカラーの布を膝まで下ろす。
「えっ⁉」
驚くエルフィンを前に、そのまま中腰になったブライザは、左手を膝につけながら、右手を後方に回して、スカートをからげてみせた。
「どうぞ」
それを見下ろしたレイテは、さすがに呆れ顔になる。
「潔いね。さすがはサイアリーズ一揆軍にその人ありと言われたレジスタンスの女闘士様。たいした胆力だわ」
「……。身の潔白のためです」

異性であるエルフィンからは見えないとはいえ、性器を晒しているのだ。
その恥辱はいかばかりかと思うが、信念を持っての行動だからだろうか。ブライザの顔は平然としている。
「それじゃ遠慮なく」
尻を突き出すブライザの後ろでレイテは屈み込んだ。
さらにナターシャとロージーといった少女たちも、好奇心を抑えきれない顔で背後から覗き込んでいる。
そして、レイテは両手の親指でブライザの陰唇を開いたようだ。
「くっ」
正面に座るエルフィンの位置からだと、ブライザの顔しか見えない。
右の細い眉がぐいっと上がった。しかし、恥じたら負けだと考えているのか、きつい表情を浮かべて、向かいのエルフィンの顔を睨みつけてきた。
その眼力に負けたエルフィンは、視線を明後日方向に逸らす。
「さすがは薔薇に例えられる女ね。オマ○コも薔薇の花弁みたいに綺麗だわ」
「そのような感想を聞くために、晒しているわけではない。とっとと済ませてもらいたい」
「はいはい、今検査しますよ」
悪戯っぽい声を出したレイテは、どうやら右手の中指を突っ込んだようだ。
「うっ」

ブルリッと全身を震わせたブライザは息を呑む。
「なんだ、膜付きじゃないか。これじゃ何も隠せないわね」
レイテは納得といった顔で、ブライザの臀部から身を起こした。
それを受けてブライザは身を起こし、無言のままショーツを上げて、ミニスカートを下ろす。肩にかかった赤紫の髪をさっと払う。
「これでわたくしが陛下に危害を加えるつもりはない、とわかってもらえたと思うが？」
「ええ、まぁ、いいでしょ」
紅蜘蛛と自称する女は肩を竦める。
「それじゃ、レイテ。今度はぼくらが彼女の言い分を聞く番だ」
「ええ」
主君の声に頷いたレイテは、ロージーやナターシャを引き連れて部屋から出ようとしたが、不意に思い出したようにブライザの耳元で囁きかける。
「あんた、ほんといい根性しているわ。それだけに信用ならない」
「……」
ブライザは無言で冷笑を返した。
「まぁ、処女だからこそできることなのかもね。男を知っている女じゃ、恥ずかしくてできないわ」
そう言い残してレイテは、部屋を出ていった。

あとには椅子に座ったエルフィンと、執務机を挟んで立つブライザが残る。
扉が閉まったところで若き王は口を開く。
「さて、貴女の望む通り、人払いをした。今ここにいるのは、貴女とぼくだけだ」
「ありがとうございます」
ブライザは礼儀正しく一礼した。
「要件を聞こう」
エルフィンに促されたブライザは、緑の瞳で真っ直ぐに返しながら口を開く。
「率直に申し上げます。サイアリーズの民はエルフィン殿に不信感を持っています。セルベリア国王ジューザスを国外追放で済ませたことや、その後の行いを見て、エルフィン殿はセルベリア王国と看板が違うだけの同じものを造ろうとしているのではないか？　という疑念を捨てきれません」
その眼差しは一切のごまかしを許さないと言わんばかりに、厳しい。
エルフィンは机の上で両手を組みながら応じた。
「ジューザスと同じと思われるのは心外だな。ぼくは西方半島をよりよくしたいと考えている。イルベルト殿には、サイアリーズ地方の領主をお願いしようと思っている」
「ありがとうございます。ただ、兄はそのような地位を望んではいません。兄はただ飢える民を見るに見かねて立ち上がったに過ぎないのです」
「その考え、行いは尊い」

エルフィンは全面的に賛同した。ブライザはニコリともせず続ける。
「サイアリーズの民は我が兄を慕い信頼している。エルフィン殿の造る国家とは一線を画したいというのが本音です。このままでは下からの突き上げを受けた兄は、エルフィン殿と戦わなくてはならなくなります」
「そうならないように、心を砕いているところだ。西方半島の民のことを誰よりも考える我々が戦うなど無意味なこと。苦しむのは民だからね」
ぬけぬけと語るエルフィンの答えに、ブライザは頷く。
「わたくしもできることをやりたく存じます」
「ふむ、貴女のできること？」
促すエルフィンに、ブライザは厳しい表情のまま答えた。
「はい。わたくしを陛下の側室に加えて欲しく存じます」
「貴女がぼくの側室になるというのか？」
エルフィンは改めて、ブライザの姿を頭のてっぺんからつま先まで舐めるように見た。
薔薇の花を連想させる赤紫色の波打つ髪に、細身で彫りの深い顔。切れ長の目元に、緑色の瞳。薔薇のように艶やかな唇は薄い。
美人と言えばかなりの美人だ。しかし、余計な贅肉がまったくついていない姿は、どこか人形めいている。
「はい。さすれば兄は陛下の義兄となります。サイアリーズの不満も押さえ込めると存じ

ます」
「ふむ」
信用のない部下を繋ぎとめるのに親族になる、というのはありふれた手だ。しかし、効果があるから多用される。
考え込むエルフィンを見て、ブライザは左手で胸元を押さえながら、右手を股間のあたりに当てる。
「先ほど図らずもレイテ殿が検査されたように、わたくしは正真正銘の処女。陛下の側室になるのに不足はないと存じますが……」
「なるほど？」
自分の貞操を堂々と売り込んでくるきつめの美人を、エルフィンは舐めるように見ながら考える。
ここ数カ月。身近に見てきたのだ。ブライザの人となりは、それなりに把握しているつもりだ。
彼女は純粋な女戦士である。気高く、誇り高い。それだけに謀略や政略とは無縁だろう。ましてや、このような色仕掛けなどするタイプではないだろう。
（これはなんか裏があるな）
おそらく、イルベルトないし、その周囲にいる知恵者に唆された、と考えて間違いあるまい。

（ぼくが女の色香で迷う男だと見られているのはちょっと癪だな。しかし、ここはもう少し相手の出方を見るべきか）

覚悟を決めたエルフィンは慎重に口を開いた。

「怖いな。美しい花には棘がある。貴女の棘は痛そうだ」

「西方半島の覇王になろうという方が、たかが女の棘に怯えないで欲しいですね」

妖艶に笑ったブライザは、執務机に飛び乗ると牝豹のポーズで這いよってきた。そして、エルフィンの唇を奪う。

「うむ、ふむ、ふむ……」

いきなりのことに驚くエルフィンの唇を存分に吸ったブライザは、強引に舌を入れて、前歯を舐め、さらに奥に進めて舌を絡めてきた。

そして、そのまま執務机を乗り越えて、椅子に座るエルフィンの股間に跨（また）がってきた。当然、逸物の上にブライザの股間がくる。

間にいくつもの布があるが、互いの性器がぶつかり押しつけあう形だ。

接吻を終えたブライザに、エルフィンは呆れた顔で口を開く。

「処女のわりには大胆ですね……」

「陛下より、わたくしのほうが年上ですよ。それに別に処女がみな内気で大人しいと決まっているものではないでしょう」

「違いない」

すっかり面喰らってしまったエルフィンは瞬きをしながら納得する。
「わたくしがこういったことに不慣れなのは認めますが、精いっぱい、ご奉仕させていただきます。たっぷりと楽しませて差し上げますわ」
妖艶に笑ったブライザは、再びエルフィンの唇を奪うと、濃厚に接吻しながら、男の服の胸元をはだけさせる。
「う、うむ、ふむ……」
エルフィンの上半身を露出させたブライザは、その股間から立ち上がった。そして、唇から顎へと接吻を流し、首筋から鎖骨、さらに胸元へと舐め下ろしていく
鳩尾（みぞおち）を舐め、腹部へ。臍を通って股間にまで達したところで、エルフィンの股の間に屈み込んだブライザは、ズボンのベルトへと手をかけた。
「元気なおちんちんが苦しそうですよ。解放してあげます」
上目遣いになって嗜虐的に笑ったブライザは、ズボンを下ろした。
ぶるんっと唸りを上げて逸物が跳ね上がる。
臍に届かんばかりに反り返った逸物を見てブライザは目を見張った。
「これがセルベリアの大天使を陥落させた逸物ですか。さすがに大きいですね」
「別に大きさは普通だと思うよ。まぁ、こいつを使ってサイアリーズの薔薇姫も陥落させたいと思っている」
エルフィンの答えに、逸物越しに見上げたブライザは挑発的にニヤリと笑った。

「ぜひに」

できるものならやってみろ、と言いたげなブライザは右手で逸物をぐいっと掴んだ。

そして、亀頭部に向かって舌を差し伸ばす。

ペロリ。

濡れた舌先で、尿道口を舐めたブライザは、炯々とした瞳で見上げてきた。

「わたくしはやるとなったら、徹底的にやる女ですよ。必ずや陛下をわたくしの虜（とりこ）にしてみせます。陛下の他の愛人たちよりも、濃密に愛して差し上げますから、覚悟してくださいい」

そう宣言したブライザは、濡れた舌先で亀頭部全体を勢いよく舐め回した。

チロ、チロチロチロチロ……。

「あ……」

上手いか下手かで言えば、レイテのほうが上手い。素早いが無駄な動きも多く、やっぱり初めてなんだな、と感じさせる。しかし、そういう技術云々（うんぬん）を吹っ飛ばす勢いのある舌使いである。

エルフィンが思わず女のように快感の声を漏らしてしまったことに気づいたブライザは、口元に嘲笑を閃かせた。

「うふふ、歓んでもらえて光栄ですわ。ですが、まだまだ♪」

右手で肉棒を持ち、左手で顔にかかる薔薇色の頭髪を掻き上げたブライザは、ズボリッ

と肉棒を口腔深くに含んだ。

ジュルジュルジュルジュル……。

上目遣いに少年王の顔を見ながら、刺々しい美貌を誇るお姉様は肉棒を吸り上げ、激しく頭を上下する。

「ん、うむ、うん……プチュ、うむ……」

自尊心の強い女というのは、男を感じさせることに歓びを見出すものらしい。エルフィンが感じていることを見て取ったブライザの口戯はどんどん激しくなっていく。

それに口内は女にとって、かなり敏感な性感帯の一つであるから、そこを肉棒で擦られて否応なく興奮するのだろう。息が上がる。

しかし、口が塞がっている以上、女は鼻で呼吸をするしかない。おかげでかなり激しい鼻息を浴びせられる。

(うわ、ブライザのフェラ顔ってこんなんなんだ?)

いかに完璧な美貌を誇るお姉様といえども、肉棒を深く咥(くわ)えた表情は崩れてしまって、少々間抜けに見えるものだ。日常生活では決して見ることのできない、女のこういう表情を見るのが、セックスの醍醐味の一つであろう。

エルフィンは興奮してドキドキした。

しかし、同時に見上げる眼差しが少々きつすぎることにも畏怖する。

もしかしたら、自分を暗殺しにきたかもしれない女に、男の急所を含まれているのだ。

いつガブリとかぶりついてくるか気が気ではない。
身体検査をして寸鉄すら帯びていないことはわかっていても、前歯は十分に凶器である。
死と隣り合わせの緊張感が、快感を高めるが、なかなか射精するまでには至らない。
やがて疲れたらしいブライザは、逸物から口を離し、乱れた頭髪を整えながら一息ついた。
「ふぅ～……。そう、緊張しなくても、噛んだりしませんよ」
「ああ、わかっている……」
エルフィンの声にまだ警戒の色があると察したブライザは、先走りの液を垂れ流しビクビクしている逸物を指で弾きながら、新たな提案をした。
「どうしてもわたくしが信用できないのでしたら。今度は口ではなく、脚でいたしましょうか？」
「脚？」
「閣下はどうやら、わたくしの脚に興味をお持ちのようですから」
女という生き物は、男が自分のどこに欲情しているか、敏感に察することができる生き物らしい。
確かに彼女の美脚には初対面の時から魅せられている。
「ああ、よろしく頼む」
程よく筋肉がついたプリップリの太腿を見つめ、生唾を飲んだエルフィンは頷く。

それを受けてブライザは立ち上がり、机の縁に腰をかけた。そして、両足を上げると交互に左右のブーツを脱ぎ、ニーソックスを脱ぎ捨てる。

そして、素足となった右足をエルフィンの鼻先に差し出した。

「よろしかったら舐めます？」

「ああ、歓んで」

汗の香り立つ生々しい足を前に少年王は、性の奴隷と堕した。恍惚とした表情で麗しい素足を押しいただくと、そのつま先を口に含んだのだ。

足の指の狭間や、爪の間、さらには足の裏。ねっとりと舐め回すエルフィンの姿に、ブライザは目を細める。

「あはっ、本当に舐めるだなんて。うふふ、軍略の天才、若き英雄などと持ち上げられても、所詮は十代の男の子。綺麗なお姉さんが大好きなんですね♪」

その口ぶりからして、この色仕掛けをブライザに唆した者の評価であろう。

実際、レイテ、ヴァレリア、カーラといった年上の女を恋人にしているエルフィンである。

（考えたことがなかったけど、ぼくって年増好みなのかな）

そう考えながら、エルフィンは左足も所望すると、そちらも隅々までねっとりと舐め回した。

「ふぅ、そろそろよろしいでしょう。足を舐めてくださったご褒美を差し上げますわ」

熱い吐息を吐いたブライザは、執務机に腰をかけたまま、エルフィンの唾液に濡れた両足を下ろした。

そして、蟹股開きになると、左右の足の裏で逸物を挟んだ。

「あぁ、カチンコチン。卑しい女の脚に急所を踏まれて、こんなにいやらしく勃起させるだなんて、陛下はほんとしょうもない女好きですわね」

侮りの言葉を吐きながら、ブライザも相当興奮しているようである。

その気の強そうな顔に相応しく、エスっ気のある女なのだろう。

「エッチな美人お姉さんが嫌いな男はいないと思うんですがね」

「うふふ、英雄、色を好む、と申しますものね」

妖艶に笑ったブライザは、口元に軽く左手の薬指を咥えながら、シコシコシコシコと器様に左右の足の裏で挟んだ逸物を扱き上げてくる。

ブライザが自覚しているのかどうか不明だが、エルフィンの目の前で蟹股開きになっているせいでミニスカートがまくれあがりマゼンタカラーのショーツが丸見えである。

その中央には小さな沁みが確認できた。それがみるみるうちに大きくなっていき、まるで失禁したような沁みになってしまった。

（あらあら、このお姉さん。カッコイイのに、下半身は結構、だらしないなぁ）

もちろん、濡れやすい体質の女は嫌いではない。否、大好きである。

濡れたショーツは、中身を透かせ、陰毛の形や、メコスジが浮き上がってしまっている。

「はぁ、はぁ、はぁ……」

エルフィンはただ椅子に座って寛いでいるだけだが、ブライザのほうは両足で奉仕するのが重労働なのだろう。息が上がってきている。しかし、それゆえに一生懸命なのが伝わってくる。

（こういうのも悪くないな）

子供の頃からヴァレリアやカーラといった、おっかないお姉さんたちの玩具になって育ったエルフィンには、マゾっ気があるのかもしれない。

暗殺者かもしれない美しいお姉様に弄ばれ、恍惚としてしまった。

「ああ、そろそろイきそうなんだけど……」

「イク、ああ、射精ですか。どうぞ、わたくしの脚の下で果ててください」

妖艶に微笑んだブライザはさらに脚の動きを加速させた。

「あぁ、凄い、もう、もうイク……うっ」

断末魔のうめき声とともにエルフィンは射精した。

ドビュビュビュビュ……ビチャッ！

勢いよく奔出した白い飛沫が、ブライザの芸術的と言っていい内腿を汚した。そのまま膝小僧、脹脛（ふくらはぎ）、脛（すね）、足先までドロドロになっていく。

「はぁ、はぁ、はぁ……こんなに出るものなんですね」

射精とともに脚の動きを止めたブライザは、自分の両脚を汚した液体を茫然と見下ろし



ていたが、不意に左の内腿にかかった雫を指で軽く掬い上げる。そして、薔薇のような唇を開いてペロリと舐めた。

「……」

軽く眉をしかめただけで感想を言わなかったところを見ると、あまり美味しいとは感じなかったのだろう。

気を取り直したようにエルフィンの顔を見たブライザは、両足を揃えて、両手をスカートの中に入れると、ショーツをするすると脱ぎ捨てた。

「さて、それではそろそろ本番といきましょうか。わたくしの処女を差し上げますわ」

ブライザがそのままエルフィンの腰の上に跨がってこようとしたので、エルフィンは慌てて待ったをかける。

「ちょっと待った。そのまま入れるつもりか？」

「っ⁉　ええ」

ごく当たり前の顔で続けようとしていたブライザは、戸惑った顔をする。

いくら格好いいお姉様としてリードしようとしても、こういうところが経験のなさの発露なのかもしれない。

最近、いろいろと経験を積んだエルフィンは軽く溜息をついた。

「ぼくはまだ貴女のオマ○コに触れてもいないよ。貴女は処女なんでしょ。それなのに前戯もなしにおちんちんを入れたら、おま○こ裂けちゃって大変なことになるよ」

「……そ、そうでしょうか？」

考えてもいなかったらしくブライザは顔色を変えて、不安そうな声を出す。

「ど、どうすれば……」

「今度はぼくがやってあげるよ」

執務机に座るブライザをそのまま仰向けに押し倒した。そして、腕を伸ばしてブライザの胸元をはだけさせる。

マゼンタカラーのブラジャーがあらわとなる。それも引きずり下ろすと、あっさりとした膨らみがあらわとなる。

（これは予想以上の絶壁!?）

衣装の上からもそれほど大きくないのはわかっていたが、仰向けになったことでほとんどなくなってしまった。

エルフィンの驚きが顔に出てしまったらしい。今まで自信満々に振る舞っていたブライザが恥ずかしそうに応じた。

「べ、別に年上だからって、脂肪の塊がなくてもいいではありませんか」

「確かに、おっぱいは大きさではありません。貴女のおっぱいは綺麗ですよ。ぼくは好きだな」

巨乳は巨乳でいいが、貧乳には貧乳のよさがある。

清潔感が感じられる乳房に、エルフィンは顔を埋めた。そして、小さな乳首をレロレロ

と舐めしゃぶる。

「ああ……。そんな、わたくしの乳房など舐める価値はないと思いますが……」

どうやら美脚には自信があっても、胸にはコンプレックスがあるようだ。

「そんなことないよ。綺麗なおっぱいなんだから、しゃぶらないともったいないじゃないか」

あっさりとした盛り上がりを両手で包んだエルフィンは、左右の乳首を交互に執拗に舐めしゃぶった。

たちまちピンク色の乳首が濡れ輝き、ビンビンに突起する。

「あぁ、恥ずかしい。こんな小さな胸だというのに、ひぃあ、乳首がジンジンする。あぁ、なに、この感じ、はぁ、なに、この感じ、ひぃあ、胸から身体が溶けていく。ああ♪」

今まで強気でリードしていたお姉様が、受けに回り乳首をしゃぶられだしたら、途端に脆くも乱れだしたことにエルフィンは驚いた。

(この姉さんのおっぱい敏感だな)

貧乳は感度がいい、という俗説がある。しかしながら、エルフィンの体験した巨乳の女たちはいずれも敏感だったから、ウソだとは思っていた。

それがブライザの乳房を弄ったことで、認識を新たにする気分になる。

興奮したエルフィンは、シコリ立った両の乳首を指先でシコシコと扱きながら顔を下ろしていく。

内臓が詰まっているとは思えない細い腹部の下には、大股開きの股間がある。ショーツは先ほど自分で脱いでいたから、いきなり薔薇色の陰毛に彩られた陰唇があらわとなる。

（これが薔薇の剣姫のオマ○コか……。確かにレイテが言った通りだ。異名に相応しく薔薇の花に見える）

美しい鮮紅色の花弁の奥からは香り高い牝の匂いが溢れ、コンコンとした蜜が漏れていた。

（それにクリトリスがまるで薔薇の棘みたいだ）

仮性包茎気味の淫核は、包皮の狭間から、尖った中身を屹立（きつりつ）させていた。

下手に触れたら怪我をするのではないか、と思えるほど鋭利な突起をしている。

（ではご相伴させてもらおう）

椅子に座ったままエルフィンは、大股開きの女の花園へと顔を埋めた。

「ああ……」

ピリリと酸味の利いた愛液の味が、口内に広がった。

（これはこれで美味♪）

興奮したエルフィンは、何かと思惑があるらしい女闘士の陰唇を隅々までじっくりと味わい尽くす。

ピチャリ、ピチャリ、ピチャリ……。

「そ、そんな……西方半島の覇王になろうという方が、女のそのような汚い場所に奉仕す

る必要はないと思うのですが……」

「脚まで舐めさせた貴女が今さら何を言っているんですか？　覇王だろうと、凡夫だろうと、男は美人のオマ○コは舐めたいものですよ」

嘯いたエルフィンは、さながら犬が餌を貪るが如く、薔薇の花園を貪った。

「あ、あ、あ、あ、そんな、ひぃ」

どうやら、年下の少年を一方的に弄ぶつもりでいたお姉様は、自分に与えられる快楽というものを甘く見ていたらしい。困惑した顔で悶えている。

（まぁ、本当に処女のようだし、オナニーとかするタイプではなさそうだもんな）

激しい武芸の訓練で、性欲など霧散してしまっていたのだろう。それで年下の少年など、簡単に籠絡できると考えていたようだから、男を舐めすぎである。

「あ、ダメ、そこは、ひぃ、らめぇぇぇ」

薔薇のように気高いとされた女闘士が、快感に翻弄されて、目からは涙、口元からは涎を垂らしている。

ストイックな女戦士も、こうなっては形なしだ。

そのアヘ顔を見上げて、エルフィンは満足する。

（まぁ、どんな思惑を持って股を開いてきたか知らないけど、薔薇の棘だってひとつひとつ抜いていけば、そのうちなくなるさ）

経験豊富な少年は、気の強いお姉様の尖り気味のクリトリスを口に含むと、思いっきり

吸い上げた。

「ひぃ、ひぃぃぃぃぃ!!!」

ビクビクビク……。

大股開きの女は、全身を激しく痙攣させたかと思うと、そのままぐったり脱力した。

ブライザが絶頂したことを見て取ったエルフィンは、椅子に座り直す。

その眼前でブライザは長い脚を左右に開いたまま、薄い胸を激しく上下させ荒い呼吸を整えている。

「はぁ、はぁ、はぁ……」

絶頂を極めた後は、さすがの刺々しい美人も、棘が抜けてしまったようだ。

濡れた薔薇の陰唇がますます鮮やかになり、ヒクヒクしている。

(ほんと、綺麗なオマ○コだな)

その光景に魅せられたエルフィンは、我慢できなくなった。

惚けていたブライザの理性が戻ってきたところで、両足を持って促す。

「さてと、そろそろ入れようか？」

「あ、はい……」

未だ目の焦点の合っていない感じのするブライザは上体を起こし、両手を机の縁にかけたまま、尻をゆっくりと上げた。エルフィンに両足を掴まれているブライザは、そのままゆっくりと腰を下ろしてくる。

その下にはいきり立つ逸物。
狙いたがわず、男女の性器は重なった。亀頭部の先に熱く濡れた牝の媚肉を感じる。
「……」
男女の視線が重なる。ややあってブライザが口を開いた。
「……。では、参ります」
その声はいささか裏返っていたが、さすがは女闘士。思いきりよく腕の力を抜いた。当然、腰は一気に落ちる。
いきり立つ逸物は、女の花園を一気にぶちぬいた。
「ひ、ひぎぃ」
さすがの薔薇の剣姫も、処女膜を破られる時はただの女でしかなかったらしい。なんとも弱々しい悲鳴を上げた。
しかし、もはや遅い。逸物は一気に女の隧道(すいどう)を抜けていく。
(襞の抵抗がきつい。茨(いばら)に包まれているようだ、というのはオーバーだけど、こんなにブツブツなオマ○コ初めてだ)
ブツブツザラザラな襞肉を掻き分けて、逸物は最深部にまで達した。
目を閉じたブライザは、眉根に皺を寄せて、必死に両手両足でエルフィンの全身に抱きついている。
その姿からして、相当痛いらしい。

「……」

初物ならではのきつい締めつけを堪能しながら、エルフィンが黙っていると、やがてブライザの全身から力が抜けて、目を開いた。

「大丈夫？」

「はい。みっともないところをお見せしました。申し訳ありません」

「処女膜を破ったところなんだ。しょうがないよ」

エルフィンは慰めたが、ブライザは首を横に振るった。

「わたくしは、陛下に楽しんでもらうためにここにいるのです。今動きますね」

「え、そんな無理しなくても」

「いえ、破瓜したからといって甘えるなど、側室としてあるまじきこと」

そう勇ましく宣言したブライザは、椅子に座るエルフィンの首っ玉に両手を回して、腰を上下に動かし始めた。

ズッコ、ズッコ、ズッコ……。

「くっ、あ、くぅ、あぁ……」

破瓜の痛みに耐えながら腰を振るうブライザの姿は痛ましいが、涙を流し、大口を開けながらの苦悶の表情がなんとも男心をくすぐる。

（健気だな。でも、これだけ一生懸命に頑張られると、頑張られるだけ、やっぱりなんか裏があるんじゃないか、と思えてくるんだよなぁ。あっ♪　でも、ブツブツオマ○コ気持

ちいい♪）

茨のような襞肉。俗に言うカズノコ天井という奴なのだろうが、亀頭部を包む刺激はもっと強烈なものに感じる。

雁（かり）の部分を痛いほどに扱かれる。

その上ブライザが豪快に腰を振るうものだから、一突きごとにガッツリと子宮口を捉えた。

「あぁ、これが……覇者のちんぽ……さすがに……す、ごい……はがぁ♪　お腹の、奥まで奥まで、犯される♪　あぁ、らめ、お腹が裏返ってしまう……。子宮まで犯される」

破瓜したばかりとはいえ、二十歳の女。男を迎え入れる器として完成している。一振りごとに肉棒は、女体に馴染んでいくようだった。

（凄い、こんな腰を使う女性初めて……）

破瓜の時から、この鬼腰である。男に慣れた時、いったいどれほど奔放な腰使いをするようになるのか末恐ろしい。

（でも、エッチなお姉さんって魅力的なんだよなぁ）

理性では警鐘を鳴らしながらも、エルフィンは危険な痴女の腰使いに溺れていった。

「気持ちいいよ、ブライザ。とっても気持ちいい」

「わたくしも、気持ちいい。気持ちいいぃぃ!!!」

男にしがみつき、腰を豪快に上下させながら、ブライザは泣き叫んだ。



普段は気取ったところのあるお姉様なのに、今はもうひたすらに、生身の牝が晒されていた。

そのあまりにも淫らな痴態に魅せられたエルフィンは、睾丸から噴き出した熱い昂りが、肉幹の中を駆け上がってくるのを感じた。

本来ならここからさらに我慢するところだが、破瓜の痛みに涙しながら腰を使ってくる痴女の艶姿を前にしては、そんな気持ちも失せる。一刻も早くぶちまけてやりたいという本能が止まらない。

「それじゃ、出すよ」

「はいぃぃぃ、中にぃぃぃぃ、思いっきり中にぃぃぃ!!!　くださいぃぃぃ!!!」

理性がぶっ飛んでしまった、ということだろう。あの気高き女闘士が涙を流し、顔を真っ赤に紅潮させ、涎を噴きながら懇願してきたのだ。その必死な姿にエルフィンの男心は撃ち抜かれた。

「くぉっ！　でるぅぅぅ!!!」

うめき声とともに、艶やかな薔薇の中で肉棒は爆発した。

ドビュ、ドビュ、ドビュュュ……!!!

「ほんとにきた。中に、中にぃぃぃぃ!!!　熱い！　熱い！　熱い！」

ビク、ビクビクビク……。

射精に合わせるように、ブライザの身体は激しく痙攣した。

破瓜中の女が絶頂までいったとは思えないが、膣内射精される気持ちよさに女体が反応しているのだろう。

大口を開けて、舌を出す痴貌は、まるで膣内から噴き出した精液が、体内を通り、喉を抜け、噴き出しているようにも思える。

「ふぅ……」

思いっきり射精して満足したエルフィンは、自分の腰の上で脱力しているブライザを抱いて立ち上がり、執務机の上に仰向けに寝かせてやった。

それから小さくなった逸物は抜いて、再び椅子に座る。

「はぁ……、はぁ……、はぁ……」

寛ぐエルフィンの眼前では、ブライザが大股開きのまま惚けている。

真っ赤に充血した薔薇肉がヒクヒクと痙攣しているかと思ったら、徐々に花弁が開いていく。

「あっ……」

気の抜けた悲鳴とともに、ぶしゅっと白濁液が噴き出した。

白濁まみれとなった深紅の薔薇は、まるで散ったかの如く、その様相を一変させており、なんとも男の征服欲を満たす光景だ。

「まったく、無理をするから、こんなに傷んじゃって」

白濁液にはところどころピンク色の部分がある。間違いなく破瓜の血が混じっているの

だろう。
痛ましく思ったエルフィンは、懐から出したハンカチで綺麗に拭ってやった。
「あ、ありがとうございます。いかがです。わたくしは側室として合格ですか？」
「ああ、それはもちろん、貴女はもうぼくの女だ」
エルフィンの宣言に、ブライザは笑顔を浮かべる。
「これから毎日、ご奉仕いたしますわ。他のどんな女よりも濃厚に♪」
かくして、新フルセン国王エルフィンは、サイアリーズ領主イルベルトの妹ブライザを恋人とした。

第四章　薔薇の罠

「イルベルト殿は欠席か」

サイアリーズ一揆の頭目であったイルベルトは、サイアリーズ地方の人々に絶大な人気を誇っていたが、別にその地方を実効支配していたわけではない。あくまでもゲリラ戦をしていただけだ。

だから、新王になったエルフィンとしては、彼に旧サイアリーズ王国の領地の全てを与える謂れはない。また、そんなことをしたら新生フルセン王国の国土の三分の一を与える形になってしまい、臣下として明らかに分を超えた存在になってしまう。

それでもサイアリーズ地方では最大の領主に封じてやったし、サイアリーズ一揆の有力者を五人ほど見繕って諸侯に取り立ててやった。

エルフィンなりに精いっぱい気を使った人事だったのだが、イルベルト及びその周辺は不満だったらしい。

「申し訳ありません。今は人民の生活を復興させるが第一であり、上洛する時期にはない、とのことです」

重臣たちによる月に一度の定例評定にエルフィンが出席しようと渡り廊下を歩いているところにブライザがやってきて、兄及びにサイアリーズ系の諸侯五人が欠席する旨を告げ

た。
「なに貴女が謝ることじゃない」
兄と恋人の間で板挟みになって苦労しているブライザの薔薇色の頭髪を撫でながら、エルフィンは慰める。
「いえ、兄の不始末はわたくしが身体で償います。ですから、どうか寛大な処置を……」
「何をやってくれるんだい？」
面白がったエルフィンは、ブライザの顎を捕まえると顔を近づけ、右手をブライザの内腿に添えた。
「あぁ……」
ブライザは悩ましい吐息を吐く。彼女が愛人契約をしてはや一ヶ月が過ぎようとしていた。
イルベルトとエルフィンの融和を図るという大義のもと、彼女は積極的に夜伽（よとぎ）役を果たしている。
おかげで彼女の性感帯はかなり発達したし、エルフィンもそれをかなり把握した。その極めて敏感な性感帯をいきなり弄られたブライザは、動揺に頬を染め、恥ずかしげに瞳を左右に揺らす。
「い、一生懸命にフェラチオをいたします……」
「それだけ？」

ブライザの瞳を間近に見つめながら、エルフィンの右手は這い上がり、そのスカートの中に入った。

内腿の筋を撫で上げて、ショーツにまで達する。

ぶるっと震えたブライザは、エルフィンの肩を抱きながら答えた。

「た、玉を舐めます。精液もゴックンします……」

「それはいつもやってくれていることでしょ。そんなんじゃぼくは満足できないな」

世間には薔薇姫と称えられ、刺々しい美人として評判な女も、褥（しとね）を共にすることによってずいぶんと従順な牝へと育ってきていた。気をよくしたエルフィンは、さらに右手の中指でショーツの中央を押す。

「はぅ……♪」

エルフィンの指先は、すっかりブライザの淫核の位置を把握しており、布越しとはいえ、狙いたがわずに捉えた。

そこを集中的に弄ばれたブライザは、両手を必死にエルフィンの首に回して、のけぞりながら、脚を蟹股にして踏ん張る。

「で、ですが、わたくしの身体のすべてはエルフィン様に捧げております。今さら何をすればいいのか……？」

この一ヶ月というもの、ブライザは知りえる性技のすべてを使って、エルフィンに奉仕してきた。

身体中でエルフィンの精液がかかっていない部分はない、と言っていいほどに。
それなのにさらに激しい奉仕をしなくてはならない、ということでブライザも困ったようだ。
「考えて。貴女がエッチなことをしてくれると、ぼくはとっても嬉しいんだ」
三つほど年下の主君に煽てられたブライザは、眉根を寄せて必死に考えてからなんとか思いついたらしい。
「こ、今夜はわたくしが上になって腰を振ります。陛下に楽しんでもらえるよう腰をいっぱい振ります。はぁ、一晩中、腰を振り続けます」
「それは楽しみだ。貴女の腰使いは激しいからな」
莞爾(かんじ)と笑ったエルフィンは、ショーツの足穴の狭間から指を入れ、柔らかな陰毛を掻き分けて進むと、その奥にある膣穴に指を入れた。
「そ、そんな……ことは……はぅ、陛下、このような場所で……ああ」
今さら貞操云々を言う関係ではないとはいえ、今は真っ昼間。それも王宮の渡り廊下である。いつ他人が通ってもおかしくない場所だ。
ブライザは不安げにあたりに視線を泳がせる。しかし、エルフィンのほうは委細構わず肉壺を穿(うが)った。
「ぼくは貴女の茨の園のようにザラザラなオマ○コが大好きでね。この中に入るとすぐにイかされてしまう」

「あ、ありがとうございます。気に入ってもらえて嬉しいです♪」
悶えるブライザの膣洞の腹側のごく浅いところを、エルフィンの指先は探る。
「貴女の異名、薔薇姫とはこのオマ○コの形状から来ているんじゃないかな？」
「そ、そのようなことは……」
ブライザの処女は、エルフィンによって散らされたのだ。よってブライザの膣内の構造を知っているのは、エルフィンだけである。それとわかっていながら、辱めているのだ。
エルフィンは指の速度を上げた。
クチャクチャクチャクチャ……。
いかに気位の高い女でも、男に陰唇を悪戯されたら濡れてきてしまう。淫らな水音が立ち、それがますます女の被虐感を高める。
「へ、陛下、はぁ……、はぁ……、はぁ……」
羞恥に悶えるブライザの肉体が十分に高まったところで、エルフィンは指を引き抜き、こってりと愛液の滴る指を舐めた。
「薔薇水の味だ♪」
実際に薔薇水の味がするのではなく、気分の問題だ。
顔を真っ赤にして俯くブライザに、エルフィンは訴えた。
「ブライザ、今夜はたっぷりと腰を振ってもらうとして、ぼくは今我慢できなくなっちゃったんだけど」

「こ、このような場所で……」

王宮の渡り廊下。今はたまたま誰もいないが、いつ人がきてもおかしくはない。

目の前には美しい庭園が広がり、大きな噴水があり、その周りに色とりどりのチューリップが咲き誇っている。

このような場所で犯されるなど恥辱の極み。しかし、同時に被虐の歓びも感じるのだろう。ブライザの瞳が妖しく輝く。

「うふふ、主君の命令には逆らえません。どうぞ陛下のお好きなように……」

「それじゃ、庭園の花々にも負けぬ、麗しくも淫らな薔薇のご開帳といこうか」

エルフィンは、ブライザの左足をぐいっと持ち上げて肩に担ぐ。

若草色のミニスカートがめくれ上がり、男に見せることを十分に意識したであろう。絹のお洒落なショーツがあらわになる。

そのまたぐり部分はすでに失禁したかのようにヌレヌレだ。

脱がすのももどかしいと思ったエルフィンは、股布を左によけると、いきり立つ逸物を取り出し、叩き込んだ。

「はぅん♪」

薔薇と例えられるほどに気位の高い女であっても、連日の夜伽で男に慣れてきてしまっている。

ヌレヌレザラザラの肉襞が、肉棒に絡みついてきた。

「ブライザのオマ○コはほんとザラザラで凄い。とっても気持ちいいよ。ぼくはブライザに完全に溺れちゃったね。こういうのを運命の女と出会うというのかな？」

「ああ、そう言っていただけると、嬉しいですぅ♪　わたくしは陛下の女ですから♪」

朝の燦々たる陽射しの中、王宮の渡り廊下で、年若い王とその愛人は、人目もはばからず、愛欲を貪る。

ズコ！　ズコ！　ズコ！

エルフィンが激しく逸物を出し入れさせると、溢れ出した愛液が、ブライザの軸足の太腿を濡らす。

薔薇に例えられるほどの気位の高い美貌を誇る女が、恍惚とした表情で口元をだらしなく開いて、涎を垂らし、白目を剥く。

「ひぃ、ああ、いい。陛下のちんぽいい♪」

それは誰が見ても、すっかり男に溺れた女以外の何者でもなかった。

これがあのサイアリーズ一揆の象徴と言われた「薔薇の剣姫」だとは誰も思うまい。

「ブライザ、も、もう、イくよ」

「はぁ、はぁ、あ……わたくしはいつでも、いつでも、イけます。陛下のちんぽさえいただけたら、も、もう……ああ♪」

すっかり男に慣れてしまった女体は、射精の瞬間を今や遅しと待っている。

茨のようにザラザラした肉襞が、そして全身がブルブル震えていた。

「それじゃ、いくぞおおおおお」
エルフィンは一気にラストスパートをかける。激しく子宮口を突きまくり、己が欲望のままに片足を上げた女の最深部に向かって吐き出す。
ドクン、ドクン、ドクン！
「あぁぁぁぁぁぁ!!!」
ビクビクビクビクビク……。
ブライザの全身は激しく痙攣した。膣内射精されると反射的に絶頂するようにその身が成長してしまっているようである。
しかも、それだけではなかった。
プシュッと男女の結合部から液体が噴き出した。
どうやら、絶頂と同時に潮を噴いてしまったらしい。
（女の身体ってのは、セックスすればするほどに敏感になって、エッチな身体に成長するんだよなぁ）
一仕事終えたエルフィンが満足していると、背後から冷や水を浴びせられた。
「まったく、朝っぱらから何をやっているのだ」
その冷たく底冷えした声から、顔など見なくとも誰かわかる。
背筋を震わせたエルフィンが、恐る恐る振り向くと、そこには予想通り竜胆色の鎧を纏った大天使ヴァレリアが怖い顔をして立っていた。

いや、表情はいつもと変わらない。冷たく怜悧な美貌だ。

「こ、これは……」

どもりながらも、エルフィンが言い訳しようとするよりも早く、理性を取り戻したブライザは、小さくなった逸物を胎内に咥えたまま、見せつけるようにエルフィンと接吻した。

「無粋なことを……うむむ」

唾液をたっぷりと交換した後に、男と女の唇の間に唾液の橋を作りながらブライザは、ヴァレリアの顔を見た。

「嫉妬かしら？　陛下のお情けを賜ることは、女にとって至高の歓びですからね」

「……」

氷の眼差しと、棘の眼差しが正対して、火花を散らす。

期せずして、二人が初対面の時と真逆の形となったわけだ。

もっとも、あの時のブライザはエルフィンに興味などなかっただろうし、ヴァレリアもエルフィンの麾下に入ることを拒否していた。

しかしながら、月日は流れて、二人ともエルフィンの寵愛を得る女となった。

かつてセルベリア王国の柱石であった女と、サイアリーズ一揆の柱石であった女。どちらも無理めの女の極致にいるような女たちだ。

普通の男が言い寄ろうものなら、無言で叩き斬った後に、何事もなく去っていくのではないか、と思えるほどに気位高く凄味のある女たちである。

そんな怖い女たちの修羅場である。側にいるだけで気死してしまいかねない殺気があたりに漂う。

エルフィンとしても、どう仲裁していいものか、判断に迷っていると、ヴァレリアの口角が吊り上がった。

「ふん」

鼻で笑ったヴァレリアは、肩を怒らせて背を向ける。

「評議の時間だ。みな待っているぞ」

エルフィンは評議に出席をしようと部屋を出たところだったのだ。

国王不在では御前会議を始められない。なかなか現れないエルフィンを、ヴァレリアは捜しにきてくれたのだろう。

要件は済んだとばかりにヴァレリアはそのまますたすたと歩いていく。その後を慌ててエルフィンもついていこうとすると、ブライザが止めた。

「あ、少々お待ちを」

主君の前に跪いたブライザは、精液と愛液でベトベトになっている逸物を口に含んだ。

「う、うむ、うむ」

丁寧に舐め清めてくれている。

刺々しいほどにきつい美貌でそのようなことをされると、否応なく男の自尊心がくすぐられる。



（まったく、この顔でこんなことされたらたまらんな）

しばし、陶然として奉仕を受けていたエルフィンだが、不意にブルリと震えた。

「ん、どうかなさいましたか？」

「いや、トイレ行きたくなっちゃってね」

バツが悪そうに応じるエルフィンに、ブライザは艶冶（えんや）と笑った。

「構いません。そのまましてください」

「えっ⁉」

「わたくしは身も心も陛下の肉便器なのですから」

恍惚とした表情のブライザは逸物を両手に持ったまま、口を大きく開く。とても離してくれそうもない。

しかし、刺々しいほどの美貌のお姉さんの口内に放尿するというのは、妖しい誘惑である。

ゾクゾクと背筋を言い知れぬ昂りが襲い、誘惑に屈した。

「そ、それじゃ……ゴクリ」

生唾を一つ飲んだエルフィンは、きつい美貌のお姉様の口唇に向かって水門を開く。

ジョー……。

距離が近いこともあって、水の線は狙いたがわず、ブライザの口内に入った。そして、赤い舌の上で弾ける。

たちまちのうちに口内はいっぱいになる。口を開けたまま飲もうとしたようだが、そんなことはできず、顎から胸元を濡らす。

たちまちのうちにブライザの全身を、おしっこまみれにしてしまった。

そのうちに放尿は止まり、口を閉じたブライザは、口内の液体を嚥下する。

「ブライザ……!?」

喉を鳴らしたブライザは、口を開き、にっこりと笑う。

「美味しかったですわ。これでわたくしはますます殿下のもの♪」

美味しいはずがない。しかし、そう言って笑ってみせる彼女の心意気が嬉しかった。

「ブライザっ！」

言い知れぬ興奮に襲われたエルフィンは、その場でブライザを押し倒すと、自分の放尿を飲んだ女の口を躊躇わずに奪った。

「ああ、殿下。お召物が汚れます」

「構わない。気になるなら洗ってやる」

脳裏が焼き切れるほどの興奮に襲われたエルフィンは、ブライザの濡れた衣装をすべて引っぺがして、素っ裸にすると、陽の光の中、中庭に出た。

そして、噴水にぶち込んで身体を洗わせると、チューリップ畑の中で四つん這いにさせて、獣のように犯す。

「あぁぁん、あぁぁん、あぁぁぁん、花が、花が咲く！　はぁああん♪」

ブライザの喘ぎ声は王宮の隅々まで響き渡り、エルフィンがブライザに完全に溺れてしまっていることは、アヴァロンの宮廷内では知らぬもののない事実となる。

※

「もはや限界です！　陛下、イルベルト殿の討伐をご決意ください！」

ブライザの色香に溺れたエルフィンは、その兄イルベルトを徹底的に甘やかした。

当初は陛下もお若いからな、と笑って済ませていた廷臣たちもそれでは済まなくなる。

新生フルセン王国における最高首脳会議。

それは月に一度、アヴァロンで開かれる定例評議である。

主な参加者は筆頭家老のロックス、マリガン、ヴァレリア、カーラ、レイテ、そして、ブライザ。その他、譜代新参を合わせて五十人近い諸侯が列席する。

そんな中、ナターシャは相変わらず甲斐甲斐しくお茶の用意に余念がない。

この会議を、イルベルトらサイアリーズ派の諸侯は三度連続ですっぽかしたのだ。

マリガン将軍からねじ込まれたエルフィンは、最愛の女性に質問する。

「ブライザ。イルベルト殿はなぜ上洛しない？」

「申し訳ありません。サイアリーズ地方はご存知のように大変荒れた状態でして、再建が緊急を要します」

「それではしょうがないな」

いつもの言い訳にあっさり納得しようとする主君に、マリガンは悲鳴を上げた。

「しょうがないでは済みません！　どこの地方だとて、再建に忙しいのは一緒です。しかしながら、国王陛下御前の評議に参加するのは、諸侯の務め。まして、フルセン王国は建設されたばかり、今後の国のあり方を決める重要な評議です。これにサイアリーズ地方の領主たちがこぞって不参加とは、不心得にもほどがある。彼らはイルベルトこそ主君と言わんばかりだ。サイアリーズ地方のほぼ全域を横領しているさまは、謀反の意志あり、と判断されても仕方がないではないか！」

ここ三ヶ月あまり続いてきた議論である。

これをエルフィンはひたすら先送りにしてきたのだ。

廷臣たちの間には、「陛下も所詮は十代の少年。女の色香には勝てないのか」という侮りの噂さえ流れていた。

「わかった、わかった。それで討伐するとして、ブライザ、まずは貴女の見解を聞こう」

エルフィンの選択に、諸将はざわめく。

サイアリーズの内情、戦い方、地形に関して、知識でブライザに勝る者はない以上、間違った選択ではない。

しかし、ブライザは今までサイアリーズ派の代弁者として振る舞ってきた。それがいきなり真逆の意見を求められたのだ。

強硬に反対するかと思われたブライザであったが、なんら抗議の声を上げずに求めに応じた。

「わたくしは陛下の女。陛下がそう決意なされたのなら喜んで従います。サイアリーズ義勇軍は三十万と言っても、それは女子供といった非戦闘員を合わせての数。実際に槍を持って戦えるのは五千人。また、中核となっているものは五百人といったところでしょう」

「ふむ」

ブライザの分析はごくまっとうなものだ。

「末端の農民たちをいくら殺しても意味はありません。問題はこの五百人にいかに打撃を与えるかです」

「道理だな」

男のために、今まで苦楽を共にしてきた味方、そして最愛の兄を躊躇いもなく討とうという女を前に、いささか戸惑いながらも、諸将は同意する。

「そのためには、陽動作戦がいいと思います。兵を二手に分け、まずは敵の主力を引きつけ。その間に別働隊をもって敵の本拠を一挙に狙う」

いわゆる金床（かなとこ）と金槌の戦術である。敵の主力をがっちりと受け止めているうちに、他方から敵の柔らかい腸をえぐる。戦略の基本と言っていいだろう。

しかし、大胆な作戦だ。敵地深く入り込むということは、奇襲を受けやすいということだ。そして、犠牲も大きくなる。

とはいえ、単純に考えてイルベルトよりも、エルフィンのほうが二倍の兵力を動員できるのだから、正しい戦略であろう。

「うん、いいんじゃないか。それではブライザの意見に従うとしよう」
あっさりと頷いたエルフィンは、セルベリアの旧臣二人に目を向ける。
「先発部隊。敵を引きつける役はヴァレリアとカーラに任せる」
「承った」
「新参の身に過分なる大役とは、栄光の極み。報いるに我が全身全霊をもってしよう」
ヴァレリアは言葉少なく、カーラは気障ったらしく言葉を飾って応じる。
新参の二人に先鋒を任せることによって、功を立てさせる目的がある。また、囮部隊である以上、ある程度の損害を覚悟で攻撃しなくてはならない。
エルフィンにとって、この戦いは勝つのが当たり前の無意味な戦役だった。せめて戦後の人事を整えるぐらいの成功報酬が欲しい。
「先発部隊の戦線が膠着次第、予が主力を率いて、イルベルトの本拠ベリージャムを狙う」
「はっ」
「では、おのおのこの予定で行動するように」
寵愛する女の言うがままにエルフィンは実にあっさりと布陣を決めてしまった。こうして軍議が終わろうとしたところに、レイテが手を上げて発言を求める。
「ちょっとよろしいかしら？」
「どうぞ」
促されたレイテは意味ありげに、ブライザの顔を見る。

「この作戦は徹頭徹尾、彼女におんぶにだっこなわけだけど。肝心の彼女は信用できるの？」

「……」

それはこの会議に参加した一同の偽らざる感想であろう。

「何をおっしゃりたいのか？」

女の嫉妬は見苦しいとばかりに、棘ばかりの視線を送るブライザに、レイテもまた思いっきり挑発顔で促す。

「あんたが獅子身中の虫なんじゃないかってみんな思っているわけよ。イルベルトはあんたの実兄。サイアリーズ一揆軍は、あんたが今まで一緒に戦ってきた仲間でしょ。それと戦うのに忸怩（じくじ）たるものはないの？」

「レイテ、それを聞くのは野暮ってものだ」

見かねたエルフィンが止めようとしたが、ブライザは冷然と拒絶した。

「いえ、構いません」

ブライザは顔色一つ変えずに、レイテの顔を真っ直ぐに見つめた。

「わたくしは陛下の寵愛を受ける女です。女は愛する男にすべてを捧げるもの。今のわたくしは陛下がすべて。陛下が闘うと言うのなら、わたくしは、それがたとえ実の兄、両親、親友であろうと躊躇わず殺せます」

「お～、コワ」

レイテのおちょくる声に、ブライザはきっとして応じる。
「わたくしは陛下に、我が身の純潔を捧げました。これ以上の身の証がありましょうや」
これは暗に、レイテの破瓜の相手がエルフィンでなかった揶揄と取れる。しかしながら、レイテはその程度で怯む女ではない。
「エルフィンに処女を捧げた女なんて珍しくもないわよ。そんなのでえばられてもね」
確かにその場には、ヴァレリア、ナターシャ、カーラといったエルフィンに処女を捧げた女たちがいる。
ブライザの薔薇の棘を思わせる眼差しに睨まれながらも、レイテは揶揄する笑みを絶やさない。
「あんたがエルフィンを選んだと言うなら、もっと確実に目に見える形で忠誠、あるいは愛情を示してもらいたいわね。そうじゃなきゃ、みんな安心して戦えないよ」
「……。わたくしに、何をしろと言いたいのですか？」
「愛欲の牝奴隷が、ご主人様に示す最大の忠誠の証。それは剃毛よ」
これにはブライザも、目を瞬かせた。
一瞬、意味がわからなかったのだろう。
女たちのやり取りを聞いていた、諸将も思わずざわついた。
「て、剃毛とは？」
「つまり、陰毛を綺麗さっぱり、一本残らず剃り落とすの。つるっつるのオマ○コじゃ、

みっともなくて他の男の前で股を開けないでしょ。そこまでやってこそ、あんたがエルフィンにすべてを懸けているって納得できるわ」

レイテの提案を黙考したブライザは、直接の返答はせず、エルフィンに向かって深々と一礼した。

「わたくしの身体は殿下のものです。陛下がお望みなら、わたくしは剃毛だろうとなんだろうといたしますが？」

「そんな場所で堂々とそんなことを言われてもな……」

エルフィンは返答に困った。周囲の男たちもなんとも言えない顔で見守っている。

軽く溜息をついたエルフィンは、原因の人物に声をかけた。

「レイテ。ブライザが剃毛に応じたら、彼女を信用するかい」

「それはもちろん♪」

レイテは満面の笑顔で応じる。

（レイテ姐さんも狸だからな）

内心で苦笑しながらもエルフィンは頷いた。

「わかった。なら、ブライザ。申し訳ないが、貴女には諸将の信頼を得るために剃毛してもらう」

「しょ、承知しました……」

気位の高い女にとって、忸怩たるものがあるだろうが、ここは逃げられないと判断した

らしい。

常に堂々としている彼女らしくもなく、声に動揺が滲み出ている。

ざわざわざわざわ……。

戸惑う諸将の中、レイテは元気よく声を張り上げる。

「それじゃさっそく薔薇の剣姫様の剃毛ショーといきましょうか？　ナターシャ、アツアツの濡れタオルと、よく切れる剃刀を用意して」

「はい。ただいま」

成り行きを茫然と見守っていたナターシャは、慌てて準備にかかった。

ついでレイテは、エルフィンの寵愛を争う女の対決を、固唾を飲んで見守っていた諸将を追い立てる。

「さぁ、野郎どもは出ていった！　出ていった！」

さすがに衆人環視の中でやらないのは、武士の情けといったところだろう。

しかしながら、薔薇に例えられるほどに、美しくもキツめな美人が、これから剃毛されようというのだ。

出ていく諸侯はみなブライザに、好奇の視線を残して退出していく。

諸将が出ていくのと入れ替わりに、ナターシャが急いで戻ってきた。

「あの……これでよろしいでしょうか？」

手桶の中に、男が髭を当たる時に使う手桶と剃刀が入っている。

「うん、いいんじゃない。次はあんた。その辺で思いっきり股を開きな」
「くっ」
レイテに促されたブライザは、悔しげに立ち尽くす。
「うふふ、処女の時は簡単に股を開けたのに、今じゃ恥ずかしくなっちまったんだろ」
「……」
ブライザの顔がみるみるうちに赤くなる。
「まぁ、恥ずかしいって感じるってことは、あんたがエルフィンに本気になっているってことだろうからね。その点は評価してあげるよ」
そこで言葉を切ったレイテは、成り行きを黙って見物していたヴァレリアに声をかけた。
「そっちの見栄っ張り女。あんたには証人になってもらうよ。この女を押さえつけて」
「誰が見栄っ張りだ」
ぶつくさ文句を言いながらも、席から立ったヴァレリアは、ブライザの背後に回ると、その両腕を押さえた。
「あ、やめて、わたくしは陛下には何をされてもいい。でも、それ以外は……いやぁ」
骨の髄まで牝奴隷と堕した女らしい台詞に、見物していたカーラは呵々大笑する。
「あはは、エルフィンたら凄いじゃない。この女本気であんたのちんちんの奴隷よ。どれ、あたしも手伝ってやるか」
恥辱に悶える女の前に屈み込んだカーラは、そのミニスカートをたくし上げる。

「あはっ、男に魅せること前提のエロエロショーツね」
鼻で笑ったカーラは、細く長い足の中央を彩る華やかなショーツを引きずり下ろしてしまう。
ふわっと、頭髪と同じ薔薇色の陰毛が立ち上がった。
「あ」
ブライザは反射的に股を閉じようとしたが、ヴァレリアとカーラはそれを許さなかった。二人がかりで机の上に座らせて、M字開脚に押さえつける。
その股間にナターシャから受け取ったアツアツの濡れタオルをレイテが置く。
「まずはよく蒸らさないとね」
薔薇に例えられるほどに凛々しくも美しい女が、衆人環視の中でM字開脚になり、股間にタオルを落とされている姿というのは、淫靡なようでもあり、間抜けなようでもあり、不思議な光景だ。
もっとも本人にとっては、この上ない恥辱であることは確かだろう。
耐えられなくなったらしいブライザは、つんけんと周りの女たちに食いつく。
「貴女たちわたくしに嫉妬しているってわけ？　陛下の寵愛がもっとも厚いわたくしに……」
そんな皮肉を、レイテは笑い飛ばす。
「あはは♪　まさか、畳と女は新しいほどいいってね。エルフィンの奴も少しばかりあ

んたに夢中だけど、最終的にはあたしのところに帰ってくるわよ」
「凄い自信ですね」
驚くナターシャに、レイテは胸を張る。
「だって、エルフィンの初めての女はあたしよ。美味しかったわ、坊やのど・お・て・い♪」
レイテはわざとらしく陶酔してみせる。
その光景を呆れた顔で見ていたカーラが、ヴァレリアの脇腹を肘でつく。
「だから、ぐずぐずせずに、とっととやっちまえって言ったのに。あんな年増女に先を越されて」
「別に早い遅いは関係あるまい。それに早いという意味なら、エルフィンを精通に導き、その精液を最初に舐めたのはわたしだぞ」
「気にしているじゃん」
ヴァレリアの主張を、カーラは声を上げて笑い飛ばした。
そうこうしているうちに、股間を茹でられて、ブライザの全身が火照ってきたのか、頬が赤くなり、全身がうっすらと汗ばんできている。
「そろそろいいわね」
レイテは濡れタオルを摘み上げる。そして、その部屋にただ一人残った男の背を押す。
「さて、それじゃエルフィンお願い」
「ぼくがやるのか？」

戸惑うエルフィンの右手に、カーラが剃刀を持たせる。
「こういうのは、ご主人様がやってあげてこそ、女に被虐の歓びが植えつけられるのよ」
「わ、わかった。それじゃ」
予期せぬ事態にドギマギしながらも剃刀を持ったエルフィンは、ブライザの股間の前に屈み込んだ。そして、刃を添える。
「本当に……いいんだね？」
「はい。陛下のためならばわたくしはなんでもいたします」
「ブライザ」
愛しい女の覚悟に感動しながら、エルフィンはそのもっとも敏感な部分に添えた刃を手前に引く。
ショリ……、ショリ……、ショリ……。
みるみるうちに、薔薇色の陰毛がなくなっていく。
間違いがあってはいけないと、非常に神経を使いながら、刃を振るっていると、不意にブライザが溜息に似た悲鳴を漏らす。
「あぁ……」
直後にツーと粘液が溢れて、会陰部を通り、肛門に流れていった。
目敏く見つけたレイテが、嬉々として報告する。
「あら、なに、あんた、剃毛されながら濡れているの？」

「くっ……」

いかに揶揄されようと、女には愛液の分泌を自由にコントロールすることはできない。逆に恥辱を感じれば感じるほどに濡れてしまう。ただ恥辱に耐えるのみだ。

エルフィンは恥丘から、肉裂の左右、さらには肛門の周りにまで刃を当ててやった。これは別に尻毛を剃ったわけではない。あたかも尻毛を剃ったかのように演出してやったのだ。

おそらくブライザは自分に尻毛が生えているかどうかもよく知らないであろう。しかし、エルフィンの剃刀の動かし方から、尻毛を剃られたと思い込んだに違いない。

「ふぅ、終わった」

たっぷりと女の被虐感を煽る作業を終えて、最後に濡れタオルで、股間を綺麗に拭ってやる。

成人女性の恥丘が、赤ん坊のようにツルツルになっているさまは、なんとも妖しい。

(こうやってみるとブライザって、恥骨が高いな。ぐっと反り上がっている感じだ)

見慣れた女の陰唇であっても、剃毛したことで新鮮に感じる。

ブライザも自分の禿げ丘にされた股間を見下ろしショックを受けているようだ。恐る恐る右手を伸ばして撫でる。

「はぁ、ほんとにツルツル」

ブルリと身震いをしたブライザは、潤みきった表情でエルフィンの顔を見た。

「陛下、わたくし……」
「ああ、ぼくもだよ。もう我慢できない」
「ありがとうございます。頂きます！」
二十歳でパイパンになった女は、多くのライバルの見守る中、年下の恋人を押し倒すと、その股間からいきり立つ逸物を引っ張り出し、その上に跨がった。
そして、長い脚を大胆に開くと、腰を落とす。
ずぼっ！
剃毛されながら失禁したかのごとく、濡れまくっていた陰唇である。食い慣れた逸物を難なく呑み込んでしまった。
「ああ、凄い♪　大きいぃぃぃ♪　いい！　いいのぉ♪」
同じ男の寵を争う女たちに晒し者にされたブライザは、屈辱のあまり、身体中の性感帯が燃え上がってしまっていたのだろう。男根を咥え込んだだけで絶頂してしまったらしい。
キュンキュンキュンキュン……。
ブツブツの襞肉が、肉棒を吸い上げる。
（うわ、すげぇ、いつも以上に締まる）
絶頂痙攣をなんとか耐えたエルフィンだが、何かがぶち切れたブライザは止まらない。
人目をはばからず股を大きく開き、男女の結合部を晒しながら小気味よく前後に腰を振るう。陰毛がないから、肉棒が入り、女の中身が掻き出され、裏返るさまがまる晒しであ

る。

「あっ、恥ずかしい。恥ずかしい。あぁっ、恥ずかしい。あっ、あっ……、でも、わたくしは、陛下の女、女、女ぁぁぁ!!!」

狂ったように腰を振るいながら、ブライザはイきっぱなしの状態に入ってしまったらしい。

ブツブツオマ○コの中身はもちろん、全身がビクンビクン震えている。

「うわぁ～、この女、潮噴きまくっている。こんな淫乱な女っているんだ」

カーラが本気で呆れた声を出す。

「まったく、これから実の兄と戦おうというのに、よくやるわね」

レイテも呆れ顔だ。

「はぁ、ブライザさんは、本当にエルフィン様が好きなんですね。わたしも頑張らないと」

ナターシャは何やら決意を新たにしている。

「ふん、こんな絶壁女のどこがそんなに気に入ったんだか……」

ヴァレリアの呟きに、エルフィンが答えた。

「ん、主に顔かな。それに長い脚も気に入っている。スタイルもいいしね。それにオマ○コもブツブツで気持ちいいんだ」

それに何よりも腰使いであろう。ブライザはとにかく腰使いが激しい。好きこそものの上手なれ、というのだろうか。

男を楽しませるために腰使いをいろいろと工夫してくる。
前後に素早く振るうだけでなく、くねらせてみたり、捻ってみたりと変幻自在だ。
「ありがとうございます。わたくしは陛下の女。このおちんぽの下僕でございます！　ああ、もう、限界、お情けを、お情けを賜りとうございます！　子宮に、子宮にください！」
「ああ、ぼくも、もう限界。くっ」
情熱的な痴女の鬼腰に振り回され、肉棒は爆発した。
どびゅ！　どびゅっ！　どびゅ！
「はぁぁぁぁぁぁぁ!!!」
もうすっかりイき癖のついた女にとって膣内射精は、何よりの刺激であるらしい。
すでにイきっぱなしであったブライザは、仰向けにぶっ倒れた。
それだけではなく、男女の結合部から、盛大に潮、いや、小水を噴き出した。それが周りで見物していた女たちの身体にかかる。
「うわ、気持ちよさそうにイっちゃって。この女むかつく」
嫌がらせをしたことで、いつも以上に盛り上がってしまったブライザの姿に、レイテは地団太を踏む。

※

「うふふ、今夜。すべてが変わる。古き世界は終わりを告げ、兄様が新しい世界を導いてくれる」

夜間、エルフィン率いる本隊は、サイアリーズ領をひそかに潜行していた。目指すはイルベルトの居城ベリージャム。

すべてはブライザの作戦通りだ。

夜間、しかも森の中。軍隊は細く長く行軍せざるを得ない。逆にサイアリーズ軍にとって、この森は庭も同然だ。

かつて、不用意に入り込んだセルベリア軍を何度も撃退している。必殺の布陣と言っていいだろう。

ブライザはすべてをこの日、この夜のために懸けていた。

西方半島の三分の二を押さえているエルフィンに対して、イルベルトは三分の一、単純に考えて二倍の兵力差である。

それを覆すために、こうなるように仕組んだのだ。あとはサイアリーズ軍が得意の奇襲をかければ、エルフィンの軍は壊滅する。

持久戦になれば、基礎組織のしっかりしているエルフィンに軍配が上がる。地力の違うイルベルトが、勝利するにはこれしかなかったのだ。

ブライザは、その瞬間を今か今かと待ちわびながら、行軍を続けていた。

そうこうするうちに、空が白んでくる。

(遅い。いや、朝駆けをするつもりなのか)

ブライザは兄の思惑を必死になって考える。

そうこうしているうちに、エルフィン軍は森を抜けてしまった。目の前にある、まだ改修途中のベリージャム城を見上げる。

「ば、バカな……」

開けた場所での戦いでは兵力がものを言う。ここまできたらもはやイルベルトの手兵では太刀打ちできない。

茫然とするブライザの背後から、声がかかった。

「ブライザ、そろそろ陣屋に入ろうか。夜通し歩いて疲れただろ」

「エ、エルフィン様!?」

振り返ったブライザは、なんとか平静を装う。

「いえ、わたくしは今少しここに」

「待っていたって、何も起こらないわよ」

嘲笑を含んだレイテの言い回しで、ブライザはその意味を否応なく悟らされた。

「ま、まさか……!?」

「ええ、あんたの密使はすべてあたしが止めたからね。貴女の大事な兄様は、あたしたちが今夜ここを通ったことを知らない。いや、今頃気づいて慌てている頃かな。何せあちらさんはこちらの情報はすべて手に入ると思って油断しまくっていたからね」

レイテの言葉の意味を必死に考えたブライザは、驚愕に目を剥く。

「ま、まさか!?　陛下はわたくしのことを今までまったく信用していなかった。それどこ

ろか信用していると思っているわたくしを利用した……？」
「あんたはエルフィンの信用を得るためにいろいろとやってくれたわよね。処女を捧げ、腰の振り方やフェラチオを練習して、おしっこを飲んで、果ては尻毛まで剃られた。ここまでやれば男は自分にメロメロだと思ったんだろうけど、……残念だったわね。うちのエルフィンは、あんた程度の女に溺れるほどに器の小さな男ではないのよ」
「……」
エルフィンの気の毒そうな眼差しに晒されて、ブライザは現実を見せつけられた。
「くっ、すべてを承知で、わたくしを弄んでいたのか……っ！」
エルフィンを騙すため、女として身を切るような思いで行った痴態の数々。それがすべて無駄だったのだ。いや、それどころか敵を利することになってしまった。
根がまじめな彼女としては本当につらかったに違いない。
「男に身体を求められたから信頼されている、と考えるのは若い女が陥りやすい失敗の一つよね」
レイテの嘲笑に、ブライザは一言も言い返せない。
「兄さんに強要されたんでしょ？　大事に至らなかったんだ。不問に付すよ」
見るに見かねたエルフィンは慰めようと手を伸ばすが、ブライザは飛び退く。
「わたくしに触れるな！」
虚しく手を伸ばしながら、エルフィンは必死に訴える。

「ブライザ、ぼくはサイアリーズを敵だとは思っていない」
「煩い！　かくなる上は……」
抜剣をしたブライザは、エルフィンと刺し違えようとしたようだが、それより早くローシーら親衛隊が間に割って入った。
「裏切り者。いや、敵の間者を取り押さえろ」
ロージーの声とともに、兵士たちが襲いかかるが、ブライザは砂煙の魔法で視界を塞ぐと、馬上の人になっていた。
「まだだ！　兄様は、サイアリーズの民は負けてはいない」
「この状況から逃げられると思っているの」
得意の組紐を放とうとしたレイテを、エルフィンが止めた。
「いい、行かせてやれ」
レイテの動作がぴたりと止まる。
一同が見守る中、ブライザのほうは脇目も振らずに一直線に馬で駆けていく。
その後ろ姿を見送るエルフィンに、レイテが皮肉っぽく質問した。
「抱いた女だから情があるってわけ？」
「いや、それもないとは言わないけど。ここで彼女を殺したら、サイアリーズとの関係修復は不可能になる」
サイアリーズの薔薇とまで称えられる彼女を殺しでもしたら、サイアリーズの民衆に不

倶戴天の敵のように恨まれることになる。イルベルトとも妥協なき潰しあいをしなくてはならなくなるだろう。それだけは避けたかった。

この期に及んでまだ和睦の道を探していたエルフィンに、レイテは肩を竦める。

「まぁ、民衆を殺すなど、自分の腕を喰うタコみたいなもんだしね。せいぜいがんばんな」

第五章　薔薇、散る

「さて、イルベルト殿はどうするつもりかな？」

イルベルトの居城ベリージャムを囲んだエルフィンだが、攻撃しようとはしなかった。

城内にいるのは、戦いを想定していない留守部隊。女子供が中心だ。しかも城はまだ改修中ときている。圧倒的な大軍を持つエルフィンが攻撃を仕掛ければあっさりと攻略できるだろう。

しかし、包囲するに留める。

これは、いわばイルベルトに対する人質であった。人質とは生かしておいてこそ価値があるものだ。

イルベルト本人及び兵士たちの家族を守るために、カドレー川の河畔でヴァレリア、カーラと対陣していたイルベルトは、押さえの兵だけを残して、急ぎ引き返してくるだろう。

そうしないと、家族を心配した兵士たちの士気は激減。場合によっては脱落者が相次ぐことになる。

「イルベルト軍の現れる方角はおのずと見当がつく。万全の出迎えをしろ」

敵軍の来襲するだろうルートを想定して、エルフィンは巨大な野戦陣を作らせた。

人の身長の二倍以上の深さ、長槍でも届かない幅の空堀を掘り、さらに頑丈な柵を巡ら

す。それはあたかも要塞のようだ。
予想通りやってきたイルベルト軍は、エルフィンの敷いた陣を前にして立ち尽くしている。
「これを見て勝機なし、と降伏してくれるといいのだが……」
鉄壁の布陣を前に愕然としているサイアリーズ軍の兵士たちを櫓の上から見下ろしたエルフィンは呟く。
このベリージャム城に展開するエルフィン軍と、イルベルト軍の兵力は、双方ともに五千ほどである。ほぼ互角であったと言えるだろう。
あるいはベリージャム城内の兵力や、地元であることを考えると、イルベルト軍のほうが多いかもしれない。
もちろん、兵士の質や組織の整備という意味では、エルフィン軍のほうが上である。そして、何よりも、時間をかけると背後からヴァレリア、カーラの軍がやってくることは自明の理だ。
二倍の兵力で前後から挟まれたら、どんな軍勢だとて勝機はない。
サイアリーズ軍の勝機は、ヴァレリア、カーラの軍勢が来援する前に、鉄壁の防御陣を敷くエルフィンの軍勢を蹴散らすしかないのだ。
そして、それが大変困難であることは、誰にでも想像がつくであろう。
「進めぇ！　柵を突破せよ！」

馬に乗ったサイアリーズ軍の伝令が駆け回っている。どうやら無謀にも真正面から堀と柵の突破に賭けようということになったようだ。

「やっぱり、一戦しないことには収まりがつかないか……」

溜息混じりのエルフィンの言葉に、傍らに立っていたレイテが軽く応じる。

「まぁ、ここまできたら、奴らとしても振り上げた拳は下ろさないと気が済まないだろうさ」

「うん……」

希望は希望として、現実にはならないだろうとは、エルフィンも思っていた。

しかし、無意味で徒労な戦となるだろうことも予想がつく。

「仕方ない。否応なく決戦だな。一戦して勝つことによって彼我の実力差を見せつける。襲い来る敵を堀の中に叩き落とせ！」

「おおおおお!!!」

エルフィンの応戦の命令に応えて、兵士たちは一斉に雄叫びを上げる。

戦機は熟した。

空堀の向こうの柵に籠もるエルフィン軍と、それを突破しようと歩を進めるイルベルト軍。

「放て！」

ことを急がねばならないイルベルト軍は、初っ端から全力攻撃である。

空が陰るほどの弓矢を射て、空気が霞むほどの魔法を炸裂させた。
ビリビリビリッ!!!
地鳴りがするように大地が震える。
当然ながら、エルフィン軍の陣営からも魔法が発動される。宙を舞う矢は見えない膜に弾かれ、目もくらむような魔法攻撃を受けた柵は傲然とそびえ立つ。
「怯むな！　進め！　直接柵に魔法をぶち込め！」
エルフィンの敷いた柵は魔法で強化されている。しかし、補強魔法を超える圧倒的な魔力をぶつければ、効力は消し飛ぶ。
破壊力を増すためには、より対象物の近くからぶつけてやればいい。
イルベルトの兵士たちは命を惜しまず、堀に飛び込み、柵に鉤縄をかけて登ると、魔法で強化された武具で、柵をぶんなぐる。
もちろん、それをさせじと、エルフィン軍も柵の間から槍や丸太を突き出して、登ってくる者たちを叩き落とし、頭上から弓矢や魔法を浴びせる。
当然ながら、柵に籠もるエルフィン軍のほうが圧倒的に有利な形だ。
たちまちのうちに堀は、負傷兵で埋め尽くされていった。しかし、サイアリーズ軍の兵士たちは、負傷した仲間の身体を乗り越えて登ってくる。
「イルベルトさんのために！　今こそ恩義に報いる時だ！」
「あんな陰気な貴族の小僧に俺たちの気持ちがわかってたまるか！」

叩き落としても叩き落としても、サイアリーズの兵士たちは堀から立ち上がり、柵に食らいついてくる。

その士気の高さは驚嘆に値した。

「たいした人望だ。イルベルト殿は本当に民に慕われているんだな……」

サイアリーズ地方の民が一番苦しい時、すべてをなげうって助けてくれたのがイルベルトである。エルフィンではない。

みな本気で、イルベルトのために死んでもいいと思っていることは、その無謀とも思える果敢さからヒシヒシと伝わってくる。

中でも一際、士気の高かったのが、左翼の部隊だ。

「あれはブライザか」

櫓の上から眺望するエルフィンは、薔薇色の髪をした戦女神を見つけた。

臙脂色の短マントを棚引かせ、草色の戦衣を纏った女戦士は、愛用の剣を振るい、最前線で指揮を執っている。

襲い来る矢の雨を討ち払い、魔法を蹴散らして進む勇姿は、サイアリーズ軍の勝利の女神『薔薇の剣姫』に相応しい。

「一か所でいい堀を埋めろ！　よし、今だ道を開けろ！」

「んっ!?」

巨大な丸太が滑ってきた。いや、丸太の左右に綱を付けて三、四十人の兵が力を合わせ

て引いてきたのだ。
そして、巨大な弩から矢を放つかのように、巨大な丸太が投げ出された。それが地鳴りを上げて大地を滑って進む。
ゴォォォォォ!!!
勢いよく進んだ丸太は、堀を飛び越えて、魔法強化された柵に突っ込んだ。さすがにこの質量の物体を弾くほどの強化はされておらず、ぶち破れる。
「よし、わたくしが行くっ！」
丸太橋に飛び乗ったブライザは、率先して駆けだした。
そして、柵まで達すると、愛剣に魔法を乗せて、赤い紅蓮の巨大な剣を作りだし、薙ぎ払った。
ドカァァァン!!!
鉄壁を誇ったフルセン軍の柵がぶっ飛んだ。
「なんとっ!?」
余裕綽々で見物していたエルフィンが、思わず目を点にした。
粉塵舞う中、薔薇色の髪の戦女神は、燦然と輝く剣を掲げて叫んだ。
「柵は突破したぞ！」
「おぉぉぉぉ!!!」
サイアリーズ軍はついに柵の一部の突破に成功したのだ。

「ひゅ～、執念だね」

思わずレイテは口笛を吹いて感心する。

破られた柵の部分にはただちに予備兵力が当てられたが、闘志溢れるブライザは、あっという間に一人をなぎ倒し、一人を突き殺し、一人を魔法で吹っ飛ばした。

その武勇に勢いを得たサイアリーズ軍が、切り開いた傷口から侵入してくる。

「よし、このまま一気に切り込んで、エルフィンの首級を挙げる！　わたくしに続け――ッ!!!」

エルフィンの軍勢は、柵を設けて、広く左右に展開していた。つまり、横陣である。

そのため奥行きはそれほどなかった。一部を突破されると、後は意外に脆い。

横陣に対する基本は、一か所を破ればいい。あとは中央突破だ。そうすれば他の柵の前に構えた兵は遊軍となる。

それを見越してブライザは委細構わず、一気に切り込んだ。

寄る敵を蹴散らしながら進むブライザは、櫓の上に目指すべき男がいると見抜いているようで、棘というよりも、火を噴くような眼差しで睨んできている。

それを受けてレイテが、傍らの少年王にジト目を送った。

「あんたさ、めっちゃ恨まれているわよね。あの娘に何やったの？」

「いや、いろいろやったけど」

彼女のほうから、色仕掛けでエルフィンを罠に誘おうとしたのだから、なんでも応じて

くれた。それが面白くて、普通ではできないことをいっぱいやってしまったことは確かだ。
処女を頂き、おしっこを飲ませて、野外でエッチしたりもした。
自分から積極的に腰を使いまくった彼女は、イきすぎて、潮噴き体質になってしまったほどだ。
もっとも、策略だから痴女を演じたのであって、本来の彼女は貞操観念の強い、極めて誇り高い女だったのだろう。
敬愛する兄を、西方半島の主にしようと、自らの主義主張を曲げて屈辱に耐えていたというのに、その努力がまったくの無駄であったばかりか、裏目に出てしまった。
そのことで、身を切るような恥辱にさいなまれた彼女は、自己の尊厳を保つために、エルフィンを烈火の如く恨んでいるのではないだろうか。
「でも、トドメはレイテ姐さんの提案した剃毛だと思いますよ。あれは彼女の自尊心を決定的に傷つけたと思います」
「あれは彼女に自信を持たせるために必要だったのよ。自分はここまでやったんだから、エルフィンは自分の愛を信じているってね」
その女としての驕(おご)りを利用されたと知ったブライザは、今復讐の女神と化しているというのに、エルフィンもレイテも至ってのんきである。
群がる敵兵を蹴散らして進むブライザは、ついには櫓の下にまで達した。
そこで長巻を持ったロージーら、エルフィンの直属の兵士たちが迎え撃つ。

「恐れ多くもエルフィン様の寵愛を受けながら、それを謀ったバイタが！　生かして帰さん！」

「言ってなさい！　わたくしは身体を許しても、心は常にサイアリーズと共にあった！」

親衛隊とブライザたちの死闘を、櫓の上から見下ろしたエルフィンは他人事のように批評する。

「敵ながら天晴れといったところかな？　まさかここまで切り込んでくるとは思わなかった。だが、残念ながら届かなかったな」

決死の元恋人から視線を逸らしたエルフィンは、悠然と魔法の時計で時刻を確認した。

「そろそろだろ」

「ええ、来たみたい」

イルベルト軍の後方を眺望してレイテも頷く。

そこでは土煙が上がっていた。

ヴァレリア、カーラの部隊が来援したのだ。

モウモウと煙が高く上がっているのは騎馬隊の証だが、意図的に自軍を大きく見せる演出でもあるだろう。

それを見てイルベルト軍の全体に悲鳴が上がった。逆にエルフィン軍からは歓声が上がる。

「背後から、背後から、敵がきた！」

「勝った！　勝ったぞ！　大天使の降臨だ！」
エルフィンの愛人の一人ヴァレリア。舞う羽の軍旗を掲げる女将軍。旧セルベリアの中枢であった彼女の存在感は圧倒的だ。
ヴァレリアとカーラの部隊が、イルベルトを追ってやってくることは誰もが予測できたことだ。
しかし、正面のエルフィンの陣屋を突破するために全力を挙げていたイルベルト軍には、この局面で背後からくる敵に対処できる余力はなかった。
完全に戦闘能力の許容量を超えてしまい、恐慌を起こした兵士たちは、我を忘れて雲散していく。
「くっ」
ロージーと刃を交えていたブライザは、距離を取り、悔しげに櫓を見上げた。
あと一歩、あと一歩で憎き仇に肉薄できるというのに、攻勢が限界に達したことは認めざるを得なかったのだろう。
「降伏しろ、女狐。エルフィン様の好意を裏切った報いをたっぷりと味わわせてやる」
嗜虐的な笑みを浮かべる小娘を一瞥したブライザは、左のイヤリングを取ると、投げつけた。
ドオオオオオオオオオオオ!!!
閃光が炸裂する。

「悪あがきを！」

ロージーが思わず腕で顔を覆っている間に、ブライザは踵を返していた。

敵の切り込み隊長を取り逃がしたわけだが、そんな瑣末なことは気に留めず、エルフィンは全体の戦局に目をくれる。

「さすがだな、ヴァレリア様は。敵の退路を大きく空けてくれている」

退路を塞がれた者は死に物狂いで戦うが、逃げ道があれば逃げたくなるのが人の心理というものだ。イルベルト軍の兵士たちは我先と逃げている。

エルフィンの戦略目的は、敵の殲滅ではない。エルフィンとイルベルトの格の差を、内外に見せつけることが目的である。

サイアリーズ地方も統治したいエルフィンとしては、殺せば殺すだけ将来のマンパワーが失われるわけで、できるだけ逃げ延びて欲しいのだ。

「決まったな。追撃戦は不要だ。堀に落ちた敵もできるだけ治療してやれ」

憎らしいまでに余裕綽々のエルフィンとは逆に、最前線から戻ったブライザは、大混乱に陥るサイアリーズ軍の中を駆け抜けて、兄のもとにはせ参じた。

「ここはわたくしが殿を務めます。兄様は、お逃げください」

「しかし」

躊躇う兄を、目を怒らせた妹は説得する。

「負けたのは今回が初めてではありますまい。戦いはこれからも続きます。兄上を失うわ

けにはいきません。どうか捲土重来をお図りください」
「すまん」
言い争っている時間はない、イルベルトは踵を返した。
イルベルトはまだ負けたわけではない。領主としての地位は失うだろうが、かつてセルベリア王国と対したように、徹底したゲリラ戦は続けることができる。
馬に乗った兄が退く光景を見送ったブライザは、独り戦場に残った。
そして、逃げる味方を無視して、追い来る敵に向かって血塗られた剣を振りかぶった。
「我こそはイルベルトが妹ブライザ。薔薇の棘は刺さると痛いと言うが、我が刃は刺さると死ぬぞ」
薔薇に例えられる気高き女闘士は、死を賭した者の目であたりを睥睨する。
ゴォォォ！　といった気炎が背中から立ち昇っているのが見えるかのようだ。
刀身は何倍にも見えるほどの魔法を込められている。一薙ぎで万余の敵を薙ぎ払えるのではないか、と思えるほどの威圧感だ。
彼女を前にして、フルセン軍の勇士たちがみな足を止めた。
単に彼女の武勇に恐れをなしたのではない。すでに全軍に追撃無用の沙汰が出ていたこともあるし、何よりも彼女が最近まで主君の寵愛する恋人であったことは周知の事実だ。
それが敵に回ったからといって、直接刃を振るっていいのか、と躊躇ったのである。
みながこの、曰くのありすぎる女闘士をどうしたものか、と牽制しあっているところに、

人垣を割って馬を進めた者がいる。
「どこまでもバカな女だ」
竜胆色の鎧に身を包んだ紫銀色の豊かな髪。騎乗用長槍を持った大天使ヴァレリアだ。
「エルフィンが家臣コンミュウス家が当主ヴァレリア。いざ、参る！」
白馬を駆ったヴァレリアの突撃を、大地に立ったブライザが迎え撃つ。
馬体の質量の乗った一撃を転がるようにして避けたブライザは、魔力の乗った剣で払った。
「はぁぁぁぁぁぁ！」
必殺の一撃をヴァレリアは空中に跳んで躱す。落下しながら連続突きを放つ。
ガツン、ガツン、ガツン！
長槍と大剣がぶつかり、稲妻のような魔法光があたりを照らす。
大地に降り立ったヴァレリアは、長槍を構えながら口を開く。
「もはや勝敗は決した。これ以上の戦乱は無用な遺恨を作るだけだ。投降してエルフィンの慈悲に縋ったらどうだ」
「ふざけるな。あのような淫猥卑劣な暴君に下げる頭などない！」
ブライザの決めつけに、ヴァレリアは眉をひそめる。
「貴様から色仕掛けでエルフィンに近づいたのだろう。それで散々に弄ばれたからといって恨むのは、筋違いというものだ」

「確かにそうだ。しかし、あやつの女好きを見越してのことだ。あやつは捕虜となったおまえを陵辱していただけではない。カーラ将軍もまた辱めていたのだぞ」
「カーラ？」
思いもかけないところで親友の名を出されてヴァレリアは戸惑いの表情を浮かべる。それと察したブライザは、嬉々としてエルフィンを弾劾（だんがい）した。
「ああ、あやつは虜囚の身になっていたカーラを救出するついでに一方的に弄んだのだ。あんな卑劣な男に王たる資格はない！」
決めつけながら切り込んでくる刃を受けた、ヴァレリアは苦笑する。
「うふふ、カーラなら、まぁ、しょうがないか」
その評価に、ブライザの怒りはさらにいや増す。
「貴様とカーラ将軍は親友なのだろ。それが辱められてもなんとも思わぬのか！　さすがはセルベリアの犬だったくせに、愛欲にまみれて忠節を汚した女だ」
「わたしたちのことはおまえなどにはわかるまい。それにおまえはエルフィンを憎むための口実が欲しいだけだ。その憎悪の激しさが、エルフィンへの愛情の裏返しと気づけ」
「ふざけるな！　貴様などにわたくしの気持ちがわかってたまるか！」
「わかるさ。貴様はわたしによく似ている。だから、考えていることも我がことのようによくわかる」
何やら叫びながら刃を合わす女傑たちの争いを、兵士たちは遠巻きに見ている。

とてもではないが、常人には手を出せる雰囲気ではない。
主君の寵愛深い女たちの激突を、兵士たちは手出しをできず見守っていたが、そんな中、白いパンツスーツの軍服に、紫色のマントを羽織った女将軍が溜息をついた。
「まったく、無駄に暑苦しい女どもね。こんなところで一騎打ちなんかしてなんの意味があるんだか。よっと」
馬の手綱を引いたカーラは、銀のレイピアを持って参戦した。
「なっ」
ヴァレリアとの一騎打ちに集中していたブライザは、カーラの強襲に対処しきれなかった。
「ふんっ」
すれ違いざまにカーラの銀のレイピアの柄が、ブライザの首の後ろに叩き込まれる。
「くっ……卑怯者め」
無念の表情を浮かべたブライザの膝は崩れ落ちた。
「悪いね。あたしら戦争やってんのよ。戦争はロマンじゃないの」
肩すかしを食らった形のヴァレリアも何か言いたそうな目で、馬上の先輩を見上げたが、カーラのほうは気楽に肩を竦めた。
「さて、これで終わり。あぁ、今日は仕事しすぎで疲れちゃったぁ」
こうして、ベリージャム城の戦いは終結を迎えた。

※

「ブライザ、久しぶりだね。というほど時間は経っていないか？」

イルベルトの救援軍が撃退されたことによって、包囲されていたベリージャム城は降伏を申し入れてきた。

エルフィンはこれを認める。特に制約は求めず、籠城していた人々を解放してやった。

それらの手続きを遺漏なく終わらせたエルフィンは、重臣たちと捕虜の引見を行う。

まずは荒縄で後ろ手に縛られたブライザがひっ立てられてくる。

用意された椅子に腰を下ろしたブライザの荒縄を解くようにエルフィンは命じた。

両腕の自由を回復したブライザであったが、特に感謝の念は表さない。

「今さら語る言葉はない。早く殺せ」

まるで親の仇でも見るように睨まれたエルフィンは、半ば予想できた反応に軽く溜息をつく。

そこでとりあえず、ブライザが知りたがっているであろう、情報を提供する。

「イルベルト殿は、無事エボージョン城に逃げ込んだみたいだよ」

「そうか……」

生きて虜囚の辱めを受けているとはいえ、総大将である兄を逃がすという最低限の仕事は果たせたのだ。ブライザは満足そうな笑みを浮かべた。

「でも、もうイルベルト殿には勝ちの目はないよ。もはや組織だった抵抗はできない。こ

れ以上の騒乱は、民に迷惑をかけるだけだ。誰の利益にもならない。貴女が使者となって降伏するように説得してもらえないだろうか？」

「ふん、綺麗事を」

顔を背けて吐き捨てるブライザに、エルフィンは懇々と説得を試みる。

「ぼくはね。何度も言ったけど。サイアリーズ地方の人々に恨みはない。仲良くしたいと思っているんだ。イルベルト殿さえその気になってくれれば、これまで通りサイアリーズ地方の領主として遇するし、その配下の人々を処分する気はない」

しかし、ブライザは聞く耳を持ってはくれなかった。

「貴様がいかに卑劣な男であるかは、わたくしが一番よく知っている。この女の敵め！」

「女の敵は酷いな」

ちょっと傷ついた顔をしたエルフィンは、立ち上がるとブライザの側に立った。そして、顔を近づける。

「ぼくは貴女のことを愛している。貴女だってぼくのことを愛しているって言ったでしょ」

ブライザの尖った顎に手をかけて、顔を上げさせたエルフィンは、その唇を奪う。

「……っ！」

ブライザは振り払おうとしたが、エルフィンは許さず唇を舐め、強引に口内に舌を入れた。

前歯を舐めさらに、奥に舌を入れた瞬間である。

ゴリッ。
舌を噛まれた。
たまらずエルフィンは唇を離し、顔をしかめる。
「いてて……」
「汚らわしい真似はするな。わたくしがおまえと肌を合わせたのは、すべて策略ゆえのこと。おまえとてそうなのだろう。今さらわたくしを騙す必要もあるまい」
まさに棘だらけの薔薇のような女に、エルフィンが手を焼いていると、末席から見守っていたロージーが激昂した。
「貴様、エルフィン様が優しくしていれば付け上がりやがって！」
「……」
ブライザのほうは、ロージーなど眼中にないようである。一瞥をくれただけで無視した。
それにますます激昂したロージーは、主君に訴える。
「この女、エルフィン様の寵愛を受けながら裏切るなど、言語道断です。望み通りこの世でもっとも惨めな処刑をしてやりましょう！」
ロージーの進言も一理ある。
あまりにもブライザに拘るのも、エルフィンの王としての権威や器量にかかわるだろう。
しかし、その決断をしかねているところに、ヴァレリアが口を開いた。
「その女はわたくしが預かろう」

「ヴァレリア様!?」
思いがけない提案に戸惑うエルフィンに、ヴァレリアは力強く応じた。
「決して悪いようにはしない。わたしを信じろ」
「そ、それじゃ、お任せします」
エルフィンとしては、ブライザに処刑を告げなくてよくなった、というだけでヴァレリアの提案はありがたかった。

※

「ヴァレリア様、用事があると伺いましたが？」
サイアリーズ地方の統治にあたって、ベリージャム城は極めて重要な土地である。
そこに入城したエルフィンは、しばし軍政を敷く。
エボージョン城に逃げ込んだイルベルトは、軍を進めれば自落してゲリラ戦に転じることは目に見えている。
それだけに封じ込めるための策はできるだけ打っておくに若くはない。レイテなどを派遣して、できるだけ民間人を慰撫しておこうと考えたのだ。
一仕事を終えたエルフィンに、ヴァレリアから私室への誘いがあった。
「あぁ、来たか。少し待て、今汗を流したところだ」
部屋に入るとヴァレリアは、バスタオルを一枚を胸元に巻いて、頭をタオルで拭いていた。

戦線も一段落したわけだし、恋人たちが息抜きの時間を過ごしても問題ないだろう。
鼻の穴を膨らませたエルフィンが、今にも飛びかかろうとしたところに、別の方向から声がかかった。
「久しぶりの風呂だからな、気持ちよかった」
壁際のソファーに腰を下ろし胡坐を掻いたカーラが、大きなワイングラスになみなみと赤ワインを入れて、香りを楽しんでいた。
こちらも風呂上がりらしい。素肌に白いバスローブを纏っている。
「あれ、カーラもいたの」
「まぁね♪」
下心を見抜かれたような気分でギクリとするエルフィンに、悪戯っぽく片目を閉じてみせたカーラは、さらに素足で床を指し示す。
「もう一人いるぞ」
「き、貴様ら、どういうつもりだ!?」
そこにいたのは、素っ裸のまま亀甲縛りにされ、さらに両手両足を固定された妙齢の美女であった。
「あ、ブライザ!?」
屈辱と憤慨に満ちた表情を浮かべたブライザを見て、さすがに驚いたエルフィンは恐る恐る質問する。

「あの……ブライザに何をしたの？」
「別に～♪　そいつも埃まみれで汚かったんでな。洗ってやった」
ワインを舐めるカーラは、まるで拾ってきた野良猫でも洗ったとでも言いたげな口ぶりだ。
「風呂に入れてあげたんだぁ……」
エルフィンの表情はなんとも微妙なものになった。
ヴァレリアとカーラ。この二人のお姉様がいかにえげつないか、それはエルフィンが一番よく知っているつもりだ。
何せ子供の頃から散々に弄ばれてきた身だ。
きっと洗うとは名ばかり、縛られて動けないブライザに性的な虐待をしまくったに違いない。今の怒り狂っているブライザの様子から見て、その予想は間違ってはいまい。
立ち尽くすエルフィンを他所に、髪を拭き終えたヴァレリアは、部屋に備えられていた大きなベッドに腰を下ろすと、自らの左側を叩いた。
「さて、エルフィン、こっちにこい。話がある」
「あ、はい」
弾かれたようにエルフィンは、ヴァレリアの横に座る。
ヴァレリアを怖いと思いながらも、基本的に大好きなエルフィンだから、逆らえない。
「うふふ♪」

妖しい笑みを浮かべたヴァレリアは、借りてきた猫のようになっているエルフィンの顎に手をかけた。

「あの煩い女が主張するのだ。おまえが動けないカーラを弄び、散々に陵辱していたとな」

ギク……。

エルフィンは背筋に氷を落とされたような気分を味わった。そこにブライザが叫ぶ。

「そうだ。その男は最低の女好きだ。動けないおまえや、その女を徹底的に辱めた。そんな奴に王たる資格はない。きっとジューザスにも勝る稀代の暴君になる」

罪を暴かれたエルフィンの前に、ヴァレリアはねちっこく笑う。

「ということだが、おまえの見解を聞こう？」

「いや、そのカーラは特別というか……。カーラとは昔からいろいろあったし……」

ヴァレリアの顔をまともに見られず、瞳を泳がせながらエルフィンは言い訳する。

「それで貴方は動けないカーラを犯ったの？　犯らなかったの？」

その声色は優しいが同時に、意図的に恐怖が乗せられている。追い詰められたエルフィンは、チラリと当事者を見た。カーラは澄ました顔で、ワインを楽しんでいる。

「や、やりました……」

「ほら、見ろ。まさに女の敵だ」

四つん這いのブライザは鬼の首でも取ったかのように叫ぶが、当の本人であるカーラは灰褐色の髪を掻き上げながら、あっさりと答える。

「凄かったわよ。盛りのついた犬みたいにガツガツやってきてね。ビュービュービュー射精してくんの。おかげであたし、腰が抜けちゃったわよ。まぁ、あたしが魅力的すぎるってのがいけないんだけどね」

そんなカーラを尻目に、冷たい笑みを浮かべたヴァレリアが、強張るエルフィンの顔を覗き込む。

「知っているか？　恋人の親友とやるというのは、男として最低の行為の一つだぞ」

「はぅ」

すっかり塩を振られた青菜のようになってしまったエルフィンを見て、カーラは笑いながらソファーから立ち上がった。

「まぁ、あんたとあたしの仲だし、恨みごとを言うつもりはないんだけど。ただ一つ、質問があるの」

寝台に腰かけるエルフィンに近づいたカーラは、ヴァレリアとは反対側へと腰を下ろした。

そして、手を伸ばし、エルフィンの顎を捉えると、意味ありげに顔を近づける。

「な、なんでしょう？」

嫌な予感がするエルフィンに、カーラは黄色い瞳を輝かせて質問した。

「あたしと、ヴァレリアと、そこの女。どのオマ○コが一番気持ちよかった？」

「いっ!?」

エルフィンは右のヴァレリア、左のカーラ、正面のブライザといった年上のお姉様たちの顔を交互に見た。

誰を挙げても角が立つことは確実である。

（ヴァレリア様のオマ○コがぼくのおちんちんには一番合っているような。いや、ブライザの痛いほどにブツブツしたオマ○コも気持ちいい。でも、カーラのグネグネとした奔放なオマ○コも捨てがたいというか……いや、ここは全員気持ちいいと答えるのが正しいのか？　でも、そんな答えで納得してくれるか？）

脳裏がショートするほどに考えたエルフィンの全身からは、まるで蛇に睨まれた蛙のように脂汗がダラダラと出た。

その姿にカーラが、楽しげに呵々大笑する。

「あはは、それはまぁいいか」

恐ろしすぎる質問を取り下げてもらったエルフィンが、安堵の溜息をついていると、カーラは新たな提案をする。

「今日は久しぶりに、ヴァレリアと二人であんたを楽しませてやろうと思ったんだけど。どうよ？」

「えっ!?　ふ、二人で……」

左右の風呂上がりのお姉様の胸元や太腿に素早く視線を走らせて、エルフィンはゴクリと生唾を飲む。

「昔はよく三人で風呂に入ったろ」
バスローブ姿のカーラがエルフィンの頭を抱き締めてきた。
綺麗なお姉様二人に、性的な玩具にされる日々。それはエルフィンにとってトラウマであると同時に、甘酸っぱい青春の思い出でもある。
目隠しされて年上の美人お姉さん二人と、風呂に入る。そして、身体を洗わされたり、洗ったりしたのだ。
思春期の童貞少年は耐えられず、何度も射精してしまった。
「あの女にわたしたちの関係を見せつけてやれば、誤解も解けて、少しは素直になると思うわよ」
バスタオルを一枚巻いただけのヴァレリアが、同じように右から抱きついてきた。
顔の右側からヴァレリアの弾力と匂い、左側からカーラの弾力と匂い、が襲ってくる。
「戦の後、男は猛るというしな。もうお互い、一線越えちまったわけだし、最後までやってやるぞ」
「さ、最後まで……」
「ああ、濃厚なやつを骨の髄まで楽しませてやる」
左右から美しくも恐ろしいお姉さんたちに挟まれておどおどしていたエルフィンは、結局は誘惑に負けた。
「よ、よろしくお願いします」

顔を真っ赤にして、何度も生唾を飲みながら、懇願する少年の姿に、ヴァレリアとカーラは莞爾と笑った。

「素直でよろしい」

「おまえは所詮、どこまでいってもわたしたちの玩具ということだな」

まずはヴァレリアが、エルフィンの顔に覆いかぶさると、唇を奪ってくる。

「う、うむ、うむ」

ヴァレリアの唾液がエルフィンの口内に流れ込んでくる。それを嚥下していると、ヴァレリアの顔が上げられ、代わってカーラの顔が近づいてきた。

「まぁ、童貞こそ食い損ねたが、あたしたちは接吻とか当たり前のズボズボの関係だからね」

そう嘯きながらカーラは、エルフィンの唇を塞いできた。

もっとも、それはブライザに聞かせるためのウソだ。三人でいろいろとエッチなことをしたことは事実だが、接吻はしてなかった。

「ちゅぷ、ちゅぷ、ちゅぷ……」

カーラがエルフィンの口内を吸ってくる。エルフィンが舌を差し出すと、カーラは口内でチュウチュウと吸った。

それを見たヴァレリアもまた負けじと唇を押しつけてくる。

一枚の舌が、二人の美しくも恐ろしいお姉様によって交互に吸われた。そのうちに昂ぶ

ったお姉様たちによって左右から同時に咥えられる。
エルフィンの口内には美女たちの唾液が溢れ、顎を濡らし、胸元にまで達した。
「はぁ～……」
ようやく女たちによる唇陵辱が終わり、濃厚すぎる接吻をされたエルフィンは、脳が蕩けて溜息をつく。
そこにブライザの非難の声が上がる。
「おまえたちは何をやっているんだ!?　二人とも、その悪魔のような小僧に、辱められ陵辱された身だぞ。それなのに自分から進んで奉仕するなど」
信じられない、といった顔で目を剥いているブライザに、ヴァレリアは冷めた瞳で応じる。
「わたしたちの仲は、おまえが考えているよりも遥かに濃密なのだよ」
「ちょっとしたおイタぐらい許すわよ。これはあたしの可愛い玩具なんだから♪」
カーラも満足げに、エルフィンの頬を撫でる。
「け、汚れている。これだから貴族の奴らは……」
爛れた上流階級の生活を想像したのだろう。ブライザは嫌悪感もあらわに吐き捨てた。
それをカーラが聞き咎める。
「ちょっと聞き捨てならないな。確かにあたしたちは生まれながらの貴族だけど、どっかの誰かと違って、くだらない策略のために、好きでもない男に唯々諾々と貞操を差し出す

ほど安い女ではないわよ」
「ぐっ」
揶揄されたブライザは、酢を飲んだような顔をする。それから顔を背けて、口内で何やらブツブツと呟いている。
「わ、わたくしだって、興味のない男になど死んだって貞操を差し出したりはしない……」
そんなブライザに意味ありげな視線を送りつつも、ヴァレリアとカーラは、エルフィンをベッドに仰向けに押し倒した。そして、顔を舐め回す。
ペロリペロリペロリ……。
「はぁ……」
美しくも恐ろしいお姉様たちの舌に舐められて、エルフィンは綿菓子になったような気分を味わった。
二人の舌が、エルフィンの耳を舐め回し、首筋を舐め回し、鎖骨を舐め回す。
恍惚としているうちに、衣装は脱がされていた。両腕を上げて、腋の下に顔を突っ込んだ女たちは、ペロリペロリと舐め回す。
「あぁぁぁぁ……」
両脇の下を舐められるくすぐったさにエルフィンは身悶える。
女たちはさらに舌を這わせ、エルフィンの両の乳首をペロペロと舐めた。
「ああ、ああ、あぅ……」

男なのに乳首を舐められて感じてしまうのは恥ずかしいが、気持ちいいのだから仕方がない。

エルフィンはさながら乙女のように喘いでしまった。

「あぁあ、だらしない顔しちゃって……。これを稀代の暴君呼ばわりだからね。笑っちゃうわ」

「まぁな。こんなんで軍略の天才なんて呼ばれているんだから、わたしも信じられんがな」

カーラとヴァレリアは、エルフィンの尖った乳首を摘み扱きながら頷きあう。

男としての自尊心がボロボロではあるが、この二人のお姉様には、すでに自分がいかにだらしない男であるかは、子供の頃からバレてしまっているので、見栄も張れない。

「あの……ヴァレリア様や、カーラも服を脱いで、裸みたい……」

恐る恐る口を開いたエルフィンの言葉に、ヴァレリアとカーラは顔を見合わせた。

「さすがに昔よりはずうずうしくなっているわね」

「ああ、しょうもない奴だ」

「まぁ、いいわよ」

まずは身を起こしたカーラが、白い絹のバスローブを脱いだ。

ポインと擬音が聞こえてきそうな勢いで、双乳が前方に跳び出す。

そして、ヴァレリアが胸元のバスタオルを解く。

ボインと柔らかな双乳があらわとなる。

風呂上がりの二人は、どちらも下着はつけていなかった。
かなり性格に難のある意地悪お姉様たちだが、その肉体美だけはケチのつけようがない。
（二人とも、なんという我儘ボディ）
ヴァレリアとカーラは、一緒になってエルフィンをからかうことは大好きだったが、基本的に弄ぶのが主であり、あまり自分たちの身体を見せたり触らせてくれたりはしなかった。
三人で一緒に風呂に入った時も、エルフィンは独り目隠しをさせられていたから、最近になって肉体関係を持ったとはいえ、見比べたことはなかったのだ。
身長で言えばカーラのほうが少し高い。しかし、横幅で言えばヴァレリアのほうがある。痩身なのに砲弾のように突き出た巨乳を持つカーラに対して、ヴァレリアは極めて女らしい凹凸に恵まれた肢体なのだ。肩幅はあるし、それに見合って乳房も大きく、臀部も張っている。
カーラの砲弾型の乳房は、ヴァレリアのみっちりとした巨乳には及ばないものの、世間一般でいえば十分に巨乳枠であろう。
ヴァレリアの肢体は誰もが認める女性美の極致。だからといってカーラが落ちる、というわけにはいかないだろう。これもまた、一つの芸術品だ。
そんな美神を左右に眺めて、エルフィンは声もなく魅入ってしまった。
「うふふ、おっぱい。しゃぶりたいのか？」

「あたしたちのおっぱいを同時に食べたいとか考えている？」
ヴァレリアとカーラが、自らの乳房を見せつけるようにエルフィンの顔に近づけてきた。
ゴクリと生唾を飲んだエルフィンは、素直に叫んだ。
「食べたいです。ヴァレリア様とカーラのおっぱい」
「仕方ないわね。ほら」
「存分にお食べ。坊や」
ヴァレリアとカーラは、そのまま自らの豊麗な乳房を、エルフィンの顔面に落としてきた。
「うぐっ……」
極上巨乳で圧死する。ある意味、男の夢であろう。
エルフィンは夢中になって乳房を鷲掴みにすると、合計四つの乳首を交互に吸った。
「うふふ……ほんとしょうもない奴だ」
理性がぶっ飛んでいる少年を見下ろしながら笑ったヴァレリアとカーラは、エルフィンの腕をそれぞれ自分の背中に回して、外側から自らの乳房を握らせた。
それから二人はエルフィンに寄り添うようにして横になった。片肘をつき、頬杖をつきながら、乳房をエルフィンの顔に置く。
この状態で右足にヴァレリア、左足にカーラの脚が絡められる。脇腹に女たちの濡れた陰毛がシャリシャリと擦りつけられている。

「軍略の天才とか、若き覇王なんて称えられても、一皮剥けば単なるスケベな男の子だからね」
「ほんとしょうもないむっつりスケベ。そんなだからあの女に恨まれるのよ」
エルフィンに乳房を好きにさせながら、二人のお姉様は頬杖をついて談笑する。
そして、下半身を見下ろして笑った。
「あぁあ、こんな先走りの液を垂れ流しちゃって、ほんとだらしないちんちんだな」
「まぁ、一見、可愛げのない男ではあるが、こいつも所詮は十代の男の子だからな。下半身がだらしないのは仕方あるまい」
カーラとヴァレリアがそれぞれあいたもう一方の手を伸ばすと、逸物を握ってきた。
「はぅ……」
お姉様たちの温かい指に包まれて、肉棒がビクビクと踊る。
「くっくっくっ、こんなに垂れ流しちゃって……相変わらず早漏なんだ」
「出したかったら、出させてくださいってお願いしなさい。このチンポ小僧」
ヴァレリアとカーラに口々に揶揄されたエルフィンは、恥も外聞もなく叫ぶ。
「はい。出したいです。出させてください」
「よしよし」
「それならばちょっとこっちに来い」
もはやお姉様たちの玩具であることを受け入れてしまったエルフィンは促されるまま、

ベッドの端まで移動した。

ベッドの端に腰をかけたエルフィンは、今さらながら床に、裸のブライザが縛られて四つん這いになっているのを見つけて、ギョッとする。

ヴァレリアとカーラのほうは委細構わず、床に降り立ち膝をつくと、先走りの液の垂れ流れる逸物に左右から接吻してきた。

「あぁ……」

ブライザの軽蔑しきった視線が痛い。しかし、ヴァレリアとカーラのダブルフェラは、この世のものとは思えぬほどに気持ちいいのだからどうにもならない。

二人は丁寧に肉袋から、肉幹を通って、剥き出しの亀頭部まで舐め上げた。

不意にヴァレリアが感慨深げに呟いた。

「こうやっていると昔のことを思い出すわね。二人でよく、目隠ししたエルフィンのちんぽを、こうやってしゃぶったものだ」

「まぁねぇ。はぁ……昔は皮被っていて可愛かったのに、今じゃこんなズル剥けでグロテスクな極太ちんちん。歳月とは残酷だわ」

美少年好きを公言してはばからないカーラは、ぶつくさ文句を言っているが、なんだかんだ言って熱心に舐めてくる。

（こんなことされていたんだ、ぼく……）

いや、薄々気づいてはいたが、改めて指摘されたことで、エルフィンは身震いした。

眼下にある旬のお姉様たちのパーフェクトボディを見ていたら、我慢ならなくなった。
「あの、二人とも……」
エルフィンの裏返った声に、ヴァレリアは呆れる。
「なに、もう限界なのか？」
「少しは我慢しなさいよ。あんたも一丁前に国王なんかになったんだから、あんまり早漏だと権威にかかわるわよ」
三つ子の魂百までとはよく言ったものだ。今は国王と臣下という関係になったというのに、エルフィンは逆らえない。
「それもあるんですけど、できたらお二人のおっぱいで……挟んで欲しい」
「はぁ？」
逸物を舐めていた二人の女は呆れたという表情で、エルフィンの顔を見る。
「お二人のおっぱい見ていたら、我慢できなくなったというか、その……」
歯切れの悪いエルフィンに、カーラは冷めきったジト目を向ける。
「このむっつりスケベ！」
「うふふ、そうやって希望を言ってもらえると、わたしたちとしても対処がしやすくていいな。ほら、これでいいのか？」
ヴァレリアは自らの両の乳房を持ち上げると、いきり立つ逸物を挟んできた。それを横目に見て溜息をついたカーラも倣う。

「ほら、これで満足か？」
ヤワヤワとプリンプリンの意地悪お姉様たちの合計四つの乳房に、エルフィンの赤黒い肉棒は包まれた。
「は、はい……ありがとうございます。凄い、気持ちいいです、あぁ」
ダブルパイズリを見下ろしたエルフィンは、鼻息も荒く何度も頷く。
「このバカ面さらしたむっつりスケベが、英雄なんて呼ばれているんだから世も末よね」
「そこが可愛いんじゃないか」
「はいはい、あばたもエクボってね」
ヴァレリアの主張に、呆れ顔で肩を竦めたカーラは、いきなり乳房を激しく上下させ始めた。
「ほら、ほら、ほら」
「あん、カーラ、そんな激しくされたら、わたしも乳首擦れて、あん♪」
「って、ヴァレリア。あんたもわざと乳首擦りつけてきているだろ、はぁん♪」
激しくパイズリしながら、お姉様たちのほうも感じてきてしまっているようだ。お尻がクネクネと動き、床にポタポタと雫が垂れているのがわかる。
（あぁ、ヴァレリア様とカーラのおっぱいで奉仕してもらえるなんて幸せ♪）
幼少のみぎり、一方的に弄ばれていただけに、この二人にダブルパイズリしてもらうなど夢のまた夢であった。

これぞ至福だ。

恍惚に浸ったエルフィンが、この夢を少しでも持続させようと我慢していると、カーラが嗤った。

「あらあら、こういう時は昔に戻っちゃうのか。あんたの射精を必死に我慢している表情、結構好きよ。たっぷり苛めてあげたくなっちゃう♪」

嗜虐的に笑ったカーラは、舌を伸ばすと尿道口をペロペロと舐め始めた。

「わたしも好きだな。そして、射精している時の表情がもっとも好きだ」

ヴァレリアも負けじと尿道口を舐め穿ってきた。

「そ、そんなにされたら、も、もう、もう……」

四つの美乳に揉みしだかれながら、濡れた二枚の舌で尿道口を舐め穿られたエルフィンは、至福の中に果てた。

「あぁぁぁぁ!!!」

ドビュュュュュュュュ!!!

白濁液が奔出した。

紫銀色の髪が、灰褐色の髪が、水晶のように美しい顔が、生意気そうな美貌が、みるみるうちに白濁まみれになっていく。

「まったくこんな臭い液をかけて」

「まぁ、エルフィンだから仕方がない」



ヴァレリアとカーラは申しあわせたように、互いの顔にかかった精液はもちろん、胸元にかかった精液も互いに舐め取った。
それから不意にヴァレリアは、見物人に声をかける。
「どお、あんたが恨んでいる男なんて、所詮はこの程度のものよ」
「……」
裸で縛られているブライザは、悔し涙を目元に浮かべているだけで、言葉もなかった。

※

「さて、今度はあたしたちにサービスしてもらうよ」
エルフィンは再び寝台の中央に仰向けに寝かされた。その顔の上にカーラが跨がってくる。
（あぁ、これがカーラのオマ○コ）
ヒューリアス城の地下牢でカーラを陵辱した時は、薄暗かったので細部まで見ることは叶わなかった。
エルフィンの様子に、カーラは首をひねる。
「ん？　そういえば、いつも目隠しさせていたっけ。まっ、いっか。さぁ、キリキリお舐め」
「あ、もうカーラったら、エルフィンはわたしのものだと言っているでしょ」
嫉妬に駆られたヴァレリアが、カーラに抱きつくと、これまたエルフィンの顔面に跨が

ってきた。
エルフィンの顔の上半分が、カーラの陰唇。下半分がヴァレリアの陰唇で包まれた。
そして、二人の淫乱お姉様は抱きあったまま、エルフィンの顔面でオナニーするかのように、激しく前後に腰を動かした。
シャリシャリシャリシャリ。
紫銀色の陰毛と、灰褐色の陰毛がエルフィンの顔面を撫で回し、さらにはヴァレリアとカーラのミックスジュースが塗りたくられる。
エルフィンのほうは夢中になってお姉様たちの愛蜜を啜り飲んだ。
どっちも美味しいが、カーラのほうはちょっと粘着質であり、ヴァレリアのほうは塩っ辛い気がする。
「あ、あん、ほんとドスケベなんだから♪」
「うふふ、カーラも、文句言いながら気持ちよさそうじゃない、んっ」
「あん、もう……ぷちゅ」
どうやら男の顔面を跨ぎ抱きあった痴女お姉様たちは、接吻を始めたようだ。
それでいて下半身のほうは少しでもエルフィンの舌を楽しもうと、恥骨同士を押しつけあっている。
エルフィンは二つの陰唇を隅々まで舐め尽くし、狭間にある淫核を舌の表と裏で同時に楽しんだ。

「はぁあぁぁぁん♪」
主君の顔面を愛液だらけにした女たちの腰が不意に止まった。
「さて、そろそろ準備が整ったみたいね」
カーラが見つめた先には、ギンギンに再勃起した逸物がある。
「うふふ、わたしたちとやりたい？」
ヴァレリアの上擦った声は、どう聞いても彼女のほうがもはや辛抱たまらなそうである。
それと察していながらエルフィンは、痴女たちの陰唇に向かって叫んだ。
「はい。やりたいです。このヴァレリア様とカーラのオマ○コ、交互に入れてズボズボしたい」
欲望に正直すぎる少年王の答えに、ヴァレリアとカーラは呆れたようだが、何も言わずにエルフィンの顔から降りた。
そして、ヴァレリアは右肩を、カーラは左肩を下にして向かいあうようにして寝転ぶと、それぞれ片足を上げてみせた。
左にカーラ、右にヴァレリア。ヌレヌレの陰唇が二つ並ぶ。
「さぁ、思う存分、ズボズボしなさい」
「うふふ、いらっしゃい。このむっつりスケベ」
美しき淫乱痴女たちの挑発の前にエルフィンは、というより、十代の少年がこの状況で理性を保てるはずがなかった。

いきり立った逸物を振りかざして突入する。
お姉様たちのシーツに投げ出されたそれぞれの足を跨いで、掲げられたそれぞれの足を左右の肩に担ぐ。
そして、いきり立つ逸物を、まずはヴァレリアのヌレヌレの肉壺へと突っ込む。
ブチュッ……！
「はぁう♪」
高く掲げられているヴァレリアの左足がビクビクと震えた。
（ヴァレリア様のオマ○コ。やっぱいいな。ぼくのおちんちんにぴっちり嵌まるというか。ぼくのもんだしな）
あまりの気持ちよさにエルフィンが夢中になって腰を前後させていると、カーラに怒られた。
「こら、この状況で一方だけを楽しむなんて、マナー違反よ」
「あ、はい。すみません。ただいま」
慌てて謝罪したエルフィンは、急いでヴァレリアの膣穴から逸物を引き抜く。
ズボリ……。
「はぁん……」
ヴァレリアは名残惜しそうに悲鳴を上げる。その未練を表すかのように、ぬらぬらの粘液が逸物と陰唇の間で濃厚な糸を引く。

それをそのままカーラの蜜壺へと叩き込む。
「うむ♪」
カーラは満足そうに頷く。
（うぅ……熱くてザラザラでグネグネ。カーラのオマ○コって奔放って感じがするんだよな。でも、こないだまで処女だったんだ。それをぼくが奪った）
約束通りヴァレリアには秘密にしているが、奔放な女を演じながらも、実は男性経験のなかった女。男としての独占欲も湧く。
自然と腰使いにも気合いが入る。
「あん、あん、あん……」
「エルフィン、こっちにも早く」
親友が悶える姿を前にヴァレリアが切なそうに懇願してきた。
名残惜しいが、カーラのザラザラグネグネアツアツ蜜壺から逸物を抜き、ヴァレリアのキツキツ蜜壺に潜る。
「気持ちいい、気持ちいいよ、ヴァレリア様のオマ○コも、カーラ様のオマ○コも」
子供の頃から、いろいろと曰く因縁あるいじめっ子のお姉様を好きなように犯すことができる楽しみに、エルフィンの理性はぶっ飛んでいた。
夢中になって二つの穴を行き来する。
しかしながら、休みなく女の壺を楽しむエルフィンと違って、女たちは一突きごとにお

休みがあるので、多少の余裕があるようだ。
二人は呆れ顔で会話をする。
「あぁあ、嬉しそうな顔しちゃって。こうなったら、こいつもただのスケベなガキね」
「確かに。こんなみっともない顔して女に溺れている男を恨むなんて、あの娘も馬鹿らしくなっちゃうんじゃないかしら？」
女たちの軽蔑する視線などお構いなく、エルフィンは二つの蜜壺を交互に犯した。
（あぁ、凄く気持ちいい。ヴァレリア様のオマ○コも、カーラのオマ○コもとっても気持ちいい。おちんちんが一本しかないのがもどかしいよ）
好きこそものの上手なれ。始めはぎこちなかった腰の動きも次第に慣れてくる。本能の赴くままにリズミカルに二つの蜜壺を行き来することができるようになった。
ヴァレリアの愛液に濡れた逸物が、カーラの胎内に入り、カーラの愛液に濡れた逸物が、ヴァレリアの胎内に入る。
それを繰り返すことによって、二つの蜜壺の温度や粘り気が同じになってきた。いや、逸物に与えられる快感が許容値を超えてわけがわからなくなってきているのかもしれない。
「あん、もう、い、意外に長持ちするじゃないの、はぁん♪」
「はぁん、まったく、変なところだけ器用で、ほんと可愛げがない。ふぅん♪」
余裕ぶっていたお姉様たちも、少しずつ追い詰められてきたようだ。
ピクピクピク……。

掲げられた足が、身体が、膣内が痙攣している。
いずれの膣穴も熱く、あまりにも熱く。
（ちんぽが溶けてなくなりそうだよ！）
女たちの性感もまた一体化してきたようだ。
カーラを掘削している時でも、ヴァレリアは気持ちよさそうに喘ぎ、ヴァレリアを掘削している時でも、カーラは気持ちよく喘ぐ。
「あぁん、あぁん、はぁん……」
「ひぃん、激しい、激しい、激しい」
同時に悶えるお姉様たちの顔を見ていると、見下ろすエルフィンとしても、どっちに入れているのかわからなくなり混乱した。
（あぁ、凄い。二人がぼくのちんちんで喘いでいる。ぼくのちんちんで感じているんだ。あ、気持ちいい。ザラザラの襞がちんちんを包む。で、でる。ダメだ。まだ出せない。出しちゃダメだ。このまま二人をイかせる。絶対、イかせる！　ぼくのちんちんの奴隷にするんだ）
なんとも雄々しい気分になったエルフィンは、射精欲求をぐっと我慢して、ひたすら腰を使い続けた。
「ひぃ、ひぃ、ひぃぃぃ……」
「も、もう、らめ、らめらめ……」



少年の思惑通り、淫乱お姉様たちの理性はどんどん溶けていった。全身からは噴き出すように淫汗を出し、涎を噴き、涙を流す。

完全に牡に征服された牝の姿だ。それを見下ろしていて、エルフィンは限界を感じた。

「もう、イ、イきそう……」

「いいわ、イきなさい。わたしの中で！」

「あたしの中で思いっきりぶちまけるのよ！」

男が果てようとする姿に、女たちは自らの体内で果てることを要求した。

「イ……きます！」

女たちの片足ずつを肩に担いだエルフィンは、忙しく二壺を行き来しながら雄叫びを上げた。

逸物はヴァレリアの肉壺から抜けながら射精を始めた。そのままカーラの肉壺にぶち込み、最深部まで押し込んで射精。しかし、そのまま引き抜いて、再びヴァレリアの中で射精。

射精しながら、交互に行き来していた逸物は強度を失っていく。そして、すべてを吐き出し、小さくなった逸物はどちらにも入ることが叶わなくなる。

「ふぅ……」

二つの肉壺の間に、小さくなった逸物を落とし、エルフィンは満足の溜息をつく。

「二人ともとっても気持ちよかったです」

子供の頃から因縁浅からぬお姉様たちを並べて、心行くまで掘りまくる。その夢にも思わなかった体験に、エルフィンは感動した。

しかし、ことはそれで終わらない。

「なに、満足した顔しているのかな。まだまだだよ」

いきなり向きを変えたカーラが、射精して小さくなった逸物を口に咥えてきたのだ。

「はぅ、なにを……!?」

射精したばかりの逸物はできたら触って欲しくないものだ。逃げようとすると背後からヴァレリアに羽交い締めにされた。

「夜はまだまだ長いわ。本番はこれからでしょ♪」

「ひぃ……」

ヴァレリアの豊麗な乳房を背もたれにしたエルフィンの逸物は、カーラの口内でムクムクと大きくなっていく。

それを吐き出したカーラは、軽く扱いてから、満足げに頷く。

「おまえはほんと、昔から絶倫だな。そこだけは認めてやろう」

いきり立つ逸物に跨がったカーラは、そのまま腰を下ろす。

グチュッ……。

「あん、奥に届く。あたしはこんなでっかいちんちん嫌いなんだけど、まぁ、今夜は楽しませてもらうわ」

舌なめずりをしたカーラは、鬼のように腰を使い始めた。
「ひぃ、そんな……いきなり……激しい」
グチョグチョグチョ……。
先にエルフィンが吐き出した精液が中で圧迫されているらしく、泡立ちながら男女の結合部から噴き出す。
それはまるで逆レイプされているような感覚だった。
(でも、気持ちいい)
ヴァレリアに背後から抱き締められながら、エルフィンは乙女のようにビクビクと震えた。
「ああ、その表情いい。可愛い。まるで童貞の初体験みたい。あぁん、あたしも可愛い美少年の童貞食べた～い♪」
何やら不穏なことを叫びながら、性悪淫乱お姉様は絶頂を迎えた。それに釣られてエルフィンも射精してしまう。
「それじゃ、次はわたし」
小さくなった逸物は、ヴァレリアによって無理やり勃起させられる。
「そ、そんな連続なんて無理、無理だから。ごめんなさい。調子に乗っていました。ぼくはお二人の玩具です。だから、助けてぇぇぇぇ!!!」
泣き喚くエルフィンの言葉は完全無視。

ヴァレリアが終わればカーラだ。淫乱お姉様二人による陵辱劇はいつ果てるともなく続いた。

※

「はぁ……、はぁ……、やっぱデカチンはあたしには合わないわぁ～。オマ○コガバガバになっちゃう」

カーラは腰を上げて両足をハの字に開く、いわゆるマングリ返しの状態で脱力している。

「わたしも限界だ。オマ○コの中が擦り切れそうだ……」

寝台の中央で大の字になっているヴァレリアは、両足を蛙のように開いており、そのシーツには失禁したかのように大きな地図ができている。

「もう、無理、勃ちません。一滴だって出ません。だから、勘弁してください……」

寝台の隅っこで膝を抱えたエルフィンは、シクシク啜り泣いていた。

汗と精液と愛液でグチャグチャになった三匹の性獣たちが、思い思いの姿で余韻に浸っているところに、すっかり忘れていた声が響く。

「わたくしも、……欲しい。陛下のちんちん、欲しい」

何事かと思ったエルフィンが、寝台から下を覗き込むと、そこでは裸で縛り上げられた姿のブライザが啜り泣いていた。

それも滂沱の涙を流し、口元から涎を垂らしている。薔薇にも例えられる美貌が台無しだ。

あの気位の高いブライザが泣いているというだけで、とんでもない光景であるのに、ここまで哀れに啜り泣くとは驚愕である。

しかも、なぜ泣いているのかわからない。

戸惑うエルフィンの背中に乗るようにして、カーラが口を開く。

「うわ、これは予想以上に効いたわね」

「女にとって、好きな男が他の女とセックスを楽しんでいるさまを見せつけられるほどにきついことはないからな」

寝台から降りたヴァレリアは、ブライザに近づき、その身の縛めを解いてやった。

「どうだ。自分が誰の女であるか、身に沁みて実感したであろう」

「……はい」

涙にくれる顔でエルフィンの顔を見上げたブライザは、鼻を啜りながら答えた。

「わたくしは陛下の女です」

「それはどういう意味？」

「わ、わたしも陛下のぶっといチンポに貫かれたい！」

ブライザの恥も外聞もない告白に、ヴァレリアとカーラは失笑する。しかし、ブライザはそんなことには構わず、エルフィンに訴える。

「陛下、これまでの暴言をどうかお許しください。そして、どうかお側においてください。誠心誠意努めます」

「えっ？」

ブライザのあまりの変わりようにエルフィンは戸惑ってしまう。それをカーラが解説した。

「偽りの愛を演じているうちに、本気になっていたってことでしょ。いくら演技でも、好きでもない男のおしっこを歓んで飲める女はいないわよ」

「はい。わたくしは陛下が好き。陛下のことを考えていると胸が苦しくなって……。だから、わたくしは……憎むことでごまかしていた。陛下のおっしゃることがサイアリーズにとっても一番いい、兄様だって国王になりたいなんて思っていないのに、わたくしは意地になって嗾(けしか)けた。でも、もう無理です。ごまかせない」

血を吐くような告白を聞いたエルフィンは、寝台から飛び降りて、涙が止まらないブライザを抱き締めた。

「それじゃ、イルベルト殿への降伏勧告の使者を引き受けてくれるかい」

「はい。陛下のために兄様を説得して参ります」

こうして、薔薇の剣姫は、身も心もエルフィンに投げ出した。

第六章　狂い咲く薔薇

「あの娘、帰ってくると思う？」
ベリージャム城にて、兄を説得するためにエボージョン城に向かうブライザを見送ったエルフィンが、執務室に帰ると、待ち構えていたカーラに質問された。
「帰ってくるよ。彼女はぼくの恋人だからね」
信じることが大前提とはいえ、エルフィンの確信に満ちた言動に、レイテは肩を竦める。
「あ～、はいはい、女は新しいほどいいでしょうよ」
その微妙な言い回しに、エルフィンは瞬きをして怪盗上がりのお姉さんの顔をまじまじと見る。
「あれ、もしかしてレイテ姐さんってば、嫉妬しているの？」
「しているわよ、もちろん♪」
かつて筆下ろしをしてくれたお姉様が、拗ねたように頬を膨らませている。
それを受けてエルフィンは、軽やかに笑った。
「あはは、レイテ姐さんはぼくの古女房みたいなものなんだから、デンっと構えていて欲しいな」
「キャッ♪」

いきなりレイテを抱き締めたエルフィンは、両手を後ろに回して、黒いパンツ越しに左右の尻臀を掴んだ。

驚きの悲鳴を上げたレイテは、怒ったように拳を振り上げてみせる。

「こら、こんな時間から、こんなところで何するつもりかな？」

「もちろん、ナニするつもり」

躊躇わずに答えたエルフィンは、レイテの唇を奪う。

「ん、んん、うん……」

エルフィンの情熱的な接吻を受け入れ、さらには股間に男の昂りを押しつけられたレイテは、接吻が終わると、頬を染め、呆れたように笑う。

「もう、ス・ケ・ベ♪」

エルフィンはレイテと額を合わせながら答える。

「誘ったのはレイテ姐さんですよ」

嘯いたエルフィンは、レイテの前に跪き、黒い革の胸当てを引きずり下ろす。

プルルンッと豊麗な乳房があらわとなった。

二十代後半という、エルフィンの愛人の中では一番年上ということもある。未亡人であり、一児の母親ということもあるのだろう。乳房は見事に実っていた。まさに女としての完成形を思わせる。

その谷間に顔を埋めて、弾力を楽しんだエルフィンは、さらに乳頭にしゃぶりついた。

経産婦の乳首はとっても敏感で、たちまちのうちにビンビンに勃起してしまう。
「あっ、もう……甘え上手なんだから♪　はぁ♪」
乳房を両手に持って乳首を交互に舐めしゃぶるエルフィンの姿に、目を細めたレイテはまるで子供でもあやすように、その頭髪を撫でてやる。
心行くまで乳房を楽しんだエルフィンは、そのまま顔を下ろしていく。
引き締まった腹部を通り、黒いパンツの穿かれた鼠径部に達した。
出産経験のある女性の身体は線が崩れるという話だが、レイテの肉体を見ていると、その通説はウソに思えてくる。これほどまでに母としての柔らかさと、若々しいしなやかさに満ちた身体はそうないだろう。
「パンツ、脱がせますよ」
「はぁ、はぁ、ええ、いいわよ……」
なんだかんだ言ってレイテも興奮しているのだろう。呼吸が荒い。エルフィンのほうも興奮を抑えきれず、黒いパンツに手をかけるとするすると、膝小僧まで脱がした。
レイテは右足にだけ蜘蛛の巣を思わせる目の荒いタイツを穿いている。それはパンツと一体化しているので、右足は太腿までで留め、左足だけ抜きとった。
むっちりと左右に張った腰と、サラサラの黒い陰毛があらわとなる。
そこに顔を近づけたエルフィンは両手の人差し指と中指を入れて、肉唇を開く。
トロトロトロ……と熱い雫が滴った。

「うわ、大洪水ですね。こんな欲求不満になるまで放置して申し訳ありません」
「あん、もうしょうがないわね。もう好きにしていいわよ」
「ありがとうございます。だから、レイテ姐さん好き♪」
年上のお姉様に甘えたエルフィンは、レイテを横抱きに抱え上げると執務机の上に仰向けに寝かせた。
「ちょ、ちょっと真っ昼間からこんなところで……」
窓から燦々と降り注ぐ朝陽に、レイテは眩しそうに顔をしかめた。その間に、エルフィンはレイテの両足を持って、V字に開く。
「いいじゃありませんか。たまにはレイテ姐さんのエロエロな身体を隅々まで観察させてくださいよ」
シャリシャリとした陰毛を掻き分けて、肉唇を剥けるだけ剥き上げて、わざと陽の光を当ててやる。
「レイテ姐さんのオマ○コはいつ見ても綺麗で魅力的ですよね」
「あのね～、今まであたしよりも年下の女に溺れていた男に、そんなこと言われても信じられないんだけど」
いかにレイテといえども、生殖器を陽の光の中で観察されたら、羞恥心を感じないわけにはいかないのだろう。顔を赤くして不満を言う。
「もう、だから、あれは駆け引きですよ。レイテ姐さんのことを忘れていたわけじゃない。

どうしたら、許してくれるかな。……わかりました。それじゃ、今日は久しぶりにオマ○コをじっくりと味わわせてもらいます。レイテ姐さんの気が済むまで舐めてあげますから、それで許してください」

無茶苦茶な謝罪方法を思いついたエルフィンは、久しぶりに未亡人の陰唇に口づけをするや、夢中になって舐めしゃぶり始めた。

「ちょ、ちょっと、いきなりなに言っているかな、あぁん♪」

レイテの愛液は円やかで優しい味がする。

羞恥に悶えるお姉様の媚粘膜の表面を丁寧に舐めた後に、蜜壺に向かってズボリと舌を入れた。そして、膣内をすべて舐め回すように大胆に舌を動かす。

「あ、そんな、奥まで舐められたら、ああ♪」

ピチャピチャピチャ……。

ここのところ戦や、ブライザとの駆け引きに忙しく、レイテとはすっかりご無沙汰だった。

エロエロ未亡人は熟れた肉体を持てあましていたのだろうか。舐めれば舐めるほどにコンコンと熱い泉が湧いてくる。

ヒク、ヒクヒクヒク……。

気持ちよさそうに喘ぎだしたレイテの顔を上目遣いに見ていると、目が合った。

「な、なに？」

「レイテ姐さんったらいい表情しているなって思って♪」
「か、顔を見るな……！」
レイテは掌を開いて、顔の前に翳した。さすがの淫乱お姉様も、陽だまりの中でアヘ顔を観察されるのには耐えられないらしい。
しかし、エルフィンのほうは変わらず、陰核を剥き上げてしゃぶったり、執拗なクンニを繰り返した。
「こ、これは……ハズイ……」
今さらながら、こんな場所でエルフィンに身体を開いたことを後悔しているようだ。
しかし、羞恥に悶える姿がますます少年の性欲を刺激する。気をよくしたエルフィンは、さらにしつこく、レイテの体内を舐めしゃぶった。
レイテの肉体が何度かイったことはわかったが、構わず続ける。
「はぁ、ああ、もう、許して、こ、これ以上は……ああ、これ以上はダメ。も、もう入れて、お願い。これ以上焦らされたら、変になる」
レイテが泣きながら懇願したことで、エルフィンはようやく陰唇から口を離した。
初体験をさせてもらった女性である。あの時は身も世もなく搾り取られたわけだが、それが今ではここまで追い詰めることができるのだ。男としての自信になる。
「レイテ姐さんの頼みじゃことわれないな」
ドロッドロになっている陰唇を見下ろしながら立ち上がったエルフィンは、悠然とズボ

ンの中から逸物を取り出した。
ブルンッと唸りを上げて反り返った逸物を見上げて、レイテの目が輝く。
「凄い、ちょっと見ない間に一段と大きくなっている。それにそんな黒光りさせちゃって……」
「レイテ姐さん好みに育ってよかった。たっぷりと楽しんでください」
レイテに被虐感を植えつけるために、両足を持って足首がレイテの頭よりも上にいくように押さえつける。
そして、剥き出しになり潤みきった蜜壺に、いきり立つ逸物を押し込んだ。
「あん♪」
レイテは大口を開けてのけぞった。
熱くヌルリっとした肉襞が、肉棒に絡みついてくる。
久しぶりに味わう、未亡人の熟れた蜜壺の犯し心地にエルフィンは満足する。
「すっごい気持ちいいよ。やっぱりレイテ姐さんの身体がぼくには一番落ちつくなぁ」
「どの女にもそういうこと言っているんでしょ」
ジト目を向けてくるレイテだが、エルフィンは爽やかに笑ってごまかす。
「ヤダなぁ。ぼくはいつだって本気ですよ。ぼくにとってレイテ姐さんは、もっとも気の安らげる女性ですから」
「なんか、言動がどんどん女ったらしっぽくなってきたわね」

「そうかな？　ぼくがレイテ姐さんを好きって気持ちにウソ偽りはないんだけど、どうやったら信じてくれます？」

嫉妬を収めようとしないお姉様の顔を見ながら、エルフィンはゆっくりと腰を引いた。そして、浅く二度突いてから、深くドスンと沈める。

「あん、腰使いも上手くなっちゃって、はぁん、うん……」

昔はガムシャラに腰を振るうことしか知らなかった少年は、多くの女性との経験から、腰使いを工夫するようになっていた。

いわゆる一深二浅でえぐられたお姉様は、たまらず喘ぎ始める。

「レイテ姐さんの身体のことは、ぼくが一番よく知っていますからね」

非業の死を遂げた旦那よりも、自分のほうがレイテの身体をよく知っていると、エルフィンは思う。

「はぁん、らめ、じっくり責められたらあたし……はぁ、イク、イっちゃう」

ピク、ピクピクピク……。

成熟したレイテの身体は実に敏感で、コツがわかるとイかせるのは簡単だ。

キュンキュンキュン……。

しなやかな肉壺が痙攣し、肉棒に射精を促してきたがエルフィンは耐えた。それどころか、いささかもペースを変えずに一深二浅の腰使いを続けた。

「そ、そんな、卑怯。ああ、そんな休まずなんて、らめ、ちょ、ちょっと、いつまで続け

るつもり、そんなあたしだけ連続でイかせるなんて、ああ、お願い、そろそろ許して、こんな連続でイかされたら、死ぬ、死んじゃう！　ひぃ、お願い、もう、これ以上は……あぁ」

若い牡の疲れを知らない抽送運動に、熟れた肉体は何度も何度も絶頂を迎えたようだ。陽だまりの中、顔を隠すこともできなくなったレイテは、涙を流し、涎を噴き、全身から汗を流す。牝のフェロモンを撒き散らしながら、紅蜘蛛と呼ばれた女は乱れに乱れた。

その痴態に満足したエルフィンは、射精欲求を我慢できなくなる。

「それじゃ、そろそろ激しくいきましょうか。今日は徹底的にレイテ姐さんが腰を抜かすまでしてあげます」

舌なめずりをしたエルフィンは、一気に腰使いを激しくした。

「ひぃ、ちょっと、奥。そんな、奥までガンガンやられたら、ひぃ、らめ、し、子宮が、揺れる♪」

ここまでじっくりと下ごしらえしただけあって、熟れきった女体の反応は実によかった。よく締まる膣洞がキュンキュンキュンキュンと肉棒に絡みついてくる。

（こ、こんな絡みついてくるオマ○コって反則だと思う）

我慢に我慢してきた肉棒が限界を突破する。

「くっ、ぼくももう、イきますよ。子宮でたっぷり味わってください」

宣言と同時にエルフィンは逸物を思いっきり押し込み、亀頭部をぐいっと子宮に押しつ

けながら射精した。
ドビュドビュドビュドビュッ!!!
「あ、ちょっと、ちょっと、ダメぇぇぇぇ……」
女の身体というのは、膣内射精されるのが一番気持ちいいのだろう。今までイキにイキまくっていたレイテは、さらなる高みへと昇ったようだ。
ビクビクビクと激しく痙攣したと同時に、エルフィンの股間に熱いものが撒き散らされる。
シァァァァァ――ッ！
（うわ、レイテ姐さんが漏らしちゃっている）
自分の筆下ろしをしてくれたお姉様を、失禁するまで追い詰めたことに、エルフィンは満足する。
「は、恥ずかしい……」
年下の恋人とのセックスで一方的に翻弄された挙句に、失禁という失態まで演じてしまったレイテは、顔を真っ赤にして、唇を噛んだ。
その上から覆いかぶさったエルフィンが唇を奪う。レイテもまた両手でエルフィンの頭を抱いて、夢中になって貪る。
「う、うむ、うむ」
キスを終えた二人は、互いの額をくっつけて、鼻の頭を擦るようにして囁きあう。



「レイテ姐さん、今日は一段と可愛かったですよ。思わず惚れ直しちゃいました」
「まったく、男の子っていうのは、こうやって成長するんだね。あたしが童貞食べた男の子に、今じゃこうやって好き勝手にやられちゃうんだもんね」
文句を言いながらも、レイテは満更ではないようだ。エルフィンはからかってやる。
「ご不満なら、もう一発ぐらいしましょうか？」
「そ、それはやめて!?　本気で腰抜けてるからあたし！」
悲鳴を上げるレイテの上から身を起こしたエルフィンは、小さくなった逸物を引き抜く。真っ赤に爛れた肉弁からは、白い液体がドボドボドボッと溢れた。
それをエルフィンは丁寧にハンカチで清めてやる。
「レイテ姐さん。これからも欲求不満になったらいつでも言ってください。ぼくはレイテ姐さんを欲求不満のままになんか絶対しませんから」
「もう……、あたしの負け」
なんだかよくわからないものに降参したレイテは、エルフィンを執務机に備えられた椅子に座らせると、その股ぐらに横座りになった。
「おちんちんはもういいけど、もう少しこうやって抱き締めておいて♪」
エルフィンの胸に抱かれてレイテは満足そうだ。そんな余韻の中、ふと思い出したエルフィンは質問する。
「そういえばレイテ姐さんのお子さん、リュークくんって、いつになったら連れてきてく

れるんですか？」

「ん～、まだ物騒だし。あたしも何かと忙しいからね。それに何よりも、あんたともう少しラブラブな生活を楽しみたいのよ」

なんとも母親失格なことをのたまうレイテであった。

※

「ナターシャ、何をやっているんだい？」

ベリージャム城での仕置きを一通り終えたエルフィンは、一旦アヴァロンに帰還した。

ブライザが、イルベルトを説得して帰還するのを待つエルフィンだが、懸案事項はそれだけではないのだ。

ブライザがなかなか帰ってこないことに苛立ちを覚えながらも、必死に平静を装い執務を行う。

気晴らしに遠駆けをして帰ってくると、厩舎の入口に梯子をかけて、金髪巻き毛の少女が伸び上がっている。

「あ、エルフィン様、いえ、雛が巣から落ちてしまったみたいで……」

「なるほど」

確かに厩舎の入口の上に、鳥の巣があった。ナターシャの伸ばした右の掌には小さな生物が握られている。雛を入れてやろうとしているようだ。

（ちょっと危なっかしいな。手伝うべきか）

と考えていると、不意にナターシャが困惑した声を出した。
「あの……上、見ないでください」
「ん？」
ナターシャはしきりに臙脂色のロングスカートの裾を気にしている。
いったいナターシャが何を気にしているのか一瞬わからなかったエルフィンであったが、不意に閃いた。
（そういえば、ナターシャってパンツを穿いてないんだっけ？）
昔、ちょっとしたエルフィンの冗談を真に受けたナターシャは、それ以後、パンツを穿かないと誓ってしまったのだ。
彼女の今の様子からすると、どうやら、健気に誓いを守っているようである。
梯子を登るナターシャのスカートは踝近くまであり、いかに伸び上がっているとはいえ、生尻はおろか太腿だって見えない。せいぜい脹脛がチラリと見える程度だ。
しかし、少女がノーパンである、という事実を知っていることと、ナターシャが過剰に意識し、恥じ入っている風情なのが、否応なく男心を煽る。
我慢できなくなったエルフィンは、手を伸ばすとナターシャのスカートを掴んでたくし上げてしまった。
「キャッ!?」
誓約通りショーツを穿いていなかった少女の、むっちりとした生尻がまる晒しになる。

そのお尻はちょうど、エルフィンの顔の高さだったもので、肛門が見えた。
ナターシャは右足を上の段にかけているため、股が縦に開いてしまっており、ちょっと下から覗き込むと、陰唇も見ることができる。
「エ、エルフィン……様!?」
梯子に登るナターシャは、動揺を隠しきれない瞳で見下ろしてくる。
「何しているの？　早く雛を戻してあげないと」
「は、はい……」
お尻まる晒しの少女は、震えながらであったが、なんとか巣に雛を入れて、それから梯子から降りてきた。
そして、涙目になってもの言いたげにエルフィンの顔を見上げてくる。
「ごめん、ごめん、そう怒らないで……」
悪乗りが過ぎたと思ったエルフィンが謝罪すると、ナターシャは拗ねたように応じる。
「別に怒ってはいません。エルフィン様さえお望みなら、わたくしはいつでもどこでも構いません。そのためにパンツも穿いてないんですし……」
その健気な言動に、ズキュンッとエルフィンの男心は射抜かれた。
「ナターシャっ!?」
いきなり少女を抱き締めたエルフィンは、そのまま麦藁の上に押し倒す。そして、覆いかぶさりながら質問する。

「それじゃ、ここでしちゃってもいいの？」
「あ、はい。もちろんです」
健気で従順な少女は、恥じ入りながらも頷いた。
それにますます獣欲を刺激されたエルフィンは、馬小屋の藁の上に押し倒した少女のブラウスの胸元を開く。
ショーツは穿かない少女だが、ブラジャーはしていた。そのピンク色の清潔感のある布を引きずり下ろすと、ぽろんっと蒸かしたての肉まんのような双乳があらわとなる。
大きさで言えば、まだまだ発展途上ではあるが、その柔らかさは絶品と言っても過言ではないだろう。
エルフィンはそれにむしゃぶりつく。
「ああ……」
心行くまで少女の肉まんを貪ったエルフィンは、顔を上げると、臙脂色のロングスカートをたくし上げた。
清純な少女は、反射的に膝を閉じあわせたが、エルフィンの視線を感じると、震えながらも足を開いていく。
ショーツを穿いていないのだから、いきなり、淡い金色の陰毛と、小柄な体躯に相応しい小柄な陰唇があらわとなる。
肉割れからツーと透明な液体が、滴っているのが見えた。

それを前にエルフィンの理性は跳んだ。いきなり、逸物を添えると押し込んだ。
「あ、そんな、いきなり……あ」
十分な指マンもクンニもされていなかった少女の胎内はほとんど濡れていなかった。
それなのにエルフィンは、容赦なく肉棒を振るい、目の前の乳房にむしゃぶりつく。
「あっ、あっ、あっ、あっ……あぁ♪」
男の欲望そのままに犯されている少女の膣内が、少しずつ濡れていく。それに従って喘ぎ声もあまやかなものに転じてきた。
不意に顔を上げたエルフィンは、ナターシャが涙を流しているのに驚く。
「ごめん。やっぱり、こんなところでいきなりは嫌だった？」
「いえ、最近、陛下からお情けを頂いていなかったから、わたくしの身体に飽きてしまったのかと思って。それなのにこんなに激しく求めていただいていると思ったら嬉しくて……つい」
その健気すぎる言動に、エルフィンは慌てる。
「そんなことあるはずがないでしょ。ナターシャはぼくの女だよ」
「はい。ナターシャはエルフィン様の女です。ああ、エルフィン様のおちんちん入れてもらえると、すっごい幸せです」
その陶酔の表情に、ウソ偽りはなさそうだ。
（ナターシャってば、ほんと可愛いな）

エルフィンの恋人たちはかなりアクの強い女たちばかりだ。そんな中でナターシャの存在は癒やしである。

（そういえば最近は、ブライザや戦争にかまけて寂しい思いをさせていたか？　お詫びをしたいところだけど）

欲のないナターシャには、どういうプレゼントが喜ばれるか今一つわからない。

しばし考えたエルフィンは、なんとか閃いた。

「そうだ、ナターシャ、たまには上になって自分で腰を使ってみない？」

「え……？」

愛しい男に組み敷かれ、欲望のままに犯される歓びに浸っていた少女は、キョトンとした顔をする。

「欲求不満だったんでしょ。今日はナターシャの思う通りに腰を使っていいよ」

「思う通り？」

戸惑うナターシャを、エルフィンは嗾ける。

「ああ、思いっきり性欲の赴くままに、身勝手に腰を使ってみるといい」

「身勝手な腰使いだなんて……。でも、エルフィン様がそれをお望みなら」

「よし、決まりだ。ナターシャの腰使い楽しみだな」

莞爾と笑ったエルフィンは結合したまま、グルリと右向きに半反転。藁の上に仰向けになった。代わりにナターシャが上になり、いわゆる騎乗位となった。

厩舎で乳房を露出させた状態で、上体を起こすのは恥ずかしいのだろう。ナターシャは顔を真っ赤にして、おろおろする。

「それじゃ頑張って」

「あ、はい……腰を使わせていただきます」

エルフィンの声援に応えようと、ナターシャは腰を上下させ始めた。

「うんしょ、うんしょ」

小さな身体が上下するたびに、ほかほか肉まんおっぱいが、プルンプルンと揺れる。その光景に幻惑されない男はいないだろうが、一生懸命のナターシャをエルフィンは宥める。

「上下に動くよりも、前後に動いたほうが、楽だし気持ちいいと思うよ」

「は、はい……」

アドバイスを受けてナターシャは、素直に腰を前後に使いだした。

クチュリ、クチュリ、クチュリ……。

「はぅ、ああ、はぅぅぅ……、あん♪」

ナターシャの喘ぎ声が明らかによくなった。

騎乗位は、女が好きなように腰を振るえる。ということは、ごく自然と自分の胎内の気持ちいい場所を発見してしまう体位でもあるということだ。

どうやらナターシャも、自分の気持ちいい場所を見つけてしまったらしい。目をつぶり

両手の肘でバランスを取り、夢中になって快感を貪っている。
（ほんと、ナターシャは可愛いな……）
可憐な少女の卑猥な腰ダンスを見上げてエルフィンが満喫していると、不意にナターシャの動きが止まった。
「あれ、どうしたの？」
不思議がるエルフィンに向かって、涙目になったナターシャは申し訳なさそうに応じる。
「ごめんなさい。気持ちよすぎて、もう……身体を動かせません」
どうやらナターシャにはこのあたりが限界らしい。人間誰しも得手不得手がある。どんな女でも、腰を振りまくれる淫乱痴女になれる、というわけでもないらしい。
「仕方ないな。ナターシャは」
ここに至ってエルフィンは能動的に動く決意をした。両手でナターシャの腰を掴むと、強引に前後に振らせた。
「ああん、気持ち、気持ちいいです！　奥に、奥に当たる。ゴリゴリって、エルフィン様のお大事、温かいお大事がぁ♪」
ビクビクビクビク……。
自分で腰を使っていた時よりも、強引に振らされた時のほうが気持ちよさそうだ。
根っからのマゾ気質というか、受け体質なのだろう。男にガツガツとケモノのようにやられたほうが楽しめるようだ。背をのけぞらせながら、大口を開け、喘ぎ声とともに涎を



噴く。いかにも良家の子女といった顔立ちが、見るも無残なアヘ顔に変わってしまった。

（うわ、ナターシャも反応よくなったなぁ）

少女の狭い膣洞がキュンキュン締まってくるものだから、エルフィンのほうもたまらない。睾丸から溢れ出した欲望が、一気に肉棒を駆け上がっていく。

「ナターシャ、イクよ！」

「あ、はい。ああ、陛下の、陛下のお情けをください♪」

ほかほか肉まんおっぱいをプルプル震わせながら懇願してくるナターシャの声に応えて、エルフィンは己が欲望をぶちまける。

ドビュュュュ!!!

「はぁ、エルフィンさま～♪」

口を開けてのけぞるナターシャは、まるで股間から駆け上がった槍に、口まで貫かれたかのようだ。

助けた雛鳥の見守る中、心優しき少女は悦楽の世界に飛んだ。

しばしのけぞり痙攣していたナターシャは、やがて精根尽き果てたと言わんばかりに、エルフィンの胸に倒れ込んでくる。

「はぁ～」

愛しい男の胸に顔をうずめながら、ナターシャは満足そうな溜息をつく。

「思いがけず陛下のお情けを頂けるなんて。……今日はとってもいい日です」

「ぼくも楽しませてもらったよ」
欲望を吐き出した逸物は小さくなったが、ナターシャはそれを離したくないようだ。腰を押しつけるようにして、膣内に咥え込んでいる。
そうやって二人が余韻に浸っていたところに、騒がしい声が聞こえてきた。
「陛下、陛下はいずこにおわす」
親衛隊長のロージーの声だ。いらえを返す前に見つかった。
「キャッ！」
男の上に跨がっていたナターシャは慌てて、胸元を隠す。ロージーのほうも驚く。
「ひぃ！　こ、これは、失礼しました!?」
厩舎の中で主君が何をしていたのかを察したロージーは慌てて顔を背ける。
見るからに純情でその実、エッチな少女と、見るからに強面で、その実、処女臭い少女を等分に見ながらエルフィンは身を起こした。
「構わない。それでなんだ？」
赤面した顔を背けながら、ロージーは裏返った声で報告する。
「イルベルト殿、ブライザ殿、お見えになりました」
待ちに待っていた報せである。喜び勇んだエルフィンは、跳び起きた。
「わかった！　今行く」
いきなり逸物を抜かれた少女は腰を抜かし、主君の性器をもろに見てしまった女親衛隊

長は、卒倒した。

※

「このたびの仕儀はすべてわたくしの不徳のいたすところ。罪は我が身にありますれば、願わくは、家臣領民には寛大な処分を下されますように……」

謁見の間に現れたイルベルトは、頭を剃り、黒衣を纏っていた。誰が見ても全面降伏の態度だ。

エルフィンは満足した。これでサイアリーズ問題はようやく片付く。王座から立ち上がった若き王は、いかにも鷹揚な態度を装って、敗将の肩を抱く。

「イルベルト殿、よくぞ決意を為された。このたびの不幸な出来事は水に流し、共によき国を築きましょう」

「ははぁぁぁぁ、ありがたき幸せ」

エルフィンはサイアリーズ派の頭目であるイルベルトの罪を問わなかったばかりか、その協力者五人も、そのまま諸侯に取り立てることにする。

もっとも、所領のいくつかを王家への蔵入り地とした。ただし、その管理は引き続きサイアリーズ派の諸侯に任せるとしたから、いずれ機会を見て、恩賞として返してやるつもりだ。

それからエルフィンは、傍らに跪く薔薇色の髪の女闘士にも声をかけた。

「ブライザも、よくやってくれた」

「はい」
久しぶりにまみえた愛しい男に褒められたブライザは、嬉しそうに頷く。
「これからはブライザを公式にぼくの側室とする。よってイルベルトは、ぼくの義兄となるんだ。これからも頼むよ」
「勿体ないことでございます」
イルベルトも異存があるはずがない。エルフィンはブライザを抱き締めた。
「これで晴れて貴女は、ぼくの薔薇となったわけだ」
「はい。我が身はエルフィン殿の剣となりましょう。エルフィン殿の身辺を常に守る剣であることをお許しください」
「ああ、頼むよ」
こうして、エルフィンは名実共に、西方半島の覇者となることに成功したのだ。

※

「あの～……ブライザ？」
地位には責任が伴うものだ。
念願の西方半島の主となったエルフィンは、日々忙しく働いた。
考えねばならないことは多い。まずは首都の選定である。旧フルセン王国の時代の首都アヴァロンでは、いかにも南に過ぎてバランスが悪い。
だからといって廃墟となったヒューリアスを再建するのも、縁起が悪いように思われた。

次に北海商人と西海商人の抱き込みだ。半島にあるフルセン王国は海に囲まれている。彼らを活用しない手はない。

さまざまな案件を検討するエルフィンの歩いている後ろを、ブライザは半歩下がって昼夜を問わずついてくる。

執務の間の休憩時間にエルフィンが寛いでいると、その背中に抱きついていた。

「はい。なんでしょう？　我が主君♪」

エルフィンの戸惑った声に、ブライザはなんら疑問のない声で答えた。

「貴女は何をしているのかな？」

「はい。陛下の剣として、身辺警護をしております」

愛しい主君の顔をうっとり見つめながらブライザは答えた。どうやら、ロージーたち親衛隊よりも、身近な最後の盾として、自らを任じているようである。

「いや、まぁ、いいや……」

エルフィンがあいまいに済まそうとすると、お茶の用意のためたまたま近くにいたナターシャが珍しく怒った口調で口を挟んだ。

「ブライザさん、陛下が迷惑しております。離れてください。仕事の邪魔です！」

ナターシャがここまで感情をあらわにするのは珍しい。よっぽどブライザの行いが目に余るようだ。

しかし、ブライザは聞く耳を持たない。

「陛下の身に何かあった時のために側にいるのは当然だし、陛下がムラムラっときた時のために、いつでもどこでも手軽にやれる女がいることは悪いことではあるまい」

「まぁ、ナターシャ、そう目くじらを立てずに……」

女たちの対立を止めようとしたエルフィンの配慮に、ナターシャはむっとして出ていってしまった。

以後、ブライザのエルフィンへの密着はさらに公然となり、昼夜を問わずトイレや風呂、寝室まで当たり前についてくるようになった。

夜伽を三夜連続しようとした時、変化が起こる。

「エルフィン。ちょっと話がある」

国王の寝室に、親衛隊長のロージーを押しのけて、憤然たる顔のヴァレリアが入ってきた。

慌てたエルフィンは、布団から裸の上半身を起こす。

「え、ヴァレリア様、いや、ヴァレリア、なに？」

元々社交的とは言えない性格のヴァレリアが、怒気もあらわにベッドの上のエルフィンを足下から見下ろした。

しかも、一人ではなく、後ろにレイテ、ナターシャも続いている。

いずれの顔も、男の寝室に通ってくる女の表情と言うには、ちょっとばかり甘さが足りない。

「おまえは、わたしをありとあらゆる手段を使って弄び、側室にした。そうだな？」
「はい」
冷たい眼差しで確認してくるヴァレリアに怯えながらも、エルフィンは素直に頷いた。
ついでレイテが口を開く。
「坊やは、あたしのことを古女房みたいに大事だって言ってくれたわよね」
「も、もちろん」
さらにナターシャが泣きそうな顔で、口を開く。
「エルフィン様は、わたくしの身体を抱くととっても安らぐと言ってくださいました」
「ああ、そうだよ」
三人のただならぬ雰囲気に呑まれたエルフィンはビクビクして震える。その小心な少年王に対して、ヴァレリアは嘲笑した。
「まぁ、恋人ごとに適当なことを言っていることを咎めるつもりはない」
「は、はい。ありがとうございます」
完全に委縮しているエルフィンに、レイテが嗜虐的な笑みを浮かべる。
「でも、やっぱり、何事にも約束事は必要だと思うのよね」
「あの……やっぱり、わたくしの身体には飽きたのでしょうか？」
三人の女たちの中で、ナターシャはおろおろしながら独り弱気だ。それをレイテは横目に見ながら話を続ける。

「この娘なんて、あんたのためにパンツを穿かないで待っているっていうのに」
「あ、わたくしはエルフィン様の気分次第でお情けを頂ければ満足なんです……」
慌てて止めようとするナターシャを、ヴァレリアが一喝する。
「貴様も、愛人ならば、愛人として最低限の権利を主張しろ」
「は、はい」
迫力に負けたナターシャは小さくなって頷く。
それを確認したヴァレリアは改めてエルフィンを見下ろすと、その腰に纏っていたかけ布団を引き奪った。
バサッ！
「っ!?」
エルフィンの下半身には裸の女が侍(はべ)っていた。
投げ出された二本の足から右方向に尻を出し、横向きになりながら、まるで子猫のように蹲(うずくま)って男の逸物を、一心不乱に美味しそうにしゃぶっている。
ヒクッ。
そのさまに三人の女の目は一段と険しくなる。
「忙しくて夜伽に呼べぬと言うのならわかる。しかし、同じ城に寝泊まりしている時に、一人の女を三夜連続で寵愛するのはいくらなんでも、他の側室に対する仁義に反すると思うが、如何？」

「え～と、あはは、すっかり懐かれちゃって」
乾いた笑みでごまかそうとするが、それを受ける女たちの目は冷たいままだ。
それを察したエルフィンは、肩を落として溜息をついた。
「わかった。ごめん。ぼくの配慮が足りなかった。よかったら、みんな一緒に楽しまない？」
「……」
エルフィンの妥協案にも、女たちは怖い顔をしていたが、やがてレイテが動いた。
「いいの？　飢えた女が三人同時に加わるのよ。一人一発ぐらいじゃ済まないことはわかるわよね」
「もちろん、みんな満足させますよ」
冷汗を掻きながらも、エルフィンは力強く頷いた。
「そういうことなら遠慮なく」
素早く衣装を脱ぎ捨てたレイテは、寝台に四つん這いになって乗った。
「あ、わたくしも……」
ナターシャも、おどおどと服を脱ぎ、寝台に乗ってくる。最後にヴァレリアが溜息をついた。
「ふん、釣った魚に餌をやらぬ、という態度は、わたしは許さないからな。今夜は徹底的に搾り取るから覚悟しておくことだ」
まるで敵を前にして昂るかのように笑みを閃かせたヴァレリアもまた、衣装を脱ぎ捨て

て寝台に乗ってきた。
　エルフィンの右手からレイテ、左手からナターシャ、足下からヴァレリアが四つん這いになって寄ってくる。
「ちょっとあんたはいつまで、一人でエルフィンのおちんちん独占しているのかしら？以前、エルフィンが貴女を優先的に抱いていたのは、策略ゆえのことよ。もう優遇処置は終わっているわ」
「そんなことわかっている。しかし、わたくしも変わった。今のわたくしが陛下の剣として、常に腰に侍るのは当然のこと」
　逸物から一旦口を離して、煩わしそうに応えたブライザは、そのまま再び逸物を咥え込んだ。その態度に、みな呆れる。
　そこにヴァレリアが口を開いた。
「それじゃ、このバカ女に一つ、側室の嗜（たしな）みというものを教えてやるとするか？」
「ええ、いいわね」
「はい」
　レイテとナターシャも追従。
　エルフィンの見守る中、古参の女たちは礼儀を知らない新人の女に手を伸ばす。
　うつ伏せになりエルフィンの逸物を咥えるブライザの右の乳房をナターシャが、左の乳房をヴァレリアが取り、さらに股の間にレイテが手を入れた。

三人の同性から全身を撫で回されたブライザは、たまらず身悶え抵抗する。
「ん？　何をする、やめろ。わたくしにはそっちの趣味はない」
「趣味はなくとも教えてあげるわよ」
嘯いたレイテは、ブライザが逸物から口を離したのをいいことに、身体を反転させた。
「くっくっくっ、相変わらず絶壁女ね」
戦士として極限まで鍛えられているブライザには贅肉は少なく、結果として乳房もかなりあっさり目である。
同性として、ヴァレリア、ナターシャ、レイテの瞳に優越感が浮かぶ。さすがのブライザも羞恥心から胸元を隠す。
「乳房は大きければいいというものではない。陛下はわたくしの乳房も可愛いと言って愛してくださる」
完全に恋に盲目状態になっている女に呆れたレイテは、ついで局部を見下ろし、さらに驚きの声を出す。
「なに、あんたまだ剃毛しているの？」
以前、エルフィンへの忠誠心を試すためにした剃毛劇からすでにかなりの時間が経っているというのに、ブライザの恥丘は一本の陰毛もない禿げ丘だったのである。
それに対してさすがのブライザも恥ずかしげに言い訳した。
「その……伸ばそうとしたら、ご主人様が痛がってしまって」

一度剃毛した後、中途半端に伸びた陰毛というのは、剣山のように尖っている。そこに挿入して腰を振るうと、男の股間に刺さるわけで、滅茶苦茶痛い。

「はぁ～、つまり生え揃うまで我慢できずに、自ら剃る道を選んだわけか……」

呆れるヴァレリアの前で、ブライザは涙目になりながら応じる。

「だって、ご主人様に入れてもらえないと、わたくし、寂しくて死んでしまう」

「……あ、その気持ちはわかります」

ブライザの血を吐くような告白に、ナターシャは全面的に同意する。

「同じエルフィン様を好きな女として、わたしブライザさんのこと、決して嫌いではありません。でも、そのためにエルフィン様のお邪魔をすることは許せません」

嫉妬と使命感に燃えたナターシャは、ブライザの手をよけると再び乳首を口に含む。

「はぅ……、やめ」

「男がかかわると周りが見えなくなる女がたまにいるが、おまえがまさにそれだな」

ヴァレリアもまた、ブライザのもう一方の乳房を口に含む。

「はぁ……ああ……」

「うふふ、女の嫉妬は怖いのよ。それじゃあたしはここ」

最後にレイテは、ブライザの禿げ丘に口づけすると、クンニを始めた。

ピチャピチャピチャ……。

「はぁ、くっ、やめろ。わたくしは……、くっ、ご主人様以外に、ああ、この身を許すつ

もり……あああ！」

女の身体は女が一番よく知っている、という例え通り、ナターシャ、ヴァレリア、レイテの愛撫は的確だった。いかに強靭な意志を持つブライザでも、同性三人に玩具にされて、悶絶してしまう。

「ああ、いや、そんな、わたくし、わたくしは……ひぃ、ご主人様ぁぁ」

涎を噴きながら、エルフィンの顔を見上げたブライザは右手を上げて懇願してくる。

同性にイかされるよりも、愛する男にイかされたい、という意思表示であろう。その手を握り返してやりながらエルフィンは、三人の側室に声をかける。

「その程度で許してあげてよ。ぼくが全員満足させてあげるから」

その言動を受けて女たちは、ブライザの局部から口を離した。

「その言葉に二言はないわね」

ヴァレリアが眼光鋭く確認してくる。その瞳を真正面から受け止めてエルフィンは頷く。

「ええ、もちろんです」

「仕方ないわね。好きにしろ」

ヴァレリアがやめたのを機に、レイテ、ナターシャもブライザから離れる。

「ご主人様♪」

同性たちの意地悪な責めから解放されたブライザは、心底から嬉しそうな媚びる笑みを浮かべる。

その頭を撫でてやりながら、エルフィンは命じる。
「それじゃ、入れてあげるから、お尻をこっちに向けて」
「はい。我がご主人様」
ブライザは嬉々として、背中を向けて、両肘で上体を支えながら、下半身では膝立ちになって尻を高く突き出す。
その引き締まった尻を両手で持って、唾液に濡れ輝く逸物を添える。
「最初はブライザでいいよね」
「まぁ、そこまで出来上がっちゃっていればね」
レイテの言葉に、ヴァレリアとナターシャも頷いた。そこでエルフィンは腰を進める。
ズブリ！
「はぁん♪」
多くの同性に見られる中、背後から貫かれたブライザは、まるで狼が遠吠えでもするかのように背筋を反らして、気持ちよさそうな喘ぎ声を上げた。
だけではない。自ら腰をクネクネと動かし始めた。
「うお」
膣圧というのも、詰まるところは筋肉であるから、ブライザの膣圧が優れているのは自明のこと。その上薔薇の棘のようにザラザラとした強烈な抵抗である。
これで扱かれたエルフィンは、思わずうめき声を漏らし、ブライザの尻から手を離し、

彼女の両手首をそれぞれ持って馬の手綱を引くように操った。
「ああ、いい、いいです。ご主人様のぶっといちんぽ、ちんぽ、ちんぽ」
両手を男に取られながら、膝立ちになったブライザは胸を張り、涎を噴き、自ら腰をくねらせる。
身体能力に優れたブライザは、激しく腰をくねらせながらも、決して逸物が抜け落ちるようなヘマはしない。
ジュブジュブジュブ！
溢れ出る愛液が、細い太腿を失禁したように濡らしている。
「あん、あん、あん、あん、花が、花が散っちゃう！」
あたりはばからず嬌態を晒すブライザに、痴態を見せつけられた女たちが呆れる。
「うわ、自分からこんなに腰振る女、初めて見た」
「男に媚びまくりの腰使いね」
「……いやらしいです」
レイテ、ヴァレリア、ナターシャは軽蔑しながらも、頬を染め、羨ましそうな表情を浮かべる。
「ああ、いい、いい、いいのぉ♪　ご主人様のおちんちん、気持ちいいのぉ♪」
激しい腰運動でブライザの全身からはぬめるような汗が吹き出し、肌がつやつやと淫らに輝く。

まったく周りの見えていないブライザの姿に、ヴァレリアが溜息をつく。
「つまり、エルフィンを騙すための痴女の演技は、演技じゃなくて素だったってことか？」
それをレイテが受ける。
「男って口ではなんだかんだ言いながら、淫乱な女好きだからね。坊やが最近、彼女とばかり褥を共にしていた理由がわかったわ」
「なるほど、これをやられると、男も夢中になるのか」
ヴァレリアとレイテの会話の横で、ナターシャは何やら決意を新たにしている。
「そっか、わたしも、頑張らないと……」
何やら独り、腰の振り方を練習しだしたナターシャを見て、レイテとヴァレリアは同時に肩を竦めた。
「いずれにせよ、棘の抜けちゃった薔薇なんて、もう薔薇とは言えないわよね」
「ああ、こういうのを単なる痴女と言うのだ」
レイテとヴァレリアは、両腕を後ろに回した後背位で、自ら腰を振りまくって乱れているブライザの上体をさらに上げさせた。
「な、何をするつもりだ……、わたくしはご主人様だけのもの」
上体を上げられたブライザは、得意の腰使いを中断させた。
レズっ気はまるでないどころか嫌悪感すらありそうなブライザは、意地悪な同性たちの視線に若干怯む。

「次が支えているわ。とっととイキなさい」
「そういうこと♪」
ヴァレリアとレイテは、淫汗に濡れたブライザの耳元から首筋、胸元へと舌を這わせる。乳首を吸い、脇腹を舐め、さらに下りる。
「うわぁ、つるっぱげのオマ○コに、ぶっといおちんちんが出入りしている姿って、なんか生々しいわね」
「ああ、確かに予想以上に卑猥だな」
頷きあったレイテとヴァレリアは、その禿げ丘に接吻。棘のように跳び出す淫核を左右から舐めた。
「ああ、らめ、やめて、やめて、やめて、ひぃ、ひぃ、ひぃ」
ビクビクビク……。
同性に嫌悪感しかない女でも、男根をぶち込まれた状態で淫核を二人かがりで舐められたらたまらないのだろう。
白目を剥いた惚けた表情で、口角から涎を垂らす。
しかし、ヴァレリア、レイテの狙いはそれだけではなかった。二人の舌は、肉棒の穿つ蜜壺の狭間に入り舐め回し、それから肉棒を下り、肉袋を舐めてきた。
「ちょ、ちょっと……!?」
ブライザだけではなく、自らの身に危険を感じたエルフィンは震えたが、もはや時すで

に遅し。

二人の熱き舌は、肉袋の中の睾丸をペロペロと舐め、そして、それぞれの口内に含んでしまった。

「うっ」

男にとっての最大の急所が、嫉妬に狂う女たちの危険な口内に包まれたのだ。本能的な恐怖に駆られたエルフィンは身震いした。

（しかし、ここはじっと耐えるしかない）

エルフィンは肉棒をふかぶかとブライザの体内に押し込みながら、腰は使わずにひたすらに嵐が通り過ぎるのを待った。

レイテとヴァレリアはまるで睾丸を飴のようにペロペロと舐めている。

そんな時である。エルフィンの背中にフワリとした柔らかいものが押しつけられた。そして、右の耳元に熱い吐息がかけられる。

「ナ、ナターシャ!?」

「わたくしも、エルフィン様に楽しんでもらうために、腰を振れる女になります♪」

痴情に狂った少女は、愛しい男の背後から抱きついてきたのだ。尻のあたりにサラサラと当たるのはナターシャの陰毛だろう。

前面をぴたりと密着したナターシャは、その状態で身体を上下させる。

「あん、エルフィン様の背中でおっぱい擦れて気持ちいいですぅ♪」

「あ、ちょっ、ちょっと……ああ」

ブライザの、よく締まる上に、茨のようにブツブツな膣洞に逸物を入れているだけで、普通に考えれば男が満足するには十分な刺激だ。

その状態で射精寸前の睾丸を二人の美女の口内に含まれて舐められる。

極めつきに背後から、一見、清純そうな美少女の身体を押しつけられて、温もりを擦りつけられたのだ。

「あ……ああ……」

エルフィンは世にも情けない声を漏らして、震えた。

「うふふ、睾丸がピクピクしているぞ」

「そう簡単に射精していいの？　女はまだまだいるのよ」

ヴァレリアとレイテが嗜虐的に男を追い詰める。その口腔で甘噛みされている睾丸から溢れ出した熱い血潮が、肉棒を駆け上がっていく。

「ああ、ビクビク、ビクビク……す、凄いぃ……♪」

「くっ、ダメだ。止まらない！　あああ!!!」

断末魔のうめき声とともに、逸物は激しく脈打った。

ドクン！　ドクンッ！　ドクンッ！

「ひぃ～！　きた、きた、きた。ああ、イクゥウウウウウウウウッ!!!」

子宮に愛しい男の熱い精液を注ぎ込まれる。牝が体感できる至福の瞬間。膝立ちで股を



開いた姿勢のままアへ顔を晒したブライザが、下腹部を激しく脈打たせたと思ったら、ブシャッと熱湯を噴き出した。

「うわ、この女、あたしたちが下にいることを承知で漏らしやがった」

「まったく、絵に描いたような痴女ね」

レイテとヴァレリアは、不快さに顔をしかめながらも、女壺に口を突っ込むと小さくなっていく逸物を掘り出した。どうやら、このまま再戦を強要されるらしい。

「エルフィン様♪　エルフィン様♪」

ナターシャは周りの状況など委細構わず、自らの乳房と股間を男の背中に擦りつけるのに忙しい。

（まったくみんな好きだな。まぁ、仕方ない、みんなぼくの女なんだし、全員満足させないと。それにしても、国王ってほんと大変なんだなぁ）

使命感に燃えたエルフィンは、夜を徹して乱交に励んだ。

※

「お～い、エルフィン。今日は久しぶりにサイアリーズ方面の重臣どもも参加する定例会の日でしょうが。みんな集まっているわよ。いつまで待たせるつもりよ」

親衛隊長のロージーを押しのけて、寝室にズカズカと入ってきたカーラは、寝台の上を見て呆れる。

中央に座ったエルフィンの右側にレイテ。左側にナターシャが侍っている。

彼女たちの背中から手を回したエルフィンは、それぞれ外側の乳房を揉んでいた。下半身に目をやると、そこにはヴァレリアとブライザが、犬のように四つん這いになって、左右から逸物を咥えて貪っていた。

「うわ、美女を侍らせて楽しむ姿。まさに成り上がり男の醜悪な絵面そのままね」

カーラの評価を受けて、エルフィンは悲しげに溜息をついた。

「そう言わないでくれ。彼女たちが許してくれないんだよ」

エルフィンの逸物を挟んで、ヴァレリアとブライザが口喧嘩をしていた。

「こいつの悦ばせ方を誰よりも知っているのはわたしだ」

「ご主人様に至高の快楽を与えるのが、陛下の剣たるわたくしの務め」

エルフィンの寵愛の一位の座を巡って、二人は延々と対立をしているのだ。事態を悟ったカーラは肩を竦める。

「あぁ～、やだやだ。そんないろんな女のオマ○コの垢で汚れきったちんちんの何がいいんだか？」

「もう、ほんとでないから、勘弁して、あっ」

エルフィンの懇願に続いて、女たちの餌食になっていた逸物から盛大に液体が噴き出した。

それはベッドの脇に立つカーラの顔から軍服にかかる。

もはや種の尽きたエルフィンは、失禁してしまったのだ。それと悟ったカーラは激怒す

る。

「てめぇ、殺す！」

激情のままにレイピアを抜いて切りかかろうとしたカーラを、慌ててロージーが羽交い締めにする。

若き覇王エルフィンの道は、まだまだ前途多難である。

Takeuti Ken presents harem series official guide

竹内けん ハーレムシリーズ 公式ガイドブック

竹内けん特別インタビュー他、
「歴史年表」「人物相関図」
等々あの超人気シリーズの
世界観を網羅した
完全ガイドが登場!!

特別描き下ろし
イラストも多数収録!



Now On Sale!!

A5判／定価990円(税込)

KTC 特設サイトはこちらからアクセス!! http://ktcom.jp/harem/

キルタイムコミュニケーション小説シリーズ
あなたはどのタイプ？











詳しくはKTCのオフィシャルサイトにて！ キルタイム 検索 Click

電子書籍版も各ダウンロードサイトにて続々配信中!!

キルタイムコミュニケーション オフィシャルサイト

http://ktcom.jp/

◎雑誌、コミック、小説の**通信販売**もやってるよ!
◎二次元ドリームマガジン・コミックアンリアルの**バックナンバー**も買えるよ!
◎**ジャンル別**で作品も選べて超便利!
◎二次元編集部の愉快な**Blog**も更新中!



KTCの戦うヒロインオンリー漫画雑誌! 18禁ではないからこそ表現できるドキドキがある!!



二次元ドリームノベルズがアニメにも進出! 新生ブランド・クランベリーをよろしく!!



二次元ドリームノベルズから生まれた美少女ゲーム! 「ミルフィーユ」ブランドにて続々登場!



二次元ドリームノベルズが携帯電話で読める! 携帯サイト限定の書き下ろし小説もあるよ!

二次元ドリーム文庫208

ハーレムレジスタンス2

【電子書籍版】

著　者
竹内けん

装　丁
マイクロハウス　クリエイティブ事業部

発　行
株式会社キルタイムコミュニケーション
〒104-0041　東京都中央区新富 1-3-7 ヨドコウビル1F
●編集部 TEL.03-3551-6147／FAX.03-3551-6146
●販売部 TEL.03-3555-3431／FAX.03-3551-1208

※本作品の全部あるいは一部を無断で複製・転載・配信・送信したり、
ホームページ上に転載することを禁止します。
本作品の内容を無断で改変、改ざん等行うことも禁止します。
また、有償・無償にかかわらず本作品を第三者に譲渡することはできません。

©Ken Takeuti 2011-2012
当ファイルは、二次元ドリーム文庫「ハーレムレジスタンス2」
（2011年12月22日　初版発行）に基づいて作成しております。

http://ktcom.jp/